
異国恋歌～風空の姫～

霜月璃音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異国恋歌〜風空の姫〜

【Nコード】

N5488K

【作者名】

霜月璃音

【あらすじ】

緑豊かな国、トリランタには、七人の美しい王女がいた。第一王女のリラは王位継承者だったが、大国ルクタシアとの戦争に敗れ、王に望まれてルクタシアに嫁ぐことになってしまった。そこで彼女を待ち受けていた運命とは……？

運命の扉は、開かれた

一面に広がる緑の草原、青い空……。エメラルドの瞳が、それらをじっと見つめていた。黒い髪を強い風がさらって、舞い上がらせる。彼女の脳裏に色鮮やかに蘇るのは、四千と四百年分の記憶……。その中でも一番強く印象に残っていたのは、四百年前のものだった。そつと目を閉じる……。あの日々は、彼女には昨日のことのようだ。

まるで、夢を見ているかのような大地。ゆつたりとした羊雲が青い空を歩き、時々太陽を陰らせる……。その太陽に合わせて、雪解けの水を湛えて走る小川の水面は、きらきらと揺れ動く。その岸には、まだ大地に顔を出して間もない若草と、春一番に花を咲かせた小さな青い花が、風に揺られて揺っていた。その心地良い揺れをふと止めて、花を手折った白い手があった。憂鬱そうな、エメラルドの瞳……。そしてその細い手で手折った花を、小川に浮かべる。花は、静かに川面を走り出した。一見すればそれは午後の退屈な時間を持て余しているだけのようにも見えるが、彼女の場合はそうもいかなかった。

『トリランタが、負けた……。！』

城内は騒然としている。今にも着くのではないかという、東の大国、ルクタシアからの使者を迎える準備で……。

『和平の使者だなど……。何を要求するつもりだ……。？』

領地か、奴隷か、はたまた彼女たち姉妹の内一人を愛妾として貢物とさせるか……。白い手の持ち主は、その拳を思い切り大地に打ちつけた。彼女の手の下で、若草が悲鳴を上げた。だが使者と名のつく以上、彼女も出迎えなければならない。いつまでもそうしている訳にもいかず、長い黒い髪を風になびかせて、彼女は城に向かって歩き出した。

今彼女は、雛壇の上に七つ据えられた椅子の中でも最も上等なものに腰掛けていた。闇の深淵から持ち帰ったかのような漆黒の髪を結い上げ、鋭く不純物の混じらないエメラルドの瞳は、使者に長々と挨拶する大臣へと向けられていた。彼女は、この国の第一王女であった。

「ふ……あ。」

また、これで何度あくびを噛み殺したことだろう、と思いながらも必死でその目を開けていた。いよいよ敵国、ルクタシアの使者が前に出た。

『何を要求するつもりだ……？領土か？奴隷か？』

冷たい視線で使者を見つめていた彼女は、耳を疑うこととなる。ルクタシアの使者は前に進み出て、ゆっくりと羊皮紙を開いた。そして、大きく息を吸い込む。

「我らがルクタシア王は、以下のことを降伏の条件としてトリランタ国王に申しつける。一、ルクタシアと同盟を結ぶこと。二、ルクタシアに、余剰な作物から援助をすること。三……。」

そこで、使者が一度口をつぐんだ。

「早く続きを……。トリランタは、必ずやその条件を飲みましょう……。」

王が、少し顔を苦痛に歪めながらそう言った。彼は、歴戦の覇者だった。ところが、ルクタシアの王が変わってすぐに起きた領地をめぐる戦争で、彼は初めて敗北を喫したのである。その表情は、敗北の辛さを物語っていた。

「三、同盟の証として、トリランタの七王女の内、最も賢く美しい王女をルクタシア王妃として送ること。以上である。」

城内は騒然とした。並みいる群臣たちは、皆どの王女が最も美しいか囁き合った。

「はて、困りましたな……。我が王女たちは、皆それぞれに美しい。」

確かに、王の言う通りだった。この国の王には王子がいなかった。

代わりに、七人の美しい王女がいたのだが……。七人が揃いも揃って美し過ぎるために、国民が美の女神の神罰が下るのでは、と密かに囁き合っていた程だ。

「しかし、賢さで言うならばやはり第一王女のリラでしょう。……ですが、彼女はトリランタの王位継承者です。いかがするべきか？」今まで話していた使者の横にいた青年が口を開いた。

「それでは、リラ王女においでいただきましょう。王はもともと賢く、美しい王女をお望みなのですから。」

顔を上げたその青年の瞳と、エメラルドの瞳が結ばれた。その時だった。彼女の体を、何か形容し難い戦慄が駆け抜けた。鼓動が一瞬で激しさを増し、体が震える……。二十歳そこそこの、黒い髪に不思議な青紫の瞳の青年……。

『こいつ、前にどこかで……。？いや、そんなはずはない……。』

「ダメよ！私は認めないわ！」

王妃が、そう声を上げた。体をワナワナと震わせて、立ち上がる……。

「お母様、お気になさらないで下さい……。。」

彼女も立ち上がった、その母を宥め^{なだ}に歩く……。

「私がルクシアへ行けば、他に誰も苦勞をしなくて済むんですから。こんなに良心的な条件を聞いたのは、初めてですよ。それに、他の妹たちはまだ子供。嫁がせるのはあまりにも不憫です……。」

「でも……。」

顔を覆って嘆く母親の肩を、白い手が包んだ。

「隣国ですよ？地の果てまで行く訳でもありませんし……。」

「でも、つい昨日まで戦争をしていた敵国なのよ？あなたがどんな目に遭うか……。」

その言葉には、笑って見せる。

「愛妾としてならそれも有り得たでしょう。しかし王妃として、と言っているのですから、何も起きませんよ。それに、同盟国出身の姫を恐ろしい目に遭わせるだなんて鬼畜にも劣るようなこと、まさ

カルクタシアの国王陛下もなさらないでしょう。」

使者に視線を当てる。もちろんでございませうとも、という答えが返って来た。それで、彼女の父であるトリランタ国王は心を決めたようだ……。

「我が国では、第一王女のリラをルクタシア国王と婚姻させ、トリランタの王位継承権は剥奪とする。また、これを第二王女エレーヌに与えて今回の同盟に調印し、食料も余剰分よりの援助を行うこととする。」

彼女のルクタシアに向けての出発は一週間後と決まり、解散となった。自分の人生を変えるようなことが決まってしまったのに、実感がこない……。自分の意志とは無関係に決まったからなのかもしれない。彼女だって、本当は見も知らぬ国に嫁ぐなど、したくはなかった。だが、王族として生まれてしまった以上はこれも仕方がないのだ。その時、後ろから彼女の肩に冷たい手がかけられた。

「お姉さま…… 大変なことになってしまわれましたね……。」

自分が敵国に嫁ぐことになったかのような、苦しい物言い……。彼女に話しかけてきたのは、半年分だけ年下の腹違いの妹、第三王女のジュリアだった。彼女は年齢的には第二王女なのだが、母親の身分が低いために第三王女とされていた。銀青色の髪は、流れる水を思い起こさせる。

「ルクタシアに行かれる時には、お供をさせて下さいね。」

彼女はわざと明るくそう言って、リラを自分の部屋に招き入れた。彼女の部屋で一番目を引く物……。それは、彼女の枕元に安置されている水の宝玉だった。窓からの光で微妙な光の屈折を織りなして輝いているそれは、ジュリアが水と自由に話すことができる水の子である証拠となっていた。

『精霊の聖具か……。どこにあるのかしら？』

リラも同じく風の精霊と言葉を交わすことができる風の子だったが、彼女の手元には風の聖具、風の宝鏡はなかった。しかし、世界中のどこかで、かの聖具は必ず彼女に見つけられるのを待っているはず

なのだ……。現にジュリアは水の宝玉を、世界一深いと言われるトリランタの湖、悲しみの湖で見つけて来たのだ。湖に幼い彼女が落ちた時には、もはや助かるまいと誰もが思っていた。しかし、彼女は戻ったのだ。精霊の導きで引き込まれた、湖の底から……。

『あ、リラの花、今年も咲いたのね……。』

ふと窓の外に目を向けた彼女は、庭園の一角にその視線を当てた。王宮にはいくつもの庭があり、その内の一つには一面にリラの花が植えられていた。彼女の名前は、この花から取ったものだ。彼女が生まれた日に、リラの木々は風の精霊たちが運んで来た春風で、一斉にその花を開いた。それを見た彼女の母が、そのまま彼女の名にしたという……。以来、彼女の誕生日には、必ずこの花が咲いていた。それは、今年も同じ……。彼女はやっと今日、十六になったばかりだった。エメラルドの瞳が、ぼつと庭を眺める……。運命の扉が、すでに開かれていたことも知らずに……。

その頃、彼女に謎の戦慄を走らせた青年は、案内された部屋であちこちを見てもなく見回していた。荘厳質素をよしとするトリランタの城は、壮麗華美を大事とするルクタシア城とは大きく違っている。しかし、そんな城も何よりも華麗に見えるような美しい残像が、彼の脳裏にしっかりと焼き付けられていた。先程リラが感じたものと同じ、強い戦慄とともに……。彼は、あの感覚に覚えがあった。

『ちょうど、この時期だったはずだ……。』

彼の目には、いつの間にか過去の追想が映っていた……。

城の中は、暖炉の炎で暖かだった。部屋で一人、少年は本を読んでいた。まだたった三つのはずなのに、一人で……。彼の手の中でその目を奪っていた本は、隣国トリランタに伝わる古い伝承を書いた物だった。風の巫女が、雪の千年王国の運命からトリランタを救う、という話……。いよいよ風の巫女が精霊に歌をささげ、一面の銀世界だった大地が緑豊かに蘇ろうとしている時だった。

ピシッ！

突然の出来事に、少年は思わず本を取り落としてしまった。同時に浮かんだ言葉は、呑み込まれることなく少年の小さな口から飛び出した。

「……探さなくちゃ、探さなくちゃ！」

自分でも、叫んでからハツとした。一体自分は、何を探すというのだろうか……？ふと窓の外を見やると、先程まで降り続いていた雪がやみ、赤い夕陽がその身を地平に沈めていくのが少年の目に映った。まるで、少年を西へと誘うかのように……。

『そうだった、あの時だ……。』

先程の強い戦慄は、その時のものだった。

『そして、ようやく見つけた……。おそらく彼女が、僕の、探し物……。』

もう一度、彼女の顔を思い描く……。

『黒い絹系の髪、真紅の唇。瞳の色は……エメラルド。いや、違う。深い海の、底の色……。』

最初モノクロだったその顔は、今は色鮮やかに彼の脳裏に映っている……。

後にして思えば、この日が、運命の日だったのかもしれない……。二人がそれに気付くのは、まだまだ先の話だが……。春風が、豊かな緑の上を渡って行った。

運命の扉は、開かれた（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。異国恋歌シリーズ第二弾、異国恋歌風空の姫の第一話をお届けいたします。ここまでお読み下さっている読者の皆様、本当にありがとうございます。今作は、前作に引き続いて主人公が姫という設定です。好きだなあ、と自分でも思っています。

前作の印象からまだ抜け出せていないので、手探りの状態で書き始めてしまいましたが、なんとか軌道に乗せて行きたいと思っておりますので、どうぞお付き合い下さいませ。

私的なことで、もう一つ。前作を完結してしまったことになっていますが、どうしてももう一本書きたくてたまらないお話が出てきてしまいました。そういった場合はどうすれば良いでしょうか。どうか、アドバイスをお願いします。

それでは、また次話でお会いしましょう。どうもありがとうございます。

さようなら、幼い記憶たち

日の光が柔らかにベットに落ち、閉じている瞼を押し開く……。とうとう、夜が明けた。まだ十六のリラにとつての、運命の夜明けである。カーテンを開けると、今まで柔らかだった光は強くなつて差し込み、彼女は思わずエメラルドの瞳を細めた。

「おはようございます、王女様。」

今日で別れることになった侍女二人と、彼女の嫁入り先、ルクタシアまでついて来ることになった侍女二人が、衣装などを捧げ持つて部屋に入つて来た。いつもの緩い楽なドレスではなく、花嫁、いや、貢物としての衣装に着替える……。水色の下地に青い飾り布を纏う形のドレスは、彼女の体をピッタリと締め付けた。そして、場違いにも思える程真つ赤なガーネットの額飾りをつける。それは、トリランタから嫁いで行くの王女の証……。支度が終わったところで、彼女は朝食に向かった。

「王女、どうぞお手を……。」

廊下に出たところで、彼女を呼び止める声があつた。そこに立っていたのは、衛兵長のコルレッドだった。

「……お願いします……。」

侍女に下がるように合図をして、彼のエスコートに従う……。遅すぎる位ゆつたりとした足取りで、二人はしばらく黙々と歩いていたが、やがてコルレッドの方が重い口を開いた。

「本当に……行つてしまわれるのですね……。」

彼女の額で揺れている切れ長のガーネットにちらと視線を当てて、彼はそう言った。

「長い間、あなたには本当に迷惑をかけたわ……。」

リラの目は床に落ち、ぼんやりとしていた。コルレッド衛兵長は、陽気で快活、その上賢く人望も厚かつたので、彼女が王位を継ぐ時の縁組の相手として皆が認める人物だった。しかしそれには、他に

も理由がもう一つ。二人は幼馴染で、リラに弓や剣などあらゆる武術を教えたのもコルレッドだった。おかげで彼女は、その辺の兵士など相手にならないほどの優れた女戦士となり、彼はその腕が認められて弱冠二十歳にしてトリランタの衛兵長にまでなっていた。そして二人は、誰の目から見てもあきらかな程、惹かれあっていた……。

「王女、私は……。」

コルレッドは迷った。告げるべきか、否か……。時も足も歩みを止めたが、彼女の長い髪だけが波打っていた。その一瞬に彼は自暴自棄に陥り、全ての思考が頭から消えた。彼女の手を引き、細い肩をその腕の中に収める……。ほんのりと、高貴な百合の香りがした。

「……無礼です、コルレッド衛兵長……。無礼です……。」

彼女は、彼の胸を勢い良く押し返した。

「さようなら……。」

そう言っただけで去って行く彼女の目に涙が光っていたのを、コルレッドは確かに見た。だが、それ以上彼女に声をかけることも、その歩みを止めさせることもできなかった。彼女は、彼の手を遠く離れてしまったのだ……。微かな百合の香りだけが、彼の元に残されていた。

「おはようございます、皆さん……。」

彼女が席につくと、一斉に食事が始められた。王妃は、辛うじて席についている、という状態だった。王と王妃の他に、リラと六人の他の王女たち……。王と王妃の間には娘しか生まれなかったため、王の側近や大臣たちは王の寝室に次々に自分の娘を送り込んだが、いずれも王女ばかりを生んだ。それを皮肉ってか、皆が皆、美し過ぎた……。そのために、今回だけは特例で第一王女であるリラが王位継承者となっていたのだった。

「ジュリアにはリラとともにルクタシアに行き、親善使節の役割を果たしてもらおうと思う。」

王のその言葉で、ジュリアはリラに向かって笑いかけた。元気付けようとしてくれているのはわかっていたが、先程別れたコルレッドのことが気がかりでそれどころではなかった。食事も、上の空という状態だ……。

『コルレッド……。兄のように、いえ、それ以上に好きだった。…仕方なくとは言え、私はあの人を裏切ったことになるのね……。』心は塞ぐ一方だ。それでもグツと涙を飲み込み、食べたくもない食事を限界まで詰め込む……。誰にも心配はかけられないし、弱音も吐けない。彼女は、何度か城内の誰かから毒蛇入りの贈り物をもらったことがあった。送り主の見当はついていない。第五王女、彼女の腹違いの妹のドロシーだ。どうやら、王位を狙っているらしい。祖父や叔父に焚きつけられたのか、あるいは彼女自身の意思なのか……。そこまでは、リラも知らない。そして、証拠がないから彼女を責めることもできない……。無理に口に押し込むのも限界で、彼女は席を立った。

「もういいの？ リラお姉さま？」

いつものように鈍い第四王女、エマがそう訊ねてきたが、隣のジュリアがいつになく鋭い目付きで彼女を見たので、黙って食事を続けた。リラが席を立てすぐにドロシーも席を立ったので、彼女はとてつもなく嫌な予感がした。それに反して、ドロシーはにこやかに彼女に話かけてきた。

「とうとうお嫁に行かれる日ですわね、お姉さま。」

リラは目も合わせずにそうね、と言った。彼女は、あまりにも信用ならない……。

「残念ですわ、毒蛇を送るべき相手が変わってしまったて。」
後でエレーヌに注意しておこう、と彼女は心の中で呟いた。

「まあ、お姉さまには良いことですわ。せいぜいルクタシア王の寝首でも搔いてお戻りなさいませ。」

彼女は言いたいことを言いたいだけいうと、その場に立ち止まって嫌な高笑いを響かせた。リラは、耳が聞こえない、という自己暗示

をかけながら歩いた。自分の部屋に戻ると、窓の外、遙か向こうには光を反射する小川が見えた。あそこに花を流し何も心配がなかったあの日が、遠い昔のことのようだ。ただ彼女には、ほんの少しの希望、という物も残されていた。

『もしルクシア王が、勇気ある優しい青年だったら……。』

あのコルレッドのことも、いつかは忘れさせてくれるような……。彼女は、そんなあり得ない考えに辛うじて支えられていた。しかし、そのような噂は一向に聞こえてこない。自分の意のままにならない人生を歩んでいる彼女が、壊されないようにと自己を守る幻影に過ぎないのだ。

コツコツ……。

ノックの音が、彼女を現実の世界へと呼び戻した。あまり戻りたくなかった世界……。

「どうぞ。開いてます。」

戸を開けて入って来たのは、リラの唯一の同母妹にして彼女の代わりに王位継承者となったエレーヌだった。

「お姉さま……。私、たまらなく不安で……。」

彼女はそう言っただけで目を伏せた。妹に、歩み寄る……。そして、勤めて優しく訊ねた。

「王位継承だなんて……。大き過ぎます……。私に、堪えられるかしら？」

その瞳に見られるのは、自己に対する不信と恐れ。リラは、一瞬迷った。彼女を励まし勇気づけるべきか、それとも、一喝するべきか。パシンッ！

大きな音が、部屋中に響いた。エレーヌは若葉色のその瞳を、信じられないというように大きく見開いた。

「そんなこと言っちゃダメよ、エレーヌ！これはあなたが越えなきやいけない試練なの！自分で捨てられるなら、苦労しないわ！王位が欲しくてあなたの命を狙っているような人間もいるんだから、弱気にならないで！自分あての贈り物の箱から、毒蛇が出て来ること

だつてあるんだから！」

エレーヌは驚いたまま硬直していた。まさか姉が、たった一人でそんな辛いことを背負っていたとは思ひもしなかった。ただ毎日未来の政治について学び、武術の稽古を受け、国策について案を練っているだけだと思っていたのだから……。

「ごめんなさい。こんなこと言っちゃいけないのは、わかってたのに……。ものすごく、不安だったの。それで……。」

一度上げた目を再び伏せた妹の肩を、そっと抱いてやる。

「もういいの。わかつてくれたんだもの……。頑張つてね！」

「ええ……。お姉さまも、お元気で……。」

そして、二人は一度お互いをひしと抱き締めてから離れた。微笑みを交わして、窓の外に目をやる。どうやら、彼女をここから連れ出す馬車の準備が整ったようだ。

「行かなくちゃ……。」

もう一度、彼女の部屋を見渡す。ここには、おそらくもう二度とは戻つて来られない……。懐かしい、思い出の数々。コルレッドとともに過ごした、幼き日々……。それらは、全てこの部屋に置いて行く。彼女は、そう決めた……。

「お姉さま、参りましょう……。」

エレーヌに付き添われて、部屋を後にする。そして、城外にその足を踏み出す。城門に通じる道には、四頭の白馬が曳く真っ白な馬車を用意されていた。どうやら、ジュリアは先に乗っているらしい。馬車のそばには、王や王妃をはじめ、城の多くの人々が集まっていた。もちろん、コルレッド衛兵長も……。

「リラ、気をつけて行くのよ……。」

王妃は無理に作り笑いを浮かべたが、泣き腫らした目が痛々しかった。娘を手放すのが、本当に苦しいようだ……。続いてリラは、王の前に歩み出た。

「行つて参ります、父上……。」

「……。ああ。両国の親善のために、しっかりと努めるように。」

王もやはり、寂しそうな表情を隠し切れていない。リラは、馬車に乗り込んだ。そして飾り窓を開け、彼の姿を探した。自分をしっかりと見つめ返してくれるその視線を、もう一度確かめたかった。……いた。自分に向けられたその目に、彼女は懸命に訴えかけた。

「……好き。あなたが、好き……。」

彼の視線からは、知っていました、という言葉が読み取れる……。そう、彼らはお互いに、相手の心を知っていた……。それでも、離れなければならないのだ……。辛くなったりリラは、飾り窓を閉じた。馬車が、ゆっくりと走り出した。日の光に向かって……。彼女の、行く先での運命も知らず……。

さようなら、幼い記憶たち（後書き）

異国恋歌〜風空の姫〜第二話が完成しました。読者の皆様、ここま
でお読み下さってどうもありがとうございます。今作は、小刻みに
更新させていただく予定でありますので、どうぞよろしく願いい
たします。

お伽話は、実在した

馬車は、ルクタシアに向けて順調に進んでいた。彼女が心を置いて来た、あの城からどんな遠く離れて……。道々、ジュリアが一緒なのは心強かった。不安定な状況の中で、彼女の温和な性格はリラの心を和ませるものとなっていた。馬車でこんな大袈裟な隊列を組んでいるのだから、ルクタシアの城までは一週間はかかるだろう、とリラは予想していた。まだ四日目だ……。彼女は、いい加減うんざりしていた。

「おはようございます、王女様方。お加減はいかがですか？」

馬車の戸を開けて朝の挨拶に現われたのは、あの青年だった。黒い髪、青紫色の神秘的な瞳……。リラはまたあの戦慄が体を駆け巡るのではないかと思っただが、今度はそのようなこともなかった。

「ルクタシア城までは、あと幾日か？」

リラの問いに、使者は一礼して三日でございませう、と答えた。

「わかりました、残り三日も安全にお願いします。」

そう言っただけでジュリアが微笑んだ時だった。

ドドオオオオオオオン、ズガガガガッ！

「何事だっ？」

リラもジュリアも身構え、青年も腰に佩^はいていた剣の柄に手をかけた。叫び声と号令が、一度に上がった。

「襲撃だーっ！闇の襲撃だぞっ！全員配置につけーっ！」

青年は軽く舌打ちして馬車の戸を閉めていなくなり、ジュリアは水の宝玉をはめた大ぶりな杖を固く握り締めた。リラも、太腿のベルトから懐剣をはずした。小ぶりな物だが、護身用には十二分な物だった。

「馬車だ！風の子は馬車にいるぞ！馬車を狙えーっ！」

地の底から響いてくるような、邪悪な声。

「狙いは私かっ？」

その場に留まってはジュリアも危険な目に遭うということがわかった。リラは、馬車を飛び出した。

「出て来たか、風の子……。」

先程の邪悪な声の主は、耳が長く尖り、口がそこまで裂けている、魚の鱗のような物に全身を覆われている男だった。

「お前……何者だ……？」

リラが油断なく彼を睨み付けて言った言葉に、その男は愉快そうな笑い声をあげた。

「人の子ごときが我が名を訊ねるか？……まあ良い、人の子であっても、精霊の子であるそなたは特別……。我が名はヴィシアシー。闇の帝国四大忠臣の一人よ。」

そう言ってヴィシアシーが三叉の鉾を高く掲げた時だった。突然辺りに轟音が響き渡り、幾つもの水竜巻が敵陣を襲った。

「くっ……まさか、水の子がいるのか……？」

ヴィシアシーの燃えるような憎悪の視線が、馬車の戸口で杖を掲げて震えているジュリアに注がれた。そして、その杖の先の水の宝玉にも……。

「ちっ、皆退け！精霊の子が三人もいては、この手勢だけでは勝ち目がない！」

ヴィシアシーのその合図で、フツという音とともに、敵は皆空間転移を行って逃走していった。リラは、ジュリアに駆け寄った。

「大丈夫、ジュリア？今のは……？」

「私の術を、水の宝玉の力で強めて放った物です。こちらに敵意を抱く者にしか害を及ぼさないのですから、便利ですよね……？」

まだ青い顔に、彼女は笑顔を浮かべた。それに、リラも微笑み返してやる。

「すごい技ね……。」

「お姉さまの弓には負けますわ。なにせ、二度とは見られない逸材、とまで言われている位なんですから……。」

「御二方とも、お怪我はありませんか？」

後ろから声がかけられたので振り返ると、そこには先程の青年の姿があった。

「大事な。それより、先を急いだ方が良いのでは？」

青年は、御意、と言って下がった。彼女たちが馬車の中に戻ると、それから五分もしない内に馬車の車輪がまた騒がしい音を立て始めた。先程までよりも、少し速いようだ。

「この様子なら、お姉さまの予想よりももう少し早く着けるかもしれませんわね。」

「そうね……。」

ジュリアの話を経く受け流し、リラは別のことを考えていた。馬車が再び走り出す前に、ルクタシアの兵士たちが囁き合っていた話だ。

「まさか、闇の襲撃に遭うとは思ひもなかったな。」

「来るだろうよ。これは大地と風の婚姻なんだ、闇にとつてもありがたいことではないだろうよ。」

「それもそうだな……。」

『闇にとつては迷惑とも言える、大地と風の婚姻……。それは、一体どういう意味だ？』

これには、二通りの解釈のし方があった。まずは、ルクタシア王が大地の子で、そこに風の子であるリラが嫁ぐから、という意味。だが、これが闇の帝国、ハーバナントにどんな悪影響を及ぼすのかはわからない。二つ目は、大地とはルクタシアを表し、風とはトリラントを表す、という説。二つの国は、古来からそれを表す国として知られていた。確かに、これを機に世界中に同盟の輪が広がって行けば、闇の帝国にもありがたない話ではある……。

『それに、ヴィシアシーが言っていた精霊の子が三人、とは……？』
彼女たち二人以外に、女性はトリラントから連れて来た侍女が二人のみ。しかし彼女たちは、精霊の子ではない。精霊の子は、各国の王族の間にのみ生まれるはずなのだから……。そうなると、他のも

う一人は男性のほずである。彼女の脳裏に、半分に分れてしまった石板が蘇って来た。地下の古文書の山の中に埋もれている、うさなくさい、と彼女が一目見るなりに思った石板……。それに記されていた文句も、鮮明に……。

天女の如き水の子、命の源を司り、人々に慈愛をもたらす

勇者の如き炎の子、破壊を司り、人々に勇気をもたらす

天使の如き光の子、希望を司り、人々に望みをもたらす

暗夜の如き闇の子、沈黙を司り、人々に静寂をもたらす

女神の如き風の子、平等を司り、人々に自由をもたらす

男神の如き大地の子、豊穡を司り、人々に平和をもたらす

妖精の如き時の子、悠久の流れを司り、人々に安息をもたらす

ここからわかることは、おそらく炎、闇、大地の子は男性であるということ。時は、いまいちはずきりとしてはいないが……。つまり、彼女たちの他に紛れ込んでいる精霊の子は、このいずれかだということだ。

『結局、わからないことだらけじゃないか……。』

また無言で、馬車の外を見つめるリラだった。

……ガタゴトガタゴト、ガタンツ！

キキイイイ……。

……ガタゴトガタゴト……。

門は、軋んだ音を立てて開いた。細部まで、壮麗な装飾を施した城……。

『私の葬られ先か……。』

それを見つめる彼女の眼は、なんとも冷たい。しかし、今の彼女にはそんなことを考えている余裕がなかった。異変を感じたのは、ルクタシアに入つてすぐのことだ。春の雪解けというものが、まるで進んでいない……。その雪の深さは、真冬そのものだった。そしてトリランタにいた時は聞こえていた風の精霊たちの声が全く聞こえない。まるで、死に絶えてしまっているかのように……。風は吹い

ている。頬を優しく撫でて過ぎる。だがそこからは、生命の息吹という物がまるで感じられないのだ……。

「雪解けが遅いにしても、異常ね……。」

「ええ、何か嫌な感じがしますわ……。」

彼女の言葉に、馬車の向かい側に座っているジュリアからの返答があった。彼女も、何かを感じているようだ……。

ガタゴトガタゴト、ガタン！

馬車がその車輪を雪の上に止め、今度こそ動かなくなった。どうやら、城の前に着いたようだ。馬車の戸が開けられる……。

「姫君、どうぞお手を。」

またあの青年だった。どうやら、彼がこの行列に加わったルクタシアの人間の中で一番身分が高いようだ。リラに手を差し出すように促す位なのだから……。そして、差し出されたその手に自分の手を重ねる……。

「……！」

彼女は、声にならない悲鳴を上げてその手を引つ込めた。また、あの戦慄が走ったのだ。青年の温かい手に、彼女の異常なまでに冷たい手が触れたその瞬間に……。

「いかなさいましたか？」

「……なんでもない。」

どうやらこの青年の方は何も感じていないらしい、彼女の気のせいかもしれない……。そう無理矢理自分を納得させて、彼女はその手を取った。城の中に、案内される……。

「王妃様のお部屋はこちらになります。御用があれば、あちらのベルでお知らせ下さいませ。」

彼女を案内してくれたルクタシアの女官は、そう言って部屋を出て行った。それを確認してから、リラはあちこちを見まわした。繊細で優しい模様の絨毯をはじめ、サテンやレースのカーテンも、ベッドの天蓋からひらひらと垂れている薄衣のカーテンや寝具類一式、

花を満杯に生けた花器に至るまで、全てが淡いグリーンに統一された、美しい部屋だった。

『なかなかいい趣味の部屋……。綺麗……。』

彼女が感心しているところで、ノックの音が響いた。

「どうぞ。」

短い返事の後に、トリランタから連れて来た侍女が二人、衣装箱を捧げ持つて入って来た。

「失礼いたします。御婚礼の衣装と今夜の晚餐の衣装、それに、ルクタシアの陛下からの贈り物、というドレスが届いております。」

「……見せて？」

彼女が衣装箱を覗き込むと、薄桃色の婚礼用の衣装と真紅の晚餐用の衣装、それに、こちらまで淡いグリーンのドレスが入っていた。何の気なくそのドレスを手に取る……。その裾から、一枚のカードがこぼれた。

「緑の瞳の姫へ。十六歳の誕生日に。っ……。？」

「どうかなさいましたか？晚餐のお支度をお手伝いいたします。」

「え、ええ……。」

侍女が彼女の着替えに取り掛かったが、彼女は全く別のことを考えていた。きつくありませんか？などと聞かれても、上の空……。

『年だけならわかるけど……。どうしてルクタシアの王が私の目の色まで……。？』

会った記憶は、ない。今日が、初めてのはずなのだ……。それに。

『この国では、なぜ風の精が死に絶えているの……。？もしかしたら、他の精霊も……。？』

考えれば考える程、どんどん深みにはまって行く……。彼女の思考は、完全に囚われてしまっていた。

通された晚餐会場には、重臣と思われる数人とジュリアがいるのみだった。リラの隣は、まだ空席となっていた。

「陛下はどうされました？」

彼女の問いに誰もが顔を見合わせて俯く中でただ一人、あの青年だけが彼女を真っ直ぐに見つめ、答えた。

「陛下は急な御病気でお越しになりません。」

「そうですか……。」

彼女が席に着いたなりに、重臣たちは揃いも揃ってとんでもないことを言い出した。

「王妃様は、風と話すことができる風の子だと伺っております。…

…すでにこの地の異変にはお気づきでしょうか……？」

来た。彼女が聞きたいと思っていた話と、関連性があるに違いない。

「ええ。この地では、風の精の声を聞くことができます。まさかとは思いますが、この地ではどの精霊も死に絶えているのでは……？」

重臣たちは皆俯いた。それから、その内の一人が小さくそうです、という答えを返して来た。

「そこで、風の子である王妃様に……。」

「待って下さい。私はまだ聖具を見つけ出してすらいないのでしょ？つまり、今のままでは私は特別なことは何もできません。精霊の聖具に一番近い人の子、というだけなんです……。」

突拍子もない願い事をされてはたまらないと思って、彼女は先に予防線を張った。だが、彼らの陳述は続いた。

「わかっています。ですが王妃様、どうぞこのルクタシアを、ひいては全世界をそのお力でお救い下さい！」

「はあ……。」

もはや、肩をすくめてみせるしかない。彼らは、本当に先程の彼女の言葉を聞いていたのだろうか……？そんな彼女の様子をよそに、彼らの話は続いた。

「こちらにいるフェ……フェリドも王妃様と同じ精霊の子で、大地の子なのです。現在の国王陛下の、いここにあたる血筋の者です。」
あの青年が、軽く会釈をして見せた。そうか。彼女はこの瞬間に、あの謎の戦慄の意味を知った。精霊の子は、時の子以外はみな相対

する属性の者がいる。その間には特別な絆があるというから、おそらくそれがあの戦慄の理由だったのだろう……。

「それを言うなら、今回親善使節として来ているジュリアも水の子ですよ。彼女がいたおかげで途中であつたハーバナントからの襲撃から回避できたんです。」

リラの言葉に、ジュリアは重臣たちに向かって頷いてみせた。いつも誰にでも向ける、優しい笑顔で……。水の子が慈愛をもたらすというのは、本当に違いない。彼女を見てみると、あのうさんくさい石板も真実を書いているように思えてくる……。

「それに、彼女は真正正銘の水の子です。聖具を手にしているのですから……。」

重臣たちは、さすがにその言葉には目を見張った。ジュリアはまた優しく微笑んでから、杖にはめられた宝玉を取って掲げて見せた。

「これが水の聖具、水の宝玉です。その中心に、水の力の宝石、サファイアが埋め込まれています。」

確かに、蝋燭の光を受けてより一層青く輝く物が、その中心にあつた。

「本題に戻りましょう。精霊の子である私たちに何を頼みたいのですか？」

彼女のその言葉に、誰もが一瞬固まり、口を閉ざした。それから、一人がポツリ、と呟くように話始める……。

「トリランタに伝わる古い伝承のように、千年もの間雪に閉ざされた国があると聞けば、王妃様ならいかが思われますか？」

短く、だが深く考える。そして。

「嘘だと言いますね。それは、お伽話の世界の話でしょう？」

それから、ハツとする。まさか……。

「……まさか、ルクタシアがそうだと？ 外の雪景色は雪解けの遅れからではなく、千年間変わっていないと……？」

それに、彼らは一様に重く頷いてみせた。自分の目でそれを見たのでなければ、彼女もこんなにあっさりと認めることはできなかった

だろう……。お伽話が、実在するなんて。そして、フェリドが続けた。

「そこで、トリランタに食物の援助を以来しました。私たちは、人の子の手でルクタシアを救う方法はないかと手を尽くして調べました。そして、この国に伝わる古文書に書かれている方法が、唯一の物だと知ったのです。」

「具体的には？」

彼女の言葉で、フェリドの口が再び開かれた。

「七人の精霊の子全てが精霊の聖具を手にし、原始の島に集結すること。そしてさらには、封印された始原の光を呼び覚ますこと、です。世界に始原の光が満ちた時、全てが無垢だった時代、あるべき姿に回帰すると言われています。しかし、これにはハーバナントからの妨害が必ずや入ってくるでしょう。彼ら闇の生き物は、始原の光が解放された無垢の世界では生きて行くことはできませんからね。」

「ようは、闇の帝国から追跡されるような危険な旅に出てくれ、ということですか……。」

「……御意……。」

彼が軽く一礼してそう答えた。そんな危険な旅に出るのは、恐ろしい。だが、何千年も雪に閉ざされた大地で、今も苦しんでいる人がいるのだ。それに……。

「……わかりました、行きましょう。」

「ほ、本当ですかっ？」

「ただし、条件が一つあります。」

重臣たちは皆その顔を輝かせて上げたが、リラは間髪入れずに条件の提示をした。

「私が無事に戻ったら、その時はルクタシアの陛下とは離縁させて下さい。」

「なっ……!!」

重臣たちは、今度は皆一度に色を失った。なんということを言い出

すのか、とでも言わんばかりだ。

「少し位私にもメリットがなければ、交渉にはならないでしょう？
食料などの援助は続けますから、私をトリランタに戻して下さい。」

「……。」

ジュリアが、黙って目を伏せた。彼女もリラとコルレッドのことは知っていた。だから、彼女の今の心情を考えると何も言えないのだ……。

「……わかりました、陛下にもそのようにお伝えします。きっと、納得して下さいでしょう。」

フェリドが、あっさりとそう答えた。彼も、ともに旅に出ることになるに違いない。その手に、精霊の聖具らしき物は見受けられないのだから。だが、ジュリアは別だ。そう思って妹に声をかけようとした時だった。

「私も行きますわ、お姉さま。少しはお役に立つでしょう？お姉さまがトリランタに戻って王位を継いで下されば、これ以上心強いことはありませんもの。」

その固い決心を窺わせる笑顔に、リラは何も言えなくなってしまった。これで、ジュリアも旅に出ることが決まった。

「では、どうぞ三人でお行き下さい。供の者は何人必要ですか？」

「いらないわ。いざという時に、人数が多いと機動性に欠けますから。必要最低限の人員で行きたいと思います。」

彼女の言うことは、もっともだ。余分に人数がいればそれだけ移動に時間がかかるし、目立つので敵に発見されやすくなってしまふのだ。

「……わかりました。いつ頃でしたらご出発いただけますか？」

「すぐに、ではないのですか？私はそうだと思っていましたが……。少しでも早い方が良くありませんか？」

リラが目丸くして訊ねた言葉に、ジュリアも同意して頷くのが見えた。それを見て、フェリドが決を下した。

「わかりました。王女様方がそのおつもりでいらっしゃるなら、明

朝、日の出とともに出立いたしましょう。よろしいですか？」

「わかりました。それでは、今夜中に出立の準備を整えさせておきます。ごゆっくりお休み下さい。」

「あの……。」

リラが遠慮がちに声をかけると、皆が顔を上げた。まだ何かあるのか、という顔だ……。

「陛下にご挨拶をしたいのですが……。」

フェリドが溜息をついた。それから、重そうにその口を開く……。

「陛下は……只今ご危篤です。とてもお会いできるような状態ではありません。どうぞご遠慮下さい……。」

「……わかりました。」

正直言つて、納得はいかない。なぜ、ついこの間まで戦争の指揮を執っていたはずの人間が危篤なのだろうか……。だが、別に会いたい訳でもない。ただ義務として挨拶をしなければならぬと考えていただけだったので、リラはその嘘を都合の良いように扱うことにした。

『まあ、会いたくないということならそれでもいいわ……。』

彼女はそう思つて、食事に手をつけた。明日になれば、この精霊が死に絶えた居心地の悪い国を去ることができる。それだけを、考えながら……。

お伽話は、実在した（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。『風空の姫』の第三話をお届けいたします。

前作に比べると展開が亀のようにのろいです。申し訳ありません。飽きずにお付き合いいただけると嬉しいです。

もしよろしければご意見、ご感想などお聞かせ下さい。

質問なども、ネタバレしない範囲でならお答えいたしますので、お気軽にどうぞ。

前作へのご質問でももちろん構いません。皆様のお声を聞かせていただけると大変嬉しいです。

最後になってしまいましたが、ここまでお読み下さった皆様、本当にありがとうございます。

二つの石板

朝霧が立ち込め、外は一面の銀世界となっていた。いや、その霧だけが銀世界を作り出している訳ではなく、地面を厚く覆っている雪もその一因となっていた。そこに、三つの人影と馬の影……。一人はずば抜けて背が高く、あとの二人は細い。

「始めはトリランタだったな。それなら、こちらの方角だ。」

彼女はそう言っ、僅かにその形を霧の中にも覗かせている太陽に背を向けた。漆黒の髪を一つに結った、エメラルドの瞳の少女。顔立ちもはつきりとしている。

「そうですね、まだ日が昇ったばかりですから、あちらが西でしょうし。」

銀青色の髪に縁取られた白い顔の少女が彼女の言葉に同意して、馬の鼻先をそちらに向けた。そして最後にもう一人、背が高い、黒髪に青紫の瞳の青年が彼女たちに同意する言葉を発した。

「昨日の打ち合わせ通りなら、そうだな。まずはトリランタで、昨日城で見た石板の片割れと思われる石板に目を通してからだ……。」「彼女たちは昨夜、最初の行き先について話し合ってから各々休息に入ったのだった。この呪われた大地を救う方法が書かれていたという石板を、実際に読んでみてから……。その石板はトリランタにある物と逆の方が割れていて、リラはおそらくこの二つは一つの物だったのではないか、と考えたのだ。そこには、こう記されていた。」

いつの時か

炎が水の手を取り

光と闇が抱き合い

風と大地がともに歩む

氷結の輪は、すなわち運命の輪

これを断ち切るは、精霊の子ら

各々精霊より授かりし

光持ちて始原の地へ向かう

清浄なる光、解放の時を待たん

この時、世界は原始の光満つ所となる

「この石板……右半分がないのか？」

リラのその言葉に、二人を古文書がある書庫まで案内して来たフェリドが頷いてから答えた。

「はい。国中の書庫を探しましたが、見つかりませんでした……。」
その言葉で、リラは確信した。

「トリランタに、ある……。」

「は？今、何と……？」

突如彼女が発した意味不明の言葉に、彼は首を傾げた。

「この片割れは、トリランタにある。この断面、おそらく間違いない……。私は、これの片割れを古代語の教材として使っていた……。」

「と言うことは、そこに書かれていることをご存じなのですか？」

彼がほんの少し身を乗り出した。どうやら、旅の手掛かりになることが書かれているのではないかと期待しているらしい。

「残念だな、あれには精霊の子について書かれているだけだ。旅の手掛かりになるようなことは何一つ書かれていない……。」

「そうですか……。もしよろしければ、その石板を見せていただけませんか？まずトリランタに行くことにして……。」

彼の眼差しは、真剣そのものだ。おそらく事情を話して聞かせれば、父は快く書庫を開けてくれるだろう。

「わかった、そうしよう。」

そう答えてから、リラは再び石板に目を戻した。それから、あることに気が付く……。

「前半の部分の意味はよくわからないな。よほどの天変地異でも起こせということか？」

その言葉に、フェリドは顔を上げた。そして、訝しげな表情で問い

かけた。

「なぜそうおっしゃるのですか……？」

その言葉に、今度はリラが眉根を寄せた。

「おい、これから私たちはともに旅に出ることになるんだ。面倒な敬語はやめにしないか？それに、そんな言葉遣いをされては行く先々で私たちの身分が露見してしまう。あまり好ましいこととは言えないと思うが……。」

いい加減、彼の丁寧な言葉には苛立ちを感じていた。敬語というものは、あまり好きではない。別に、彼女は王女に生まれたくて生まれた訳ではない。だから……。コルレッドにも何度もそう言ったのだが、彼は頑として彼女の願いを聞いてはくれなかった。私は王女の臣下なのです、と……。

「わかりました。それでは、これからは平易な言葉で話させていただきます。」

そう言った彼は、再び石板に目を落とした。その言葉に、リラは少しほっとした。どうやら、これ以上イライラする必要はなさそうだ。それぞれに違う色の三組の瞳が、それを見下ろした。

「それで、どうしてそうだと思っただ？」

よく聞けば、彼の声は何か独特の物があつた。なんとも心地良い響きが耳の奥に残る、独特の声……。おそらくそれが、彼が大地の子であることを示す物なのだろう。精霊の子は、それぞれに精霊からの恩恵を示す特徴があつた。リラのエメラルドの瞳や、ジュリアの真つ白い肌の色がそうだ。彼に与えられたのは、大地の深みがある、不思議な声……。

「ああ。精霊の子に相対する属性があるのは知っているだろう？それらは、関わってはいけない運命なんだ。」

「お姉さま、どこでそれを……？」

ジュリアが怪訝そうに訊ねた。そこで、リラもハツとする。

「……さあ、どうしてかしら？でも、なぜかそう思っただ……。」「そう言われてみれば、自分でも納得がいかない。なぜ自分は、その

ようなことを知っているのだろうか？

「魂の記憶、でしょうか……。」

誰にも聞こえないようにそう呟いたジュリアだったが、すぐにまたその顔を上げた。彼女が一瞬沈んだ表情をしたのは、どうやら二人には気付かれずに済んだようだ。

「でも確かに、これを読めば世界を救ってくれと重臣たちが言った意味がわかるな。おそらく、トリランタで風の巫女が行った旅には、復活の儀式としての意味があったのだろう。ルクタシアはそれを行わなかったんだな。」

リラの言葉に、フェリドが頷いた。

「ああ。この石板を読めば、復活の儀式を行っても他の国が同じ目に遭うだけなのがわかるからな。それにこの国に石板がある以上、他の国が精霊の子によって救われる可能性がある」と知っているはずがない。それなら方法を知っているルクタシアでなんとかしよう、ということだ。」

「なるほどな……。それで、精霊の子が揃って誕生するのを待っていた、と言う訳か……。」

彼女の言葉通り、あちこちから聞こえてくる噂で、ここにいる三人の他にもう二人、ルクタシアの隣にあるラッツィに精霊の子が生まれていることがわかっていた。どの精霊の恵みを受けているのかはわからないが、有名な話なので間違いない。ラッツィに生まれた双子の姉弟は、二人とも精霊の子ということ、各国にその名が知られていた。ティアナ姫と、エルリック王子だ。

「その通り。まだ全員が確認された訳ではないが、これだけ多くの精霊の子が一度に生まれたことは稀、いや、前例がない。これは、神々がくれたチャンスだと言っても良い。」

「確かに、稀なことだな……。わかった、残りの二人を探すこともこの旅の目的でしょう。」

そう元気に言って、彼女は軽く手を叩いた。どうやら、もう話は終了、と言うことだろう。

「それから、トリランタの後はラッツィだな。彼らにも助力を求めてみよう。どう動くかはわからないが、せめて聖具だけでも見つけてくれるように頼もう……。」

「わかった、そうしよう。さあ、ジュリア。明日から旅になるんだから、今日はゆっくり休んだ方が良いわ。おやすみなさい。」

リラのその言葉で、解散となった。これからともに旅をするのだ、無理に話さなくても、お互いのことを知る機会はいくらでもある……。白銀の世界を、明るい月が照らしていた。

そして、今日に至る訳である。彼女たちは、トリランタを目指して馬を走らせていた。昨日ルクタシアで、全世界に通用する通行証を発行してもらっていた。これがあれば、とりあえず入国さえ許されない、ということとはなくなる……。

「……まさか、こんなに早くトリランタに帰れることになるとは思いませんでしたね。」

ジュリアが、隣のリラにぽつと呟いた。その言葉には、複雑な笑顔が返って来た。確かに、彼女の心情は複雑に違いない。一度心を決めて別れた恋人のもとに、再び帰ることになってしまったのだから……。話せば、彼は待っていてくれるだろうか？彼女が、ルクタシアから自由になって再び彼の元に帰る日を……。軽く唇を噛んだ彼女を、次第に強くなってきた日差しが照らした。

二つの石板（後書き）

こんにちは、異国恋歌〜風空の姫〜第四話をお届けします。

やっと旅に出てくれましたね。冒険ファンタジーにする予定だったので、一安心です。

相変わらず展開はのろいですが、少しずつ謎が出てきたりする予定なので、どうぞお付き合い下さいませ。

それでは、また第五話でお会いしましょう。ありがとうございました。

古代からの最強の護り

一行は、トリランタの王都まで三日かけて進んだ。その間、ハーバナントからの妨害に遭うこともなかった。リラが戻ったという事はすでに王城にまで伝えられていて、宴の準備が行われていた。入城した彼らを最初に出迎えたのは、トリランタ王だった。

「リラ、よくぞ戻った。心から嬉しく思う。だが、なぜこんなにも早く戻って来たのだ？」

満面の笑みを浮かべてそう言う父に、リラは笑顔で一礼してから答えた。

「後ほど詳しくお話いたします。宴の後に父上のお部屋を三人で訪ねてもよろしいでしょうか？」

宴の後の約束を取り付けると、リラは自分の部屋に向かった。まさかこんなに早く戻れるとは思っていなかった、彼女の記憶がいつばいいっぱいに詰まっている部屋……。

『懐かしいな……。』

ほんの数日しか離れていないはずなのに、その空気さえ彼女の心を震わせる……。窓の外を眺めると、今年新しく入隊したばかりの衛兵たちの訓練が行われているのが見えた。その指揮を行っている彼に、彼女の目は向けられていた。また彼に会えたことは、素直に嬉しい……。一方のコルレツドの方は、彼女を複雑な思いで見ている。それは、彼女は知らないことだった……。

フェリドは、通された客間の寝台に腰掛けてボーっとしていた。最近、何かが頭の奥で崩れて来ている気がする……。そう、ちょうど厚い土の壁を、その手でポロポロと崩して行くかのように……。

「風の琴、神々の剣、そして泉……。探す、という言葉も……。一体、どこでどう繋がっているんだ？」

そして、気になることがもう一つ。最近の彼は、おかしかった。リ

ラを見てみると、胸の奥が苦しく締め付けられるのだ……。恋愛感情などではない。もっと別の、何か……。そして、それに反応しているのは自分自身ではなく、自分の中の別の者だという気がしていた。

「まるで、別の者が住みついている気分だな……。」

気持ち悪い。そうは思っても、何が原因かも全くわからないのだから対処のしようもない。彼は、なんとも複雑な気分のまま宴の席へと向かった。

全ての燭台には火がともされ、それぞれに着飾った人々が豪華な料理を食べ、美酒を飲み、踊りを踊っている。リラは、コルレッドに付き添われていた。紫のふわりとしたドレスに身を包み、髪もふわりと柔らかく結い上げている。

「この曲……。」

トリランタに伝わる古い舞踏曲が流れて来たのを聞いて、コルレッドがリラに話しかけた。

「王女、久々に一曲お相手願えませんか？」

彼女は一瞬迷ったが、明るく答えた。

「いいわ、行きましょう。」

ゆったりとした曲合わせて、二人は手を取り踊り出した。その様子を、フェリドがじっと見つめていた。

「昔よく練習しましたね、この曲……。」

コルレッドの方が懐かしそうに目を細めた。

「そうね……だって私、これが踊れるようになるまで弓の稽古を禁止されたんだもの。それで、夜中まであなたを付き合わせて練習して……。」

「そうでしたね……。」

あの時の二人は、思いもしなかった。まさか、離れなければならぬ日が来るなんて……。暗い表情を見られなくなかったリラは、話題を変えようと明るく言った。

「あなたの手、温かいのね。手袋越しなのによくわかるわ。」

彼は、何の気なく笑って答える。

「人の手なら皆温かいですよ、王女。」

彼女の表情が、再び曇った。

「人の手なら、か……。私の手も、ジュリアの手も冷たい……。風と水の精霊の子だから……。私たちは精霊ではないわ。でも、人の子とも言い切れない……。中途半端な位置にいるのが、私たち精霊の子。一体、精霊の子って何なのかしら……？」

ふと、貴賓席に座っているフェリドと目が合った。彼女をじっと見つめる、青く深い、鋭い瞳……。なぜか記憶もない遙か昔を思い出させるような、懐かしく優しいその色に、彼女は恥ずかしさを覚えて目を伏せた。

「王女……。」

コルレッドは、リラの視線の先にフェリドの存在を見て取った。

「あの男、一体何者なんだ……。？ただの臣下には見えない……。」
まだリラを見つめ続けているその眼差しを、コルレッドは疑問に思っていた。

次の日は、今にも雷雨になりそうな空模様だった。

「なんか嫌な感じね……。」

リラがそう思いながら食事に向かおうとした時だった。

ヒュオオオオオオオオオオ、ドゴオオオオオオオオオオン！

強烈な爆発音とともに、西側で大爆発が起きた。地面が揺れて、彼女はとっさに柱につかまった。

「敵襲ーっ！西館に敵襲ですっ！」

「なんですってっ？」

彼女は部屋に駆け込んで、扱い慣れた剣を取ってそちらに駆けけた。

「な、んなの……？あれ……。」

リラは思わず絶句した。そして、ゴクリと唾を飲み込む。焼け爛れ

た肌に、鋭利で恐ろしく長い爪の、自分の三倍も背丈がある巨大な化け物……。

「行け。」

ヴィシアシーがそれを解き放った。そしてその次の瞬間には、石の床を粉々に砕いた爪の音……。飛んだかけらが、彼女の足に小さな切り傷を一つ作った。鮮血が、そこから一筋になって垂れる……。彼女は思わず苦笑した。

「随分丈夫なのね……。」

化け物が恐ろしい咆哮を上げ、リラに攻撃を仕掛けた。彼女はひらりと横飛びに飛んでそれをかわしたが、後ろから呼ばれた。

「リラ、危ないっ！」

フェリドは自分が対峙していた敵を一突きで倒し、リラの元へ駆けた。敵の右手からの攻撃はかわしたものの、着地したばかりの彼女には化け物の左手が迫っていた。予想以上に速いその動きに、彼女の瞳が見開かれる。

『間に合わないっ！』

リラもフェリドも、そう思った。そして、その瞳が閉じられた……。だが、いつまで経ってもその爪に身を裂かれた感覚が襲って来ることはない……。そつと目を開けた彼女の瞳が、驚愕の色を宿して、見開かれる……。彼女の瞳に映ったのは、自分を庇うように立ち、その背に深い傷を負った、コルレッド……。時が、止まった……。二人の視線が一瞬結ばれると、彼は崩れた。そしてリラもその場に膝から崩れて、震えた……。

「王女……。」

コルレッドは弱々しい息の元で、言葉を発した。

「話さないで……。お願い……。」

彼の震える手がリラの頬に伸び、彼女の手がそれをさらに包んだ。

「私は……おそらく、う……ダメで、しょう……。死んだら三日……以内に、火葬……してくだ、さい……。闇に……蝕まれる、前に……。」

彼の顔はどんどん青くなっていき、息の音はどんどん遠くなっていく……。

「そんなこと……言わないでっ……！」

彼女の声は、語尾が震えてきちんと音にならなかった。

「い……んです。私は……あなたを……。」

言葉が切れ、苦しそうな息使いも途切れた。彼の鼓動の音は、遠くなって、消えて行った……。

「いや……。コルレッド、お願い、目を開けて……。お願いっ……！」

エメラルドの瞳に涙が溢れ、青い衛兵長の顔に落ちた。

「リラっ！そんな所にいたら、危ないぞっ！」

化け物の焼け爛れた左腕を切り落とし、そのけたたましい叫びをよそにフェリドが大声で叫んでも、彼女の耳には届いていなかった。

彼女はまだ温かい衛兵長の体に取り縋って、我を忘れて泣いていた。その向こうではジュリアがいくつもの水竜巻を起こし、敵がひるんだその隙に兵士たちを治癒の術で治療してやっていた。

『ダメだ、ジュリアが気付くはずがない……。』

となると、今の無防備な状態の彼女を守るのは、彼自身のみだ。

フェリドは、いちかばちかりラの元へ駆け出した。後ろからは、どす黒い血を滴らせながら、片腕になった化け物が追って来た。

「リラ、戦いの最中なんだ！危険なんだぞっ！」

そばに跪ひざまずいて肩を揺すっても、彼女はただただ衛兵長の名を呼びながら、涙を流すのみ……。その様子に、フェリドの心がチクリと痛んだ。

「……くそっ！」

フェリドは、リラと衛兵長の亡骸に守護の呪文をかけた。それによって、彼女たちが危害を加えられることは呪文が破られない限りなくなつたが、代わりに彼は自分の力を半分以上使ってしまった、その命は危険にさらされることになってしまった。そして彼は、そのまま追って来る化け物に立ち向かった。ふらつくその体で片腕の化け

物と対峙して止まった、その時だった。背後から、この世の物とも思われない凄まじい叫び声と、何かが焦げる匂いがした。まさか、と小さく呟いて振り返る。

「おのれ、大地の子……。」

リラの細い首にかけられたその腕から、ヴィシアシーは塵になり始めていた。徐々に、体が崩れて行く……。

「なんだ？ 一体……。」

あれだけの力の持ち主が、彼がかけた守護の呪文ごときを破れないはずがない。ではなぜ、彼は無に回帰していつているのだろうか……？

「おのれ……！ 守護の呪文だけではなく……古代からの、最強の……我が最も苦手とする護りを……風の子につ、与えたのか……！」

その言葉の最後が、彼の最期となった。塵は、風に流れた。城に攻め入っていたハーバナントの軍に動揺が広がり、彼らは皆バラバラになって逃走した。どうやら、ヴィシアシーがいなければ統率がとれずに負けると判断したようだ。フェリドはガクリと膝をつき、乱れた息を整えようとした。

「フェリドさん！」

ジュリアが駆け寄って来て、癒しの術を彼にかけてくれた。それでやっと、乱れた呼吸が安定する……。それから、脳にも酸素が回るようになった。その彼の頭に蘇ったのは、ヴィシアシーの言葉。

『古代最強の護りだとっ？ そんな馬鹿な……。』

それが、何なのかは知っている。相手に対する、純粹な恋慕の情……。しかし、彼はリラにそのような感情は持っていない。会ったばかりなのだから、当然である。しかし、ヴィシアシーは確かにそう言った。まさか、死の間際に嘘をつけるとは思えない……。

『僕の中の何かが、そうしたのか……。？』

汗が流れ落ちる。ヴィシアシーの最期の言葉が、いつまでも彼の頭の中を巡っていた。

古代からの最強の護り（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。異国恋歌〜風空の姫〜第五話、いかがでしたか？

最近はSound Horizonさんの曲を聴きながら執筆活動을させていただいています。声がすごく綺麗です。

ここまでお読み下さっている皆様、本当にありがとうございます。後書きまで目を通していただけると、本当に嬉しいです。どうもありがとうございます。

姫は悲しみを纏う

葬列の思いは、暗い。しとしとと降り出した雨が、火葬の火をくすぶらせる。フェリドは、あることを思い出していた。

昨晚、リラたちとともにトリランタ王の元を訪れて、次の日に書庫を開けてもらえるように頼んだフェリドは、一人で客室へ戻っていた。そしてその時にコルレッドと出くわしたのだ。何も言わずに行き過ぎようとしたが、コルレッドの方が言葉をかけてきた。

「ルクタシア王は、王女を幸福にできる人間か……？」

「わからないな、まだ……。」

フェリドは、ふっと笑った。

「……王は青みがかった黒髪に、青紫の瞳の十九の若者らしいな……。」

コルレッドがフェリドの方に向き直り、彼をじっと見つめた。

「そして、その条件に一致する人間が目の前にいる、と言う訳か……。」

「……違うか？」

フェリドは、余裕たつぷりに笑ってそう言った。コルレッドの反応が、激しくなる。

「その通りだ。このことを王女は御存じなのか？」

「まあ、少なくとも知らないことは確かだな……。知られていたら、僕は今頃大地に埋められている。」

おそらく、ルクタシア王は彼女には嫌われているだろう。なにせ、会う前から離婚を切り出された程度だ。

「なぜお伝えしなかった？ いや、なぜ王女が御存じないんだ……？」

「そうなるとお互いに自由に行動しにくくなるだろ？ 王は急な病で臥せていることになってから、彼女とは一度も対面していない。婚約者として、はね。それに、一人に縛られる人生なんて、退屈で仕方ない。だろ？」

コルレッドはその言葉でカツとなり、彼を怒鳴りつけた。

「あの王女を得ておきながらそんなことを考えているのか？ お前は！」

凄まじい怒りをその全身に表しているコルレッドに対し、フェリドはにっと笑った。

「じゃあ、彼女の心を僕が手に入れば文句はないか？ それで君が焼き餅を焼く必要もなくなるだろ？」

「お前のような奴が、王女の心を得られる訳がない！」

「やってみなければわからないだろ？ まだこの旅は先も長い。時間は十分にあるという訳だ。」

コルレッドが俯いた。それから、静かな怒りを込めた口調で言葉を紡ぐ……。

「……お前のことは、王女にはお伝えしない……。でも、あのお方を不幸にしてみる、地の果てまで貴様を追い詰めて地獄に送ってやる！」

そう宣戦布告して、彼は歩き去った。後に一人残されたフェリドが、回廊の手摺にその体を預け、外を眺めながらふう、と溜息をついた。

「やれやれ、仮にも一国の王に向かってお前、とか貴様、とか……。」

月が、雲の陰にその身を隠した。

『つい昨日のことだったのに……。』

まだ半日も経っていないのに、彼の命の炎は消えた。それが、自分たちの旅が常に危険と隣り合わせだということを思い出させて、彼の胸に重くのしかかった。それ以上に、彼女の心に……。リラは、心ここにあらずといった状態だ。今の彼女は、息をしている人形、といった状態……。とても、今の彼女は旅に出れる様子ではない……。彼は、何日間かトリランタに留まる覚悟をした。

その次の日、彼はその目を疑った。リラが、旅仕度をしているのを

見たのだ。

「リラ、もつと休んだ方がよくないか……？」

剣や防具を選別している彼女に、そう言葉をかけた。その彼女から返って来たのは、悲しみを押し込めた、重い微笑み……。

「いや、ここにいればトリランタの皆を巻き込んでしまうかもしれないからな、早々に出立したいんだ。父上に頼んで書庫は開けてもらった。行こうか……。」

彼女が纏っているのは、悲しみに重くなってしまった空気……。それを体の中に押し込めて、懸命になって彼女は生きていた。しかし、彼にはなんと言葉をかければ良いかわからなかった。彼からの慰めの言葉など、安っぽい言葉に過ぎない……。そう思っ、彼は黙ってその後について行った。

「これがトリランタの古文書だ。欠け方が、ルクタシアで見た石板と繋がりそうなんだが……。」

リラはそう言っ、て古文書の端を指差した。確かに、ここにあの古文書があればびったりと重なりそうだ……。なぜかはわからないが、あの石板は二つの国に分かれて保存されていたらしい。

「これによると、大地、炎、闇の子は男性で、水、光、そして風の子は女性ということになる。時の子だけは性別はわからないが……。まあ、あくまでも全て推測だがな。」

「いや、おそらく正しいだろう……。今いるのは風、大地、水の三つ。少なくともあと男性が二人と女性が一人いるんだな。」

彼が納得したように頷きながらそう言っ、た。

「ラッツィの国王陛下に謁見の申し込みをしないと。トリランタの陛下にとりなしてもらえないだろうか？」

「わかつ、た、父上に頼んでおく。もういいか？ 鍵を閉めなくては……。」

「ああ……。」

書庫を後にして、彼女がカギを閉めるその様を見つめる。その様子

は、フェリドの目にはこう映った。まるで、彼女は自分の心にも鍵をかけているようだ……。しかし、やはり彼は彼女にかける言葉を持ち合わせていなかった。そのまま、その後ろ姿を見送る……。彼の中身が、また痛んだ。彼の心ではない、別の何かが……。

姫は悲しみを纏う（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。ここまでお読み下さっている皆様、ありがとうございます。

異国恋歌〜風空の姫〜の第六話をお届けしました。今回は少し短いですが、他の話よりも時間がかかってしまいました。

第七話では、新しい仲間が増える予定です。どうぞよろしくお願いします。

光の姫と炎の王子

活気があり、賑やかな街並み……。ラッツィの街は、あちこちで商人たちがそれぞれに威勢の良い声を上げ、商売を行っていた。トリランタやルクタシアの美しい整いぶりとは全く異質なものだだったが、また別の美しさを備えていた。

「お二人とも十八歳ということでしたよね？私の二、三歳年上の方ということになりますね。お会いするのが楽しみです！」

ジュリアが、一生懸命にリラに話しかけた。このところ、一行にはあまり会話がなかった。トリランタでの事件があつて以来、彼女はまともに話もしなくなっていた。腰を遥かに通り越し、膝の裏辺りまであつた髪を、背中の中央あたりで彼女はばつさりと切つてしまった。その残りは、コルレッドの墓に入れられている……。そして彼女は、そこに心も置いて来た。彼女を守つて命を落とした、恋人の元に……。

「そうね……。」

リラの一言にジュリアはまた言葉をかけようとは思わず、じつと黙り込んだ。

ラッツィの城について、一行は案内の侍女について回廊を歩いていた。その前から、薄い青の瞳に、赤っぽい金髪の髪を一つに束ねた青年が歩いて来て、すれ違った。ジュリアの足が、止まる……。青年の方も、歩みを止めて振り返った。視線が、何かに誘われたかのように結ばれる……。何かが割れるような強い衝撃が、ジュリアの体を走った。まさか、彼が……？青年の方は、ジュリアの視線を受けて真っ赤になった。

「あ、あの……お客様、ですか……？」

「は、はい……。トリランタから参りました……。」

青年もジュリアも、緊張した様子でお互いに話しかけた。

「私は、トリランタ第三王女のジュリアと申します。あちらにいらつしやるのが、第一王女のリラお姉さまと、ルクタシアの衛兵長のフェリド様です。」

「僕は、ラッツィの第一王子のエルリックです。どうぞよろしく。

あ、あの……。」

侍女が、わざと大きく咳払いした。それで、エルリックがハツとした。

「あつ、こんな所でお引き留めして申し訳ありませんでした。後ほどお部屋までご挨拶に伺います。その時に、また……。」

「は、はい……。」

そこで彼と別れて、ジュリアがリラとフェリドの元に赤い顔のまま戻って来た。

「ふうん、一目惚れ？」

フェリドのからかうような口調に、ジュリアがぶんぶんと首を横に振って答えた。

「ち、違います！ただ……。」

この続きは、誰にも聞き取れない程小さな声で呟かれた。

「また、会えたことが嬉しくて……。」

誰にも気付かれないほど小さく、ジュリアは微笑んだ。

エルリックは、リラとジュリアが通された部屋で一段落すると、すぐにやって来た。後ろに、彼と同じ瞳の色の、こちらは淡い金髪の女性を引き連れて……。ジュリアの表情が一瞬曇ったが、リラはすぐに確信した。おそらく、この女性が彼の双子の姉のティアナ姫なのだろうと……。彼女が一歩進み出て、言った。

「先程は、弟が大変な失礼をいたしました。私は、エルリックの姉でこの国の第一王女のティアナと申します。どうぞくつろいでお行き下さい。」

ジュリアの顔に浮かんだ安堵の色も、リラは見逃さなかった。

「エルリック、ジュリア様を自慢の場所に案内して差し上げたら？」

私はリラ様とお話させていただきますから。」

「えっ、でも、姉さんっ……！」

「いいから早く行きなさい！ほら、早くするっ！」

彼女のかなり強引な押しで、エルリックはようやくジュリアの手を取った。その姿を見たリラは、何かを感じた。昔から遠い未来までずっと、二人のそんな姿が続くような……。永遠なんて存在しないと、ついこの間痛感したばかりだったというのに……。

「ごめんなさい、突然驚かせてしまって。でも、どうしても二人つきりにしてあげたくて……。ジュリア様にはご迷惑だったかしら？ トリランタに決まった方がいらっしやるのか？」

「いいえ、そんなことはありません。それに、ジュリアにもこの方が良かったと思いますし。お気づかいありがとうございます。」

それからリラは、着替えた長衣の裾を持ち上げ、深く礼をした。

「今回は突然の訪問にも関わらず、温かいお迎えに大変感謝しております。」

ティアナが、リラの元に歩み寄り、彼女の手を取った。

「よろしくね。堅苦しい挨拶は抜きにしましょ！それから、難しい敬語も！どうしてかしら、あなたたちとはとてもいい友達になれると思うの！」

彼女の言葉に、リラはニツコリと笑って頷いた。彼女が見せた、久しぶりの笑顔……。

「私もよ！」

そこには、彼女の決意があった。これ以上誰にも、コルレッドのことでは悲しげな様子は見せない、と……。

外は、ポカポカと気持ちの良い陽射しが射していた。

「この先は砂利道なんです。お手をどうぞ。」

エルリックはそう言って、ジュリアの方に手を伸ばした。彼女が、躊躇する……。

「あの、申し訳ありませんが……。私は、あの……。」

ジュリアが俯き、口ごもるのを見て、エルリックは不安になった。

「あ、すみません。初対面の姫に、慣れ慣れしくして……。」

「あのっ、そうではありません。ただ、驚かないで下さい……。」
白い手が、彼の手に重ねられた。ヒヤリと冷たい、温もりという物が全く感じられない、小さな手……。一瞬どう彼女に言葉をかけていいかわからなかった彼だったが、ニコリと笑ってみせた。

「良かった、嫌われた訳ではなかったんですね。……水の子は……体が冷たく生まれてしまうのでしょうか？あなたのせいじゃありませんよ。」

彼は、この時すでに思っていた。重ねられた手を、一生離したくない、と……。

「なるほどね……。じゃあ、あなたたちはその精霊の聖具とやらを探すために旅をしているのね……。」

「そう。それから、精霊の子も……。」

リラとティアナは、かなり込み入った話をしていた。そこで、ノックの音が響いた。

「どうぞ？」

リラのその声で戸を開けて入って来たのは、フェリドだった。

「ふうん、内緒話？」

「……馬鹿なことを言うな。今本題に入ったところだ。」

ふざけた調子でそう訊ねて来た彼に、リラは冷たくそう言った。今日初めて会ったティアナにもわかるほどの、冷たい物言い……。リラは、未だに彼に心を許せていなかった。彼女の全身が、警鐘を鳴らすのだ。彼に、心を許してはいけないと……。その先に待つのは、悲劇だと……。

「それで？姫君、率直にお伺いしますが、我々の旅にご同行願えますか？ルクタシアでは、今も多くの民が貧困に喘いでいます……。しかし、彼女のそんな物言いには彼は慣れっこのようで、フェリドは大して気にする様子もなくティアナに話しかけた。

「いきなりそんなこと言われても……。危険な旅になるのでしょうか？」

「……トリランタでも、ハーバナントの襲撃に遭ったわ……。」「
リラが俯いて、紅い唇が白くなるまで強く噛んだ。そしてその時に、
彼が……。」

「この先もそう言うことはあると思います。ですが、それでいいのですか？この旅が成功を収めれば、世界は原始の光満つ所となり、闇の化け物たちは魔界に逃げ帰るしかない。つまり、どの国もハーバナントの脅威に脅かされることのない、平和な時代がやってくるのですよ？」

「わかつてるわ……。だから、急にこんな話をされても断れずにいるんじゃない……。」「

本当なら、そんな危険な旅のお誘いなんかさっさと断りたい。だがフェリドが言ったように、この旅が無事に終焉を迎えれば、何者にも脅かされることのない、平和な時代が到来する。おそらく、その先には遙かな時の彼方、大地も記憶を留めていない程の昔、神代のような黄金の時代が待っているのだろう……。それは、全世界が望む物だ……。ティアナは、深い溜息をついた。

「……とにかく、私一人で決められるような問題じゃないわ。エリックの意見も聞かなきゃならないし、お父様のご意見もお伺いしなきゃ……。結論はすぐには出せないわよ。」「

「それはわかつてるわ……。でも、できるだけ急いで欲しいの。たくさんの方が大変な思いをしているんだもの。それから、お願い。私たちと一緒に行けないとしても、自分の聖具だけは探して欲しいの。全てが揃わないと、私たちの旅は意味を失ってしまうわ……。」「
ティアナが曖昧な笑みを浮かべた。聖具を探しに、遠くまで旅に出る。その行動も、決して安全だとは言えない。時代の暗黒は、それほどまでに濃くなっているのだ……。彼女は、とりあえず保留、という答えを出した。それでも、リラは笑顔を向けてくれた。そして、
部屋を出る……。」

「はあ……困ったなあ……。向こうの言ってることが圧倒的に正しいんだもの……。エルリック、なんて言うかしら？」
ティアナは、この時まで知らなかった。弟が、二つ返事で旅に出ると答えることを……。

次の日、ティアナとエルリックが二人揃ってリラとジュリアの客室を訪れた。そこには、今後の予定を話し合うためにフェリドもやって来ていた。全員いる方が、好都合だ。

「結論が出たわ。……と言うか、エルリックはほとんど考えないで出したんだけど……。」

「僕たちも、一緒に行くよ。ほら、味方は多い方がいいだろ？それに……。」

彼が赤くなって口ごもり、ジュリアにチラと視線を走らせた。なるほど、そう言うことか……。

「本当ですか？嬉しい！お二人と一緒に来て下されば、心強いですね。」

決定打。ジュリアは、意図せずして彼に決断を下させていたのだ……。それを、一瞬で残りの三人が読み取る。

「……まあ、そういう訳だから、よろしく……。エルリックを一人で行かせるのはたまらなく不安だし、どうせ聖具を探しに行かなきゃならないなら、危険なのは一緒だね。だから、行くわ。」

そう言つて、ティアナがニツコリとリラに笑いかけた。それに、リラも笑顔で応える。彼女のその笑顔を見て、フェリドも頬が緩んだ。久々に見せた、生きた表情……。それが、彼を安堵させたのだ。旅の仲間が増えた、嬉しい初夏の日だった。

光の姫と炎の王子（後書き）

お久しぶりです、霜月璃音です。異国恋歌〜風空の姫〜第七話をお届けいたします。

大学の新学期の方が始まったために、手続きや時間割が確定するまで忙しく、更新が遅れてしまいました。大変申し訳ありません。

気長にお待ちくださった読者の皆様、本当にありがとうございます。またできるかぎりの速さで更新して行く予定でありますので、ぜひお付き合い下さいませ。

最後に余談ですが、前作のおまけ、小異国恋歌〜龍神の華〜という短編が大分前に書き上がっています。前作をお読み下さって、まだそれは読んでいないという読者の方がいらっしゃいましたら、そちらもよろしく願います。

長々と申し訳ありませんでした。失礼いたします。

一筋の光

「さあ、旅の仲間も増えたところで、この先をどうしようか？」

フェリドがそう口を開いた。彼の髪が、その動きに合わせてさらりと音を立てる。

「何よ？まさか、何も考えてなかった訳？先が思いやられるわねーっ！」

旅に加わったばかりのティアナが、そうフェリドに噛みついた。なんとなく可哀想にも思えるので、リラは助け船を出してやった。

「一応、考えはあるんだけど……。」

エメラルドの瞳が、全員を見渡す。二対の軽い青色の瞳と深い青の瞳、青紫の瞳が自分に向けられていることを確認してから、リラは続けた。

「まず一つは、このまま友好が結ばれている国から順に回って行くこと。そして闇の子と風の子を見つけるの。もう一つは私たちの聖具を探すこと。それから二人を探すの。まあ、どちらも一度にやるのが一番手っ取り早いんだけど……。」

「確かに、聖具があつた方が安心できそうだ……。」

エルリックが、そう溜息をついた。聖具はそれぞれに精霊の恩恵を受けた物で、普通の武具などとは比べ物にならない程の力を秘めている。

「でも、場所がわからないならどうしようもありませんわ……。私の場合、偶然でしたし……。」

確かに、彼女が聖具を見つけたことも偶然以外の何者でもない。たまたま避暑に行った場所が、たまたま彼女の聖具が眠る土地だったのだから……。運命の導き、と言えば、聞こえはいいかもしれないが……。しばらくしかめつらで考えていたフェリドがおもむろに口を開いた。

「……仮説を立ててみるのはどうだろう……？」

「馬鹿を言つな。私たちにはそんな時間はない。」

リラに視線を当てながら、彼が続けた。

「確かにそうだけど、このまま闇雲に突っ走るよりはマシなんじゃないかと思うんだ。仮説を立てて、正しいかどうかを確かめながら進んで行く。今、一つ仮説を立ててみたんだが……。」

ティアナが目で続きを促した。いや、詳しくはそんな生易しいものではない。早くしろ、と、目だけで彼を殺しそうな勢いだ……。

「ジュリアが水の宝玉を見つけたのは、悲しみの湖だったよね？あそこは、世界で一番大きな湖、しかも、水の透明度も世界一を誇る。つまり、世界中で一番水の精霊の力が強い所なんだ。もしかすると、精霊の聖具は精霊の力が最も収束された所にあるんじゃないだろうか？」

「っ……！」

確かに、その可能性はあり得る。聖具のような大切な物が、その辺の道端に転がっているとは到底考えられない。それなら、滅多に人が来ないような場所、あるいは、精霊の影響力が強く、そのありかを隠せるような場所に置かれていると考える方が自然だ。

「確かに、その可能性は大いにあり得るな……。ひとまず、その仮説に従ってみるか……。」

リラのその言葉で、大体の方針が決まった。

「じゃあ、こういうのはどう？」

エルリックが地図を指差した。その指が、世界の上を駆け巡る……。

「まず、ここから一番近い光の原野に行く。ここが、おそらく姉さんの聖具が封印されている所だからね。ここなら、ラッツィから定期船も出てるよ。それから、一度戻ってルクタシアにある怒りの火山で僕の炎の聖具、そこから、海を渡って別の大陸に行こう！」

筋道の通った考え方だ。ましてや、ハーバナントをできるだけ避けて世界を廻ろうとするとところが、なおさら……。

「そうね、悩んでいたって仕方ないし。行きましょ！もし間違っていたら、その時に考えればいいのよ！」

全員がその言葉に笑顔で強く頷く。明るい姉弟は、今まで暗い沈黙に満たされていた一行を救う、一筋の光となっていた。そして、あの程度定まってきた今後の方針も……。誰が声をかけるという訳でもなく、彼らは立ち上がった。そして、歩き始めた。

一筋の光（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。異国恋歌〜風空の姫〜第八話をお届けいたします。

今回のお話は少々短くなってしまいましたが、いかがでしたか？もしよろしければ、ご意見、ご感想などをお願いいたします。

亀のように更新がのろい私ですが、飽きずにお付き合いして下さい。読者の皆様、本当にありがとうございます。よろしければ、今後も彼らの旅にどうぞお付き合い下さいませ。

いつか、光が届くと信じて

港町を並んで歩く、五人の陰……。男性が二人、女性が三人の、どことなく目を引く一行だ。彼らは、光の原野行きの船を探していた。「うーん、ここから出るって聞いてたんだけどな……。」

そう言ったのはエルリック、ラッツィの王子にして炎の子である。赤みを帯びた金髪を風になびかせて、頭をポリポリと掻いた。その隣から、不満気な声上がる。

「ちよつと、情けないわねー。ここが一番光の原野に近いんだから、ここから船が出るに決まってるでしょ。誰かに聞いて……。」

そう言った彼女は、白っぽい金髪にエルリックと同じ青い瞳。彼の双子の姉のティアナだった。彼女は光の子である。そして、彼女はある人物に白い目を向けた。

「やあ、お嬢さん。^{レディー}ちよつと聞きたいんだけど、いいかな？」

「またやつてる……。」

彼女の視線の先にいたのは、黒髪に青紫の瞳の青年、フェリドだった。先程から、彼は通りすがりの多くの女性に話しかけていた。どうやら、そういう人種らしい……。溜息が洩れるのが聞こえた。エメルルドの瞳に漆黒の髪の少女、リラから……。

「あれに付き合っていたら日が暮れるわ。先に行きましょう。なんとかして探して来るだろうし。」

そう言った彼女は、宿屋の方に先に歩いて行ってしまった。どうやら、先に泊る所の確保をした方がいいと判断したらしい。

「そうね、そうしましょ。」

そう言って四人は、旅の仲間をあつさりで見捨てて宿屋に入ってしまった。

宿屋に入った一行は、驚きの光景を目にした。宿屋の広間には、たくさんのお客が並べられていた。固まっている一行の方へ、宿屋の

女主人が歩いて来る……。

「お泊りですか？それとも貸衣装？」

「あ、えっと…… お部屋をお願いしたいのですが……。」

銀青色の髪に深い青色の瞳の少女が遠慮がちにそう言った。リラの妹の、ジュリアである。女主人が頷いて、カウンターから鍵を差し出した。

「何部屋だい？」

「二部屋お願い。」

ティアナのその言葉で、彼女はもう一本鍵を差し出した。そして、忙しそうに貸衣装の山が広げられている部屋に戻って行く。ティアナが、そこで合点がいったように手を打った。

「そうか、今日は精霊祭の日だったわ！どつりであんなに活気があったのね！いくら港町だからと言っても、ちよつと賑わい過ぎだと思つたもの！……でも、多分精霊祭の間は船は出ないわね……。」

「精霊祭？」

リラが一人で納得している彼女に小首を傾げて見せた。それに視線を当ててから、ティアナが続けた。

「そう、精霊祭。年に二回、夏至と冬至の日に精霊を祀つてお祭りをするの。今日は夏至の日でしょ？だから……。精霊祭ではね、皆が自分を色々な物になぞらえて仮装をして、広場に集まって輪舞を踊るのよ。面白そうでしょ？」

「素敵ですね。ねえ、お姉さま？」

「そうね、素敵だわ。」

隣でうつとりと目を細めた妹に、リラも微笑んで同意した。ティアナが悪戯っぽく笑った。

「ねえ、私たちも行きましょう！私、城以外の所で行われる精霊祭に行くのは初めてだもの。よし、決定！ご主人に頼んで衣装を貸してもらいましょう！」

そう言つて皆を押し切ると、彼女は宿屋の女主人の後を追いかけて行った。

「ジュリア、何の衣装にする？僕、それに合わせようと思うんだ。」
エルリックが赤面しながらも言った言葉に、ジュリアが柔らかに微笑んだ。

「困りましたわ。どんな衣装がいいのか、まったくわかりませんもの。……もし良ければ、選ぶのを手伝っていただけませんか？」

「も、もちろんだよ！行こう！」

彼はそう言って、ごくごく自然にジュリアの手を引いて行った。その様子を見送って、小さく微笑む。

「……。」

自分の手を引いてくれたであろう人は、もういない……。故国の土に、還っているはずだ……。ここのところ彼女が元に戻ったように見えていたのは、彼女が心の深い部分に蓋をしていたせいであつた。その傷は癒えるどころか広がって、彼女の心を蝕んでいく一方だ……。奥底が、どうしようもなく重い。彼女は、怖かった。いつか、その重さに耐え切れなくなってしまう日が来るのではないかということが……。

「仕方がない、ことなのに……。」

そう、いくら彼女が悩んだからといって、彼が戻って来る訳ではない。それがわかっていても、それでも……。俯いて、唇を噛み締める。彼女は待っていた。いつか誰かが、彼女の心の奥底にまで光を投げかけ、温かい手を差し伸べてくれることを……。

「リラ、どうかしたか？」

後から宿屋に入って来たフェリドが、彼女にそう声をかける。それから、その大きな手を差し出す……。彼女の顔が、驚いて上げられた。

「な……どうして、手を……？」

そう、なぜ、彼女が心の奥底で求めていた物を……？

「いや、具合でも悪いのかと思って。そんなに驚くことでもないだろ？」

彼は、なんとも不思議そうな顔をしている。彼女が、小さく笑みを

こぼした。そして……。

「……ありがとう……。」

彼の右手に、自分の左手を預ける……。大きくて温かい手が、小さくて冷たい手を包み込んだ。いつかは、きつと……。そう思っ、また淡く微笑む。そう、いつかは。今彼がしてくれたように、彼女の心の底にまで、彼女を守ってくれる、救い出してくれる手が届く日が来るのだろう……。

「ジュリアと双子は、精霊祭の衣装を選びに行っているんだ。」

「へえ、精霊祭……。面白そうだな。」

自分より大分高い位置にある彼の青紫の瞳に、ほんの少し目を細める。夏至の日は、彼女の心にも明るかった。そしてそれは、二人の心がほんの少し、通った日だった。

いつか、光が届くと信じて（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。連休を利用して執筆活動を進めております。

第九話、いかがでしたか？読者様のお気に召したでしょうか？そろそろ登場人物たちの性格をはっきりさせたいと思う今日この頃であります。

ここまでお読み下さった皆様、どうもありがとうございます。よろしければ、第十話以降もどうぞよろしくお願いいたします。

精霊祭の夜

「あーあ、はぐれたみたいね……。」

リラは、そう溜息をついた。漆黒の髪に小さな白い花を編み込んで、エメラルドの瞳が仮面の中から覗いている。精霊祭では、仮面をつけて自分が何者なのかわからないようにするのがルールだった。彼女は、宿屋の主人に勧められて月光花の仮装をしていた。彼女は旅の仲間であるティアナ、ジュリア、エルリックと四人で祭りの見物に来ていたのだが、どうやら人の波に流されてはぐれてしまったようだ。

「探すのも無理、でしょうね……。まあ、いいわ。宿屋に戻れば問題ないでしょうし。」

彼女はそう自分を納得させると、再び歩き出した。あちこちで火が焚かれていて、眩しい……。人の多さとその眩しさに酔って、彼女はいささか気分を悪くしていた。

「宿に戻るかしら……。でも、戻ってもフェリドしかないだろうし……。」

彼は、宿で皆の帰りを待っていると言っていたのだ。彼に介抱されるのは、ごめんだ。リラは、正直言ってああいう軽い人間が苦手だった。昼間は、その手に自分の手を預けたのだが……。

「……。」

ふと彼女は、自分の左手を右手で握った。彼の手は、温かった……。

「ば、馬鹿ね！何考えてるのよ！」

真っ赤になって、その手をブンブンと振る。周囲の冷たい視線が、彼女に突き刺さった。慌ててその場を去る……。そして喧騒から少し離れた場所で、彼女は腰を下ろして溜息をついた。どんなに華やかな場所においても、やはり重さは拭えない……。一人でいると、なおさら……。

「はぐれなきや良かつたわ……。」

そう言つて俯いた彼女の目の前に、大きな手が差し出された。

「お困りですか？月光花の姫君^{レディー}？」

彼、だろつか……？聞き覚えのある声に、顔を上げる。目に映ったのは、黒い髪。だが……。

『別人、か……。フェリドの髪はこんなに長くなかつたし……。』

「いえ、友達とはぐれてしまつただけです……。」

隣に腰掛けて、青年が続けた。彼は、真つ黒な衣装を着ている。どうやら、黒い鷲をイメージした物らしい。

「その割には随分暗い顔をしていらつしやる。どうされました？」

「あ、本当に大丈夫ですから……。」

リラはそう言つて青年から軽く距離を取つた。なんだか馴れ馴れしいな、と思いながら……。彼の仮面の下で、青っぽい目が細められた。

「体調が優れないようですね。人に酔いましたか？」

「ええ、少し……。」

彼はその返答を受けて、どこかへ行つてしまつた。ほつとしてしばらくボーっとしていたリラだったが、ふと目の前にお茶が差し出されて、顔を上げた。そこにいたのは、先程の青年だつた。

「どうぞ。落ち着きますよ。」

祭りでは、輪舞の輪の外に食べ物や飲み物が置かれていて、自由に取つていいということだつたので、彼はおそらくその中からこのお茶を取つて来たのだらう。

「ありがとうございます……。」

彼女はそう言つて、それを受け取つた。その隣に再び彼が腰掛けた。「何かお悩みのことでも？」

「え、いえ、特に……。」

そう嘘をついてから、彼から目を逸らす。苦笑いをしながら……。それが、彼女のくせだつた。嘘をつく時には、必ず相手から目を逸らして、苦笑いをする。彼女の中にある罪悪感がそうさせているの

だ。

「目を逸らして苦笑い、ですか……。今、嘘をつきましたね？」

「なっ……………」

頬を染める。初対面の彼に、なぜそんなことがわかるのだろうか……？そして、そう決め打ちをされたことに腹が立っていた。

「あ、あなたには関係のないことです！それに、初対面で失礼じゃありませんかっ？」

その返答に、彼はほんのりと笑って見せた。穏やかで、とても柔らかい微笑み……。それは、彼の人柄を窺わせた。

「確かにそうですが……。見知らぬ人間にだからこそ、かえって話しやすいとは思いませんか？どうせここで会ってここで別れるだけの人間ですから……。」

「……………」

確かに、彼の言う通りだ。中途半端に相手を知っていると、言いにくいとも言えなくなってしまう。旅の仲間にも、これは言えない……。彼らに、余計な心配をかけてしまうから……。

「…………一月程前に、恋人を亡くしたんです……。闇の帝国の魔物に襲われて……。彼、私を庇って亡くなったんです……。」

リラが、紅い唇からポツリ、ポツリと言葉をこぼし始めた。青年は黙ってそれを聞いていた。彼の人柄が、彼女を安心させたのかもしれない……。

「罪悪感だなんて、そんな偉そうな物じゃありません……。でも、何かが心の奥ですつと重くて……。ずっと、妹にも心配ばかりかけていて……………」

ジュリアは、いつも自分を氣遣って少しでも明るい気分になれるようにしてくれていた。それがわかっていいるからこそ、彼女はなおさら辛かったのだ……。

「…………人は……………」

彼女の口調が、さらに重さを増した。仮面の陰から、光が一筋、流れ落ちる……。

「……人は日々の平穏を神に祈り、豊穡を精霊に祈る……。それじゃあ、彼の魂の平安は、何に祈ればいいのか……？」

「……。」

青年の体が、ピクリと動いた。彼女を抱き締めたいのを、必死で堪える……。しばらくして、止められていた吐息とともに青年が言葉を吐きだした。

「……星に、姫君^{レディー}。あれだけ高い所にあるのだから、全て見えているはずですからね……。」

彼のその言葉で、彼女は夜空を見上げた。雲ひとつない空には、満天の星々……。そつと溜息をこぼしてから、淡く微笑む。

「……それも、いいかもしれない……。」

そう言つて青年に視線を戻して、今度は彼女は笑顔を弾けさせた。その明るい表情にドキリとする青年だったが、それは言わない……。『ありがとうございます！おかげで、ほんの少し気分が軽くなりました。』

「いいえ、お役に立てて良かった。」

青年が、再び仮面の奥で目を細めた。それから、立ち上がって彼女に手を差し出す。

「一曲お相手を、姫君^{レディー}。いかがですか？」

「いいわ、行きましよう！」

彼女はそう言つて青年の手を取った。こんなに明るい気分になったのは久しぶりだ。今まで、彼のために祈ることすらできなかった。何に祈ればいいのか、わからなかったから……。だが、今夜からは違う。これからは、青年が言つたように星に祈ってみようと思う。それが、自分が彼のためにできるたった一つのことだから……。

「見て、あそこ！綺麗！」

一人の少女が、そう歓声を上げた。彼女のその声で、たくさんの視線がその指の先に向けられる。その先には、月光花の仮装をした少女と、黒鷲の仮装をした青年……。彼女の身のこなしは、軽かった。まるでそのまま羽が生えて、天に飛翔して行きそうな程に……。相

手の青年は、非常にリードが上手かった。曲が変わる。二人は、輪舞の輪から抜けてしまった。

「ありがとうございました！楽しかったわ！」

息を弾ませて、彼女は明るい笑顔を青年に向けてそう言った。彼からも、笑顔が返って来る……。

「こちらこそ。」

彼を見上げて、また彼女が続けた。

「私、こんなに楽しんでダンスができたことなかったわ！……先程のことと言い、なんとお礼を申し上げればいいのか……。」

「お礼なんて、姫君……。」

青年がゆるりと動く。彼女のエメラルドの瞳が、驚きに見張られた。彼の頬を思い切り叩けばいい。それなのに……。それなのに、彼女の意志に反して体は動かない……。屈みこんでいた青年が、元のように背筋を伸ばした。

「さようなら……。」

「っ……！」

彼女は、真っ赤な顔でその場から走り去った。エメラルドの瞳が潤んでいたのを、彼は見た……。

「嫌われた、よな。やっぱり……。」

そう呟いて、仮面を外す……。青紫の瞳に、月明かりが映った。その後、つけ毛を全て外す……。そう。青年の正体は、フェリドだった。心臓が、苦しい……。衣装の心臓部分を、グツとつかむ……。彼女のあの笑顔が脳裏に焼き付いて、離れない……。茫然と立ち尽くす彼の背を、星明かりが照らし出していた。

精霊祭の夜（後書き）

異国恋歌〜風空の姫〜第十話をお届けいたします。

もう二桁突入ですね。このまま行くと、かなり話数は多めになってしまう気がします……。どうぞ飽きずにお付き合い下さい。

ここまでお読み下さった皆様、本当にありがとうございました。

心も、花輪のように繋がる

次の朝はどんよりとした曇り空で、一行の気分も重かったが、とりあえず船を探してみることにした。光の原野行きの船は間もなく出港するという話を聞いて、彼らは慌ててその船に飛び乗った。街には、祭りの痕跡はまったく残されていなかった。それでも彼女の心は、この曇り空のように重い……。亡くした恋人のことで悩んでいるのではない。昨日の事件について悩んでいるのだ……。

「やあ、元気ないね、お嬢さん。」

すぐ後ろからの、軽い声……。彼女は、迷わずそちらに向かって突きを繰り出した。

「近寄るなと言っただろう……。？どうやら地獄が見たいらしいな？」

「あーあ、君には敵わないなあ……。」

フェリドはそう言っ、彼女の隣で甲板の手摺にその体を預けた。

「で、悩み事？」

彼の唐突な質問にリラは一瞬固まったが、すぐに冷静さを取り戻した。こいつは、私の考えてることが読めるのか？と思いつながら……。この前彼女に向かって手を差し出した時と言い、タイミングがよすぎるのだ。

「大したことじゃない……。」

そう言っ、彼から目を逸らす。彼女は、その青紫の色がなんとなく苦手だった。なぜか、心が重くなるから……。

「ふうん、大したことじゃない割には、死にそうな顔だね？」

「放っておけ！」

彼女はそう言っ、彼との間に距離を取った。それから、二人の間の距離を弓の長さに合わせる。

「いいか？この半径の中に入るな。これより少しでも中に入ったら……。」

彼女はそう言っ、弓を引く仕草をした。矢は番えていないが、弦を

放す……。つまり、その半径の中に入ったら彼女に弓で射たれるということだ。子供じゃあるまいし、と思って、彼は苦笑する。

「な、笑うな！失礼な奴だな！」

「いやいや、馬鹿にしてる訳じゃないよ。」

彼が笑いをこらえて唇をおかしな形に歪めているのを見て、彼女は真つ赤になつて怒つた。船が揺れて、慌てて手摺に捕まる……。その揺れが治まつてから、フェリドが口を開いた。

「うーん、風も出て来たし、一人で甲板にいるのはあまりお勧めできないなあ……。中、戻らない？」

苦笑いしてそう言う。素直には聞いてくれないだろうな、と思いつながら……。彼の言うことは、彼女はとことん聞いてくれないのだ。しかし、彼女はそんな彼に一瞬視線を当てただけで中に戻って行つた。意外だと思つて取り残されていた彼は、再びの船の揺れでよろけた。そして、彼女が待つてくれている入口に向かつて歩いて行つた。

「わあ、綺麗な所！」

ティアナは、光の原野について早々にそう歓声を上げた。あちこちに、黄金に輝く花々が咲き乱れている……。この世の物とは思われぬ風景、とは、まさにこのことだろう……。お伽話の舞台の中にも紛れこんでしまったかのような気分だ。

「綺麗……。」

リラムも、それ以上言葉を紡げずにそう溜息をこぼした。ティアナが、急に顔を上げた。全身を、大きく震わせる……。

「呼んでる！」

そう言葉を発して、駆け出す……。

「え、ちよつと、姉さんっ？」

エルリックの制止も聞かず、彼女はそのまま走る……。やがて、黄金色の空気に溶け込むかのように、彼女の姿は消えてしまった。

「……どうなつてんだ、一体……？」

「おそらく、精霊の導きでしょう。」

フェリドの呟きに答えたのは、すでに聖具を手に行っている水の子、ジュリア……。一同の目が、彼女に向けられる……。

「ここは、本当に光の聖具が封印されている所なのでしょう。ティアナさんはさつき呼んでる、とおっしゃってましたから、精霊に呼ばれたのではないでしょうか？下手に動くよりも、少し待ってみた方が良いかもしれません。」

ジュリアのその一言で、一行はその場でキャンプをすることに決めた。テントを張ってから、思い思いのことを始める。ジュリアとエルリックは夕食を作るための水汲みに行った。フェリドは大きな木の根にもたれて昼寝を始めたし、リラは、なんとなく花を摘んでいる内にあることを思いついた。リラがせっせと作業を始めると、フェリドが目を開けた。

「それで？そんなに花を摘んでどうする気？」

彼女が、驚いて顔を上げた。

「な、起きてたのか！驚かせるな！」

彼は彼女の怒った様子をさして気に留める風でもなく、飄々として答えた。

「ここは大地の守りも厚い土地だからね、何かあつたら起こしてもらえるから、ちょっと昼寝を、と思ったんだけど……。……へえ、花輪作るの？」

「そ、そうだけど……。」

ふと、彼女の口調が一瞬柔らかくなった。彼の笑顔に、なんとなく安心感を覚えて……。

「ふうん……。」

彼はそう中途半端に答えて、彼女の作業の様子をじっと眺めていた。最後の部分をきゅつとまとめて、彼女はできた、と言って満足気な表情を浮かべた。彼は、それを手にとって眺めた。

「へえ、器用だなあ……。」

本当に感心してしまう。几帳面にまとめられたそれは、きちんと整

つていて美しかった。リラが、ふと笑顔を見せた。

「それ、あげる……。」

その柔らかい口調や表情に驚きながら、彼が問った。

「君の分がなくなるだろ？」

「いいんだ。またすぐ作れるから……。」

いつの間にか口調は普段の物に戻ってしまっていたが、彼女の温かな表情はそのままだった。そして、また作業を開始する。彼は、とりあえずその花輪を首にかけてみた。ふとリラがキョロキョロと何かを探すような仕草をしたので、彼は手元にあった大輪の花を一輪摘んで彼女の方に差し出した。

「これは？」

「ああ、よさそうだな……。ふふっ、なかなか似合ってる。」

彼の首にかけられている花輪を見て、彼女はそう笑った。

「良い男は花でもなんでも似合うものなんだ。」

彼はその笑顔が嬉しくて、おどけた調子でそう言っただけに見せた。もっと、と思ったから。もっと笑わせたい、もっとその笑顔を見たい、と……。そして、彼の期待通り彼女はさらにその笑顔を弾けさせた。「自分で言うことじゃないだろ、おかしい奴！」

そう言っただけ、今度は声を上げて笑い出す。そうだ、僕は。この声が、ずっと聞きたかった。この表情が、ずっと見たかったんだ……。

「やっと笑った。」

「え……？」

彼のその言葉に、彼女はピタリと止まって不思議そうな表情を向けて来た。ちよつと惜しいことをしたな、と思いながら、彼が続ける。「ずっと元気がなかったから……。」

「あ……。」

彼女は、言葉を紡ぐこともできない。その通りだ、自分は、故国を出てからあまりにも暗くなり過ぎていた……。

「周りに心配かけまいとして一人で抱え込むのもいいけど、そんなことをしてたらいつか死ぬほど苦しくなるかもしれないぞ……？」

普段は彼の言葉など決して聞き入れない彼女だが、彼のあまりに真剣な口調に、今回ばかりは反論できずにいた。もしこれがいつもの軽い口調で言われたのなら、いくらでも怒りようがあったのに……。

「……わかってる。でも、どうしようもないというのが真実なんだ……。誰かに伝える言葉も方法も、今は見つからない……。」

彼を失った痛み、それは、どんな言葉に託しても違う物になってしまふ……。彼女は、それを表す言葉をまだ知らない……。

「……そうか。じゃあ、いつか僕に話してくれ。君がちゃんとした言葉を見つけた時に。僕はそれまで、ずっと待ってるから。」

少しでも、彼女の力になりたい。彼は、そう思っていた。始めは、一人でなんでも抱え込もうとする彼女が危なっかしくて、目が離せないだけだった。しかしその内に、なにかもを内に押し込めて、それでも必死にもがいている彼女が、愛おしくてたまらなくなっていた……。守ってやりたい、と思った。自分にできることなら、その小さな体を、と……。彼のその言葉に、彼女は伏せていた顔を上げた。その表情を表すのにもっとも適した言葉は、やはり驚き……。それから、弱く微笑んで口を開く。

「……わかった、いつか、きっと……。」

それで彼女は作業に戻ってしまったが、ふとまた顔を上げて、自分の手元を見つめている青紫の瞳を正面から見据える。苦手なその色、じつと……。彼の目が自分に向けられていることを確認してから、唇だけでこう言った。ありがとう、と……。彼からは、意味ありげな微笑みが返って来ただけだった。

心も、花輪のように繋がる（後書き）

異国恋歌〜風空の姫〜第十一話、いかがでしたか？

やっと登場人物たちが動き出して一安心しています。

もしよろしければ、ご意見、ご感想をお聞かせ下さい。参考にさせていただきます。

それでは、失礼いたします。ここまでお読み下さった皆様、どうもありがとうございました。

光の聖具

ゆらり、と光が揺れる……。彼女の瞳は、それに押し開かれた。

「あれ、ここは……？私、確か……。」

重い頭を抱えながらも、起き上がる。

「あ、ティアナ、やつと見つけたよ！」

そう言ってひょっこりと現われた子供の赤っぽい金髪と青い瞳は、彼女の双子の弟、エルリックの子供の頃を想起させた。

「本当だわ、良かった……。」

銀青色の髪に縁取られた白い顔の少女は、ジュリアのようだった。

「リラ、フェルディナンド、ヘレンツイ、こっちだよー！」

エルリックのような子供は、彼女の知っている名を一つと、知らない名を二つ呼んだ。駆けて来たのは、リラ、フェリドのような子供と、銀髪に濃い紫の瞳の子供だった。ふと自分の手を見下ろすと、彼女の体は退行現象を起こしていた。

「じゃあ、次は僕とリラが鬼だな！」

「放して！」

フェリドにつかまれた手を、リラは真っ赤になりながら乱暴に振り払った。今でも見られるような光景だ……。その二人が、子供の姿をしていることを除けば。

「ちえっ……。」

少年の残念そうな舌打ちに、ティアナは思わず笑みをこぼした。

「あ、笑うなよ！」

「だって随分残念そうにするんだもの、おかしくて。」

彼女のその言葉で、リラとフェリドがいつぺんに赤くなった。

「べ、別にそんなことないよ！リラが余ってるから、仕方なく……。」

「人を余り物扱いしたわねー！」

「ま、まあまあ、落ち着いて……。」

ジュリアが仲裁役に徹しているというのも、今と変わらない光景だ……。まるで今の彼らを見ているようだと思いながら、彼女はふと遠い目をした。見覚えのある場所、覚えのある会話……。ある言葉が、彼女の頭に浮かんだ。

「神々の、庭園……？」

それは、おそらくその言葉を口に出した瞬間に起きた。彼女の頭の中で、何かが弾ける……。それは厚い壁をも突き破って、彼女の脳裏に色鮮やかな記憶として一度に流れ込んで来た。こうして六人で遊んだことや、後にリラとフェリドが禁忌を破ってお互いを想い合ってしまったこと、それを支持した結果として、六人全員が人界に墮^おとされてしまったことが……。

「思い出しましたか？」

ふと彼女の耳が拾い上げた声に、後ろを振り向く。いつの間にか、彼女は不思議な空間へと誘われていた。床や天井などもなく、かと言って彼女は大地に腰掛けている訳でもなかったし、空を見上げても、ひたすら白い光が覆っているだけだ……。異空間、という言葉が、一番しっくりくる。体も、元の自分の体に戻っていた。

「はい、全て……。」

そう言つて懐かしい記憶、懐かしい声に目を細めた彼女の視線の先にいたのは、彼女のような金髪を、身の丈よりもさらに長く伸ばした女性の姿だった。光の精霊、神代での彼女の母親だ……。人界で精霊と呼ばれている者は、実是在りし日の神々、それも各種族の長のことだった。彼女の母親は遥かな昔、光の神々の長だったのだ。今は、それも含めて全てを思い出した……。そして、彼のことも……。

「あなたは、彼を探さなければならぬわ。あなたのため、そして彼のために……。彼は、もう二百年も前からあなたを待っているわ。」

「探します。彼を、ヘレンツイを。人界に墮とされた時には、もう会えないかと思っていました。でも、転生できるなんて……。」

彼女のその言葉に、光の精霊は微笑んで見せた。

「そこに創造神の意図があったのよ。天界では掟に縛られて、あなたたちはどうしても結ばれない……。だから、あなたたちを少しでも可能性のある人界へと送ったの。わかってね……。」

「ええ、もちろんです。リラとフェリドがうまくいくかまでは保証できませんけど。」

彼女は軽い口調でそう言ったのだが、光の精霊はその言葉を聞いて表情を曇らせた。それで、彼女たちがいる異空間も暗くなる……。

どうやら、この空間を支えているのは光の精霊の力そのものらしい。「彼女を狙う闇も、また転生しているわ……。これまでの九度の転生でも、彼女たちが結ばれることはなかった……。あの者が、何度も横恋慕したのです。でも、決して彼女をあの者の手に渡してはいけませんよ。それは世界中を、そして天界や魔界をも揺るがすようなことになりかねません。」

「わかりました……。……理由を伺ってもよろしいですか、お母様……？」

光の精霊は、グツと唇を噛み締めた。美しい顔に浮かべられたのは、苦さ……。どうやら、相当話し辛いことらしい。だが、それでもティアナは聞きたかった。なぜリラが敵の手に渡ってしまうことが、全世界を揺るがすようなことになるのかを……。

「……さあ、もう戻りなさい……。」

「ちょ、ちょっとお母様！答えてくれないのっ？」

彼女の意識は、ふつつりと途切れてしまった。

「あれ、ここは……。」

次に彼女が目覚めたのは、黄金の光溢れる、清浄な土地……。その花々の中から、体を起こす。

「あっ……！」

何かが彼女の体の上を滑り、地面に転がった。それは、ダイヤモンドがあしらわれた花型のペンダントだった。ダイヤモンドは、光の

力の象徴……。と言うことは、これは……。

「聖具、なのね……。」

彼女には伝わっていた。その小さなペンダントが秘めている、膨大な力が……。静かに、だが激しくその中で波打っている、力の奔流が……。

「よし、なんかやる気出て来た！頑張ろうつと！」

そのペンダントに力をもらって、彼女は笑って立ち上がった。仲間がいるのは、多分正面の方向で合っているはずだ……。大きく伸びをしてから、歩き出す。自分がしなければならぬこと、やりたいことがわかった。

「まずはリラを素直にしないとね！」

光の弾けるような笑顔を空に向かって見せてから、彼女は歩き出した。

光の聖具（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。異国恋歌〜風空の姫〜の第十二話をお読み下さった皆様、ありがとうございます。

今回は主人公以外がメインのお話でしたが、いかがでしたか？感想など送っていただければ幸いです。

地獄行きの切符と新世界への一歩

「あ、ティアナ、おかえりなさい！」

戻った彼女を一番に迎えたのは、リラのその言葉だった。どうやら、今回の食事は彼女が用意してくれたようだ。

「へえ、朝御飯？おいしいそう！」

その言葉に、リラはほんの少し照れたように笑った。その話声で、他の三人も寄って来る……。

「さすがお姉様ですわ！お料理なんてなさったことなかったでしょう？」

「そうなの。適当に切ったり入れたりしてたらこうなったのよ。」

「それでこんなにおいしそうな料理ができたなら、リラさんは天才なんだね！」

皆が口々にそう褒める。確かに、彼女の料理はこの上なくおいしうだった。味見を、と思って黙ってそれを口に運んだフェリドが最初の犠牲者となった。

「う、うう……。」

彼はそう呻き声を漏らして、その場に力なく崩れた。誰もがその様子に目を見張る……。

「ちよつと何よー、下手くそな演技ねえ！まずそんな演技ならもつとそれらしくやりなさいよ！……んんんっ？」

二人目のティアナも撃沈。一体、彼らに何が起きたというのか……？この二つの変死体に共通していることはただ一つ、リラの料理を食べた直後に昇天した、と言うこと……。ジュリアが、恐る恐るその凶器を口に運んだ。そして……。

「おつ、お姉様、これっ！お塩とお砂糖を間違っている上に、入れすぎです！」

「えええっ？」

リラは、ジュリアが口にしたスープの方を一口飲んだ。二つの変死

体を作ってしまった肉料理の方に手を出す勇氣は、彼女にはなかった……。そして、舌がおかしいのではないかと言う疑念を抱く。

「な、何？これ……。」

彼女は固まった。そう、スープのはず、だ……。それなのに、口の中に嫌という程どろりとした甘さが広がる……。見た目とは裏腹の、想像を絶する味……。彼女は、この世に生み出してはならない物を生み出してしまった……。二つの変死体は、自力で死の淵から生還した。

「あ……うん、よし。リラの料理は観賞用ってことで。」

ティアナはおかしな形に唇を歪めながらそう笑った。一同が、コクリと頷く……。

「大丈夫ですよ、お姉様。旅の間に少しずつ覚えて行けばいいんですから。私でよろしければお教えしますわ。」

ジュリアの優しい笑顔に、リラは肩を落としながらも素直に頷いた。「ぷっ……。」

その様子を見ていたエルリックが、急にそう吹き出した。四対の視線が、一度に彼に注がれる……。

「な、どうしたのよ？急に笑うなんて、気持ち悪い……。あ、まさかりラの料理食べたのっ？」

ティアナのその言葉に、リラが白い目を向ける……。いくらなんでもひど過ぎるだろう、という、抗議の意を込めて……。

「まさか、違いますよ。リラさんにも苦手なことってあるんだなあ、と思って……。ほら、今までなんでも簡単にやってるってイメージがあつたし。」

「そうねー、正直ちょっと悔しかったから、良かったわ。人柱にされたことを除いて、ね！」

意地悪に笑う彼女に、リラはさらに口を尖らせた。その様子を見て、フェリドとジュリアが苦笑をもらす。彼にしか聞こえないような声で、ジュリアが囁いた。

「……お姉様をお願いします、フェリドさん……。」

彼の瞳に宿った疑問の色を見てとったジュリアの唇が、柔らかく綻んだ。そこから、また小さく言葉が漏れる。

「あなたに頼むのが、一番良いんです……。」

「勘違いじゃないか？僕は彼女に警戒されている。あの言葉遣いが何よりの証拠だろ？」

「……そうですね。でも、あなたに頼むのが一番良いんです。お姉さまは、気を許せないと思っていらっしゃる相手には決して柔らかい言葉は使いません。でも、ほんの少しずつでもあなたに対する態度は軟化しているでしょう？ですから、辛抱強くお姉様の心が開くのを待つて差し上げて下さい……。」

彼女のその言葉は、彼には全くもって意味不明だ。しかし、その表情から隠された何かがあるということを悟った彼は、黙って頷き返した。いつかそんな日が来ることを、期待して……。

「よし、じゃあ、明日の船で戻ろうか！その後は、ルクタシアに行こう。エルリックの炎の聖具を探しに、ね。」

「ちよつとー！何勝手に仕切ってるのよ！大体、聖具の話は聞かなくていい訳？」

ティアナの不満を、一同は笑って受け流した。彼女の首にかけられているダイヤモンドのペンダント。それが、何よりの証拠だ。それは、一行にとつては新しい世界への第一歩だ……。新世界への希望と期待で、彼らの表情は明け方の空と相まって明るくなっていた。

地獄行きの切符と新世界への一歩（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。

久々の更新となりましたが、読者様のお気に召したでしょうか？
のろい更新を気長に待ち続けて下さっている皆様、本当にありがとうございます。

稲光の中の襲撃

五人は、船に乗ったのと同じ港町で下船した。リラの表情が、曇る……。

「リラ、どうかしたの？」

ティアナがそんな彼女の顔を心配そうに覗き込んだ。その彼女に慌てて笑顔を返す。

「うっん、なんでもない……。」

彼女の脳裏に蘇ったのは、あの青年だった。黒い衣装に身を包んだ、彼……。あの日以来、彼女は心が重くなる度に星を見上げるようになっていた。故国の土に還った恋人を、思いながら……。この町にいと、あの青年と出会ってしまいそうな気がして、心が塞ぐ。優しい青年だった。最後の、あの事件がなければ……。

「気分が悪いなら、今日はこの町で休むこともできるけど？」

今度は、フェリドが彼女の顔を覗き込んで来た。その瞳の青紫の色に対して、彼女の体は条件反射で固まってしま……。それから、ついと視線を逸らした。

「いや、問題ない。早く行こう。」

あきらかに様子がおかしいのはわかっている。だが、彼女がそう言うのなら、それ以上詮索しても仕方ない。リラに声をかけた二人は、お互いに肩をすくめて見せてから歩き出した。

彼らは、馬を借りて港町を後にした。これから、ラッツィを横断してルクタシアに向かうのである。始めは嫌な曇り空だった空は、今は完全に機嫌を悪くして大粒の雨を降らせていた。ずぶぬれになりながらも、一行は次の宿場町まで、と思つて懸命に馬を走らせていた。

ピシャッ、ドゴオオオオオオオン！

近くに落ちた雷に、ジュリアが体を強張らせた。リラの目が、前方

に向けられる。何かが動くのが、稲光の中に見えたのだ。

「ずぶぬれねえ、可哀想に……。」

言葉とは裏腹に、その声音には憐みの情という物は全く込められていない。むしろ、彼らのその様子を愉しんでいるような声だった。

女性の、艶のある声だ……。一行は手綱を引き、馬を止めて降りた。再び、稲光がその声の主を照らし出した。きりりと整った顔立ちの、触発的な服装の女性だ。しかし、彼らの目は驚くべきものを捉えていた。山羊のような大きな角、猫のような尾……。それらは、その女性が持つ、一番の特徴だった。それは、彼女が人外の者であるというのを彼らにまざまざと見せつけている……。

「心配しなくていいわよ。用事があるのは彼女だけだから、あんたたちは消えてもいいわ……。」

女の指先が、ひたとエメラルドの瞳の少女に向けられた。指差された彼女の体を一瞬、怯えと言う物が駆け巡る……。その様子を横目で見ていたフェリドが、彼女を庇うように前に立った。

「残念だなあ、お姉さん……。天気の良い日ならデートでも、と言いたかったが……。生憎の天気だなあ。出直してもらえませんか？」

「な、お前、ふざけている場合かつ？」

リラが怒るのも無理はない。彼のその口調は、街行く女性に声をかける時と同じ位、軽い調子なのだ……。眼前の女性が、高笑いを響かせた。雷鳴にも地を打つ雨の音にも消されず、それは一行の耳朵を打った。

「なかなか面白いことを言うわね……。いいわ、指令を受けたのはその小娘のことだから、他の奴を煮るなり焼くなりは私の自由よね……。遊んであげるわ。」

「過激な愛情表現だなあ……。火攻めと来たか……。」

ボケた調子ではあるが、フェリドはあきらかに彼女を敵として扱い、油断なくその一挙一動を見据えていた。そして、彼らの目の前に急に現われた彼女も、それは感じ取っていた。

「悪くないでしょう？さあ、覚悟することね。あの方が生きたまま

連れて来いと言うのだから、私はその指令を全うするのみよ!」

リラを指差していた彼女の腕は、肘から下があつと言う間に鞭のように変化していた。リラが、息をのんだ。その攻撃をいち早く察知したフェリドが、剣を抜いてそれを受け流す……。それから、ペロリと舌を出して見せる。小憎らしい、という言葉が、一番しつくりくる表情だ……。

「生憎だったな、彼女は僕が予約済みだ。他をあたるようにご主人様に伝えてくれない?火攻めのお姉さん。」

「誰がいつお前なんかに予約されたっ?背後にも敵を作りたいのかっ?」

「お姉様っ!今はそんな場合じゃありませんわ!」

本気でフェリドに斬りかかりかねないリラを、ジュリアがギリギリのところで制止した。角と尾をもつ女性が、再び高笑いをする……。これでもか、と言いたくなる程、その声は何もない周囲に響き渡る……。

「その呼び方も素敵だけど、ピンとこないわね……。私はアノンワース。闇の大帝国ハーバナントの四大忠臣が一人よ。どう?それでもデートに誘ってくれるかしら?」

そう言つて、フェリドに向かって片目をつむる……。フェリドがその言葉に唇の端を吊り上げて答えた。

「うわあ、ヒモの生活ができそうだな……。僕の面倒一生見てくれます?お姉さんっ!」

その言葉が終わる前に、彼は地を蹴つて勢い良く飛び出した。そのまゝ剣を彼女に向かって突き出す。しかし、彼のその攻撃は空を裂いた。ふっと背後に気配が現われる。

「ダメよ、そんなのろい攻撃じゃあ、私は捕まえられないわよ!」「ちいっ!」

間一髪のところ、フェリドは後ろから襲い来る鞭での攻撃をかわした。彼が地に足をつくのと同時に、今度はアノンワースに向かって素早い弓攻撃がなされていた。もちろん、リラである。アノンワ

「スはそれをひらりと身軽に飛んでかわし、体勢を整え直した。

「甘いわよ！ほらっ！」

ヒュンと空を蹴り上げるような仕草をしたアノンワースの足先から、地を這う衝撃波が繰り出された。

「きゃあっ！」

その攻撃をかわしきれなかったリラは、思い切り後方に飛ばされた。

「じゃあ、辛い、行くわよっ！」

ティアナが、詠唱が終わった魔法攻撃を彼女に向けて放った。光が収束し、その後、一気に爆発を起こした。

「やったか……？」

「そんな訳ないでしょ！」

光の爆発を目を細めて見つめていたエルリックとティアナが、アノンワースに背後から強烈な突きを喰らわされた。その場に、二人とも倒れ込む……。ジュリアが、ぐつと前から彼女を見据えた。

「あら、無駄だつてことがまだわからないのかしら？ 案外頭悪いのねっ！」

彼女が再び衝撃波を伴う蹴りを繰りだそうとした、その時だった。急に、足が地面に縫い止められたように動かなくなった。どんなに力を込めても、それ以上、髪一筋も動かすことができない……。

「何をした？ 水の子……。」

彼女の表情が、そこで初めて変わった。ジュリアに対する敵意と、余裕のなさが浮き彫りになっている……。

「雨で……あなたを、縛っています……。フェリドさん、早く！ 長くは、持ちま、せん……！」

アノンワースの抵抗力は、ジュリアには想像を絶する物だった。歯を食いしばって、必死になっている……。彼女の鼻腔を、何かが流れ落ちた。鉄の匂いが、雨の匂いに紛れることなく認識される……。どうやら、力を使うことに集中し過ぎて、鼻の奥で血管が切れてしまったらしい……。それでも、今はそんなことに構う余裕すらもなかった。

「さようなら、お姉さん！」
レディー

袈裟がけに、彼の剣撃が振り下ろされた。今度の鉄の匂いは、雨の匂いに紛れている……。だが彼は、振り下ろした剣先に違和感を覚えた。やけに軽かったのは、気のせいだろうか……？彼の剣先には、紅い滴がちゃんと残されている。だが、その量は致死の傷にしてはあまりにも少ない……。

「……すまない、ジュリア。どうやら、ギリギリのところで逃げられてしまったようだ……。」

「い、え……。」

息も切れ切れな彼女に、布切れを差し出してやる。ジュリアは礼を言っただけを受け取ると、緩慢な動作で鼻にあてた。エルリックとティアナ、リラはアノンワースの攻撃を受けてしまったが、特に大事に至るような怪我はなさそうだ。

「あの方って、一体誰なんだ……？」

フェリドのその言葉に、リラも肩をすくめてみせた。彼女にだって、全く身に覚えがない。ティアナは、事情を知っているだけに顔を伏せた。あの方……。彼女には、予想はついている。何度も二人を引き裂き、何度もリラを手中に収めようとした、恐ろしい者……。正直なことを言うと、なぜ彼がリラにそこまで固執するのか、ティアナにもわかっていない。しかし、これまでの転生でも必ず彼からの邪魔が入ったというのだから、なんらかの理由があるに違いない……。

「綺麗だから……？」

確かに、神族一とも謡われたその美貌は、たとえ魔界に住む者であっても魅かれてしまうのだろう。しかし、そんな理由だけで彼が動くだろうか？あの、魔王が……。ギョツと眉を顰めた。

「何か、私の知らないことがあるのね……。」

その呟きを聞いたのか、ジュリアだけが彼女と同じように険しい顔をしていた。

稲光の中の襲撃（後書き）

異国恋歌〜風空の姫〜第十四話をお読み下さった皆様、ありがとうございます。

初めて戦闘シーンらしい場面を書かせていただきました。読者の皆様のお気に召せば幸いです。

暖炉の火

ハーバナントからの襲撃者アノンワースをなんとか撃退した一行は、宿屋を見つけてやっと一息ついた。宿の主人がいれてくれた暖炉の火が、室内を暖めてくれる……。六月も半ばだと言うのに、ずぶぬれになった一行は歯の根も合わない程震えていた。

「濡れた物は着替えた方が良い。」

フェリドのその言葉で、一行は二部屋に散り散りになった。女性陣の部屋と男性陣の部屋に分かれて二部屋を取ったのだ。しばらくしてから、全員がまた暖炉のある部屋に集まった。濡れた物を着替えただけでも温かに感じられたのだが、濡れそぼった髪や体を温めようと全員が考えたためだ。

「寒いー、寒いー……。」

「姉さん、やめてよ。余計に寒くなるじゃないか。ジュリア、大丈夫？」

「はい、私は……。」

そこで、ジュリアの視線がリラに注がれた。エメラルドの瞳は、暖炉に向けられたままだ……。どうやら、四対の視線が注がれていることにも気づいていないらしい。

『あの方って、誰なんだろう……？ 狙われるような覚えもないのに……。』

「アノンワースが言っていたあの方って、誰のことなんだろうな……。普通に考えればハーバナントの国王だろうが、リラ、恨みを買うようなことをした覚えはないのか？」

自分が頭の中で考えていたことをフェリドも考えていたと言うことに驚きを感じたが、別段不思議なことでもないように思われたので、それについては黙っていた。彼女が首を横に振ると、漆黒の髪から滴がばたばたとこぼれた。髪を拭きながら、言葉を発する……。

「そんな覚えは全くない。求婚の手紙が来ていた覚えもないし、ま

してや、外交上の問題だとは考えにくい。トリランタでは親和の方の政策を取っていたからな……。」

ハーバナントとの交流の方法は国によってまちまちだったが、大体が親和か反目のどちらかに分かれていた。親和政策を取っていたのなら、国家間での問題ではなさそうだ。となると、やはり個人的怨恨の可能性が高い……。

「そうか……。原因がわからないなら、対処のしようもないな……。」

フェリドはそう言っただけで溜息をついた。青紫の瞳が、暖炉の火の明かりを受けて赤みを増す。

「……。」

ティアナは黙っていた。彼女は、なぜハーバナント王がリラを狙うのかを知っていた。答えは一つ。ハーバナント国王が、あの男だから。過去の転生でも何度もしらとフェリドの間を裂いた、魔王の転生だから……。それを言ったところで、誰にも信じてもらえないだろう。彼らが前世の記憶を取り戻すことは、おそらく、異世界に封印されている聖具をこちらの世界に呼び寄せるための引き金になっているのだ。記憶を持っているのは、自分とジュリアだけ……。

「……力のない者ばかりね……。」

彼女は、自分の非力を呪った。彼女は、武具を扱うことがまったくもってできなかった。それはジュリアも同じで、はっきり言ってしまえば、ハーバナントからの襲撃にあっても、彼女たちには周囲を助けるなどということはできず、むしろ足を引っ張ってしまうのだ……。

「ティアナ、大丈夫？」

髪を拭き終えたリラが、そう心配そうに彼女の顔を覗き込んだ。慌てて、険しい表情を緩める……。

「私の心配をしようだなんて百年早いわよ、リラ！問題は私じゃなくてあなたの方でしょ？」

切り返された問いに、リラの瞳が伏せられた。失敗したな、と思い、

言葉を探す……。

「まあ、美人は損よね！うん！」

「普通は得するものなんだけどな、リラの場合は損してるかもな……。」

「どこが美人だ！たまたま貧乏くじを引かされたただけだ！」

ティアナの言葉にフェリドがつけたしてくれたおかげで、何とか場の空気が和んだ。それでも、彼女の中にある重さは消えない……。

「ねえ、リラ？」

フェリドと舌戦を繰り広げていた彼女の目が、自分に向けられた。それから、意を決して続きを強く吐き出す。たくさん吸い込んだ、温かい空気とともに……。

「私に武術を教えて！剣でも弓でも、なんでもいいの！皆の足手まといには、なりたくない！」

一同の目が、丸く見開かれる。ティアナの唐突な言葉に、全員が驚きを感じていた。

「もちろん構わないけど……。どうして？皆の足手まといになんていつなったの？」

きょとんとした表情で問って来るリラから一旦視線を外し、全員を眺める。皆が皆、同じ表情……。変なところで息が合うのね、と、おかしいことに感心してしまう。

「だって、そうじゃない！魔法は詠唱に時間がかかるし、その間に攻撃を受けないように、皆に守ってもらわなくちゃならないでしょ？」

「……ティアナさん、それを言ってしまうと、私も足手まといですわ。」

ジュリアが眉根を寄せてそう言った。ティアナの言葉の真意が、彼女には読めなかった。

「そんなことない。ジュリアはきちんと料理をしたり、皆の傷を癒してくれたり……。ジュリアにしかできないこと、たくさんやってるもの！このままじゃあ、私、お荷物じゃない！」

「そんなことないと思うけどな……。」

フェリドの方に激しい視線を向ける。自分の気持ちが、彼にわかるはずもない。熟達した剣の腕を持つ、彼になんて……。悔しさに、肩が震える。

「わかるはずないでしょ！あなたみたいに、ちゃらんぽらんなくせになんでもできる奴になんて！」

エルリックが笑いを噛み殺しているのが目の端に映ったが、今はそんな場合ではない。

「ぶっ……。ちゃらんぽらん、って……。」

フェリドが彼女の目の前で吹き出した。その様子は、彼女の癪に障るところか、逆鱗に触れてしまった。

「ふざけるのもいい加減にしなさいよ！リラが連れ去られても良いって言うのっ？下手をすれば、世界中を巻き込んでしまうような大惨事を引き起こしかねないのよっ？」

光の精霊の話を心の中に思い出して力一杯怒鳴ったその言葉で、彼の笑いはぱったりと途切れた。それから、真剣な青紫の瞳が向けられる。

「僕はそんなことは一言も言っていない。だが、君が言ったことは非常に興味深いな……。世界中を巻き込んでしまうような大惨事って言うのは、一体何のことだ？」

まずかった……。自分の理論が正統性を持つ物だと感じさせるために引き合いに出した、その言葉が……。しばらく悩んでから、嘘もつかず、だが、真実をまざまざと知らせることもない言葉を見つけた。

「光の精霊が、そう言っていたの……。リラを敵方に渡せば、全世界を揺るがすような事件が起きるって……。だから、どうしても渡せないの。だから、私もリラを守るようになりたい。今のままの私じゃあ、逆に守ってもらうことしかできないから……。」

エメラルドの瞳が、柔らかく細められた。その瞳に宿った色の優しさは、見る者全てを魅了する……。

「わかったわ、じゃあ、少しずつ教えて行くわね。でもティアナ、心配しないで。私、自分のこと位自分で守ってみせるから。だから、ティアナの武術は護身用ね。いいかしら？」

「……ええ、それでもいいわ……。」

その言葉に、張りつめていた空気が柔らくなったのが、全員の肌を感じられた。その次に来るのは、人間の三大欲求の一つ、睡眠に対する欲望……。

「おやすみ……。」

耐え切れなくなった者から順に部屋を出て、各々寝台がある部屋に戻って行く……。最後に残ったのは、ティアナだった。先程、リラを送り出したばかりだ。ペンダントをはずして、左手に載せる。そのダイヤモンドが、暖炉の明かりを受けて、赤々と煌めいた。

「これでいいんだよね、お母様……。」

一瞬キラリと明るく光って、ペンダントは彼女に頷いてくれた。

暖炉の火（後書き）

こんにちは、異国恋歌〜風空の姫〜第十五話「暖炉の火」をお届けいたします。

なかなか思うように執筆活動が進められません。更新をお待ち下さっている皆様、本当にありがとうございます。

再び、襲撃

「さてと、ルクタシアに戻りますか。」

宿屋を後にした一行は、西に向けて馬を走らせ始めた。

「あの無駄に色気があるDSの山羊角女はまた襲って来るかしら？」

「ティアナ、一応アノンワースって名前が……。しかも、余計に長くなってるわよ……。」

ティアナが彼女に付けた妙なニックネームに、リラが溜息をついて見せた。

「確かにあたってるけどな。」

フェリドがそう笑う横顔に、ティアナが鼻で笑う。

「そうよねー、どこかの誰かなんて、デートのお誘いまでしていた位だし。こんな美人を三人も連れて歩いていくせに、何が不満なのかしら？」

「自分で言うのが姉さんのすごいところだよ……。」

エルリックがそう溜息をついた横で、ジュリアが品よく笑った。彼女の銀青色の長い髪は、穏やかな風になびいていた。だが……。ピタリ、とそれが止んだ。同時に、リラの表情が曇る……。

「もうすぐ、ルクタシアだな……。」

一行の行く先には、大きな関所が待ち構えていた。もちろん通行手形は持っているのですが、関所自体は彼らの行動の妨げにはならないが、その向こうに広がっているであろう光景に、リラの表情が変わったのだ。ジュリアも軽く唇を噛んで俯き、ティアナとエルリックも表情を引き締めた。

「暗くなっただって仕方ない。今の姿が、ルクタシアの千年間の姿なんだ。他にこんな国を作らないためにも、僕らの代でこの連鎖を終わらせなければならぬんだ。」

フェリドがそう言っただけで、最初に関所をくぐった。その後に、リラ、ジュリア、エルリック、ティアナの順番にルクタシアに足を踏み入

れる……。もうすぐ夏だと言うのに、一面の銀世界……。

「……本当に、千年間も雪に閉ざされた国なんて、あったのね……。お伽話だと思っていたのに……。」

ティアナのその言葉の後は、皆しばらく無言でその雪景色を眺めていた。だが、やがてフェリドが口を開いた。

「……行こうか。怒りの火山の辺りは、地熱のおかげで雪が積もっていないんだ。その辺りで作物を育てているんだよ。……全然足りないんだけどね……。」

彼の曇った表情に誰もが声を失ったが、そのまま何も言わずに目的地に向けて出発した。

怒りの火山は、ルクタシアの西端、ラツツイとは反対側に位置している。一行は、ひたすら西に向けて馬を走らせた。幾日かは、天候にも恵まれて快適に旅を行うことができた。だが、怒りの火山まであと二日程、という位置まで行った、ある日のことだった。前日までの好天が嘘のように、一行は激しい雷雨に見舞われた。なんとなく、覚えがある光景……。

「なーんか嫌な予感がしない？」

ティアナが、辺りを見回しながらそう言った。そして、次の瞬間、それは確信に変わっていた。

「やつぱり……。」

彼女が、指差した先には……アノンワースがいた。

「ふん、よっぽど勘が働くようねえ。それとも、鼻が鋭いのかしら？」

ティアナが憤慨してその言葉に言い返した。

「あんたねえーっ！これだけ前と同じ状況だったら、嫌でもわかるわよ、普通！芸がないわよ、芸が！」

何となく、この二人は似た者同士の気がする……。リラは、その言葉をグツと喉の奥に飲み込んだ。そんなことを言ってしまったえば、後でティアナにどんな目に遭わされるかわかった物じゃない。だが、

彼女にはある確信があった。間違いなく、他の三人も彼女と同じことを考えているだろうと……。ジュリア、フェリド、エルリックと目を合わせて、軽く肩をすくめる。彼らからも、同じ反応が返って来た。

「ふっ、まあいいわ……。」

そう言い切ってマイペースな所も、ティアナとそっくりだ……。だが、ただならぬ気配に、彼女たちは身構えた。

ブォウンッ！

奇妙な音とともに、アノンワースは五体に分裂した、

「なっ、こんなの反則じゃないっ？」

「ルールなんかないわ。私がルールよ！」

ティアナの抗議の声に、アノンワースがそう答えを返した。ああ、自分がルールという所までそっくりだ……。それぞれに、戦闘体勢を整える。

「行くわよ！」

五体のアノンワースが、そう一度に言って飛び出した。

「五体ってことは力も五分の一だよなあーっ！」
ザンッ！

フェリドがそう誰にともなく声をかけながら強烈な斬撃を放った。

「そんなこと聞かれても、わかりませんわっ！」

すぐ近くにいたジュリアが、彼の先程の言葉にそう答えた。

『まずいな……。ジュリアやティアナには魔法の詠唱時間があるから、一対一は無理だ……。』

ティアナはリラに弓を習い始めていたが、まだ実戦で仕える程の出来にはなっていなかった。下手をすれば、味方の頭を射抜きかねないようなレベルなのだ……。

「ホホホ、どこを見ているのかしら？」

アノンワースの鞭が飛んで来て、フェリドの足元を砕いた。

「おわあー……。いくら美人でもDSの女王様はパスだな……。」

フェリドは油断なく相手を見据えながらも、そう軽口を叩いた。

「あらっ、それじゃあどんなのがお好み？」

アノンワースも、ふざけた口調で彼の冗談に乗った。

「あんなの……。」

フェリドの指差す先には、リラの姿があつた。アノンワースが、彼の指の動きにつられてそちらを向いた、その時だった。

「ジュリア、伏せろっ！」

その言葉があまりにも突然で何が何だかわからなくなっているジュリアの方へ、フェリドが斬撃を繰り出した。その切っ先から放たれた衝撃波は、ジュリアがギリギリで伏せて避けたので、そのままその一直線上にいたアノンワースの体に吸い込まれた。けたたましい叫び声とともに、ジュリアが対峙していたアノンワースは消滅した。

「助かりましたわ、ありがとうございます！」

「ティアナの援護に行ってくれ！」

ジュリアはコクリと頷いて、ティアナの方へ駆けて行った。

「くっそおー！」

エルリックは、ちょこまかと逃げ回るアノンワースに手を焼いていた。次々と放たれる火炎球を、軽い身のこなしでかわされる……。

「クスクス、どこを狙っているのかしら？」

「ダメだ、どんなに狙ってもかわされる！何か良い方法はないのか……？」

エルリックは、ギリリと歯噛みした。そして、ある方法をふと思いついた。そのまま、彼は先程と同じように火炎球での攻撃を始めた。

「フッフ、何度やっても無駄よ！」

しかし、最後の一つがそう余裕をかましていたアノンワースに見事命中した。

「ああああ、熱いつ！」

「へっへーん、君が動く所を予測して、こちらの動きがばれないように、火炎球を放つ手を急に右手から左手に変えたんだよ！」

彼はそう言つと、地を蹴つて飛び出した。その勢いを殺さずに、一気にアノンワースとの間に詰めて、袈裟がけに剣を振り下ろした。アノンワースは、音もなく消滅した。

「ふう。一番苦戦しているのは……姉さんとジュリアだ！」

どうしても呪文の詠唱時間が重なってしまうために、二人は防戦一方になってしまっていた。彼は、その場に加わって行った。

「ホホホッ、足元がふらついてるわよ、お嬢さん！」
「ビシッ！」

リラがひらりと身をかわす。

『おかしいわ……。どうして直接攻撃を仕掛けて来ないの？さつきから私の足元ばかり狙つて……。』

「フフフッ、考え事してる場合じゃないのよっ？」

「どうしても今考えなきゃならないことなんだ！」
「パチンッ！」

アノンワースが指を鳴らした瞬間、リラは我を失った。

「行きなさい、同士討ちよ……。」

アノンワースが指差したのは、フェリドの方だった。

ふと眼前にいたアノンワースが消えたので、彼はそれを妙に思った。
「ヒュンッ！」

後ろから、鋭い呼気が響いた。その攻撃を、慌てて剣で防ぐ……。

「リラっ？どうしたんだよっ？」

『目が光を失つて……。操られているのか……？』

「リラっ、目を覚ませよ！」

なおも、操られているリラの剣撃は止まらない。

「キイイイイイン！ガリイイイイイイイン！」

剣同士が激しく咬み合った時、フェリドに勝機が見えた。

「ガシイイイイイイン！」

リラの剣はくるくると弧を描いて宙を舞い、そのまま地面に突き刺

さった。それを拾いに走ろうとする彼女の腕を、彼が捕まえた。

「リラっ、いい加減に目を覚ませ！」

小さな体を引き寄せて強く包み込んだ、その時だった。

「何をする、変態！放せ！」

彼の胸を思い切り突き返して、リラは真っ赤になりながらそう言った。その色は、光が戻ったエメラルドの瞳とは対極の色のように思えた。

「随分な言い草だよな、操られて人に剣を向けたくせに。」

「うるさい！それとこれとは別だっ！」

「危ないっ！」

フェリドはそう叫ぶと同時に、リラの体を渾身の力で突き飛ばした。バシイイイイン！ズシャッ！

アノンワースの鞭が、彼の胸に鮮血で真一文字を描いた。

「ちいっ！」

フェリドはそう忌々しげに舌打ちをし、苛烈な相貌でアノンワースを射抜いた。

「今の攻撃を生身で受け止めるなんて……。馬鹿ね、死んじやうわよ？」

アノンワースは愉快そうに唇を歪めてそう言った。

「フェリド！」

突き飛ばされて尻もちをついていたリラが、慌てて彼に駆け寄った。ジュリアも寄って来て、彼に癒しの術をかけてくれた。ようやく、彼女たちとアノンワースの戦いも決着がついたのだ。

「……あら、殺^やられちゃったのね、分身たちは……。あーあ、我ながら役立たずで嫌になるわ。やっぱりオリジナルでないとダメみたいね……。……今日はこれで退散するわ。じゃあね、面白い坊や。」

アノンワースは最後にもう一度、怪我をしたフェリドの様子を愉快そうに眺めて、その姿を闇の中に躍らせた。ひどい雨の中、こんな状態でフェリドを置いておけば生死も危ぶまれるような状態になりかねない……。傷の深さも相当なものだろうし、何よりも流血がひ

どかった。応急処置の止血を手早く行ってから、リラはフェリドを立たせた。

「この近くに宿はないの……？」

「ある。一軒だけ……。そこに、行こうか。」

フェリドはリラを安心させたい一心でそう言っただけで笑ってみせると、自力で馬に乗った。

「辛くなったら言っ。休憩したりするから……。」

「ああ……。」

一行は、そのまま土砂降りの雨の中、馬を走らせ続けた。このときは、まだ誰も気付いていなかった。リラのフェリドに対する言葉遣いが、柔らかいものに変わっていたということに……。

再び、襲撃（後書き）

お久しぶりです。間に短編を出したりしていたのですが、異国恋歌の更新はかなり時間が開いてしまいました。申し訳ありません。

結び目と誓い

一行は、失血のせいで気を失いそうになっているフェリドの案内で、何とか宿屋に辿りついた。宿屋の前で、ついに彼は気を失ってしまった。

「フェリドっ！」

落馬しそうになった彼の体を、リラがなんとか支えた。それでも、彼女の細い腕のみで大の男一人の重さを支え切れる訳もなく、結局は落馬の衝撃がやわらいただけだった。エルリックがフェリドを肩に担ぐような形に背負った。

「姉さんとジュリアは、馬をお願い。僕はリラさんと、宿屋のご主人にお願いに行くから。」

普段は弟の言うことなど決して聞かないようなティアナも、この時ばかりは違った。黙ってその言葉に頷いて、両手で馬の手綱を握った。ジュリアも、それに続いた。

「行こうか、リラさん。」

エルリックは蒼白な顔をしているリラにそう声をかけて、宿屋の戸を開けた。彼らが入った途端、宿の主人が目丸くした。

「お前さんたち、ずぶぬれじゃないかね！……おや、彼はどうした？倒れているのか？」

宿の主人は、そう言ってエルリックの肩に担がれているフェリドの様子を見に寄って来た。

「そうなんです！ひどい怪我をしています……。部屋をお願いします！できれば、清潔なシートも何枚かお願いします！お代はちゃんと払いますから……。」

「わかった、二回の角部屋が開いているよ。シートを持って行くから、彼を連れて行きなさい。」

宿屋の主人は、そう言っただけで部屋の奥に消えて行った。

「ほら、リラさん。行こう。」

エルリックにそう促されて、宿屋の主人に鍵を渡されたリラは、先頭に立って階段を上った。

「この部屋だね。」

リラが鍵と戸を開けると、エルリックがフェリドを背負ったまま戸口をくぐった。そこに、宿屋の主人がシーツやタオルをたくさん抱えて入って来た。

「ほら、着替えだ。君たちも着替えなさい。彼の着替えは私がしておくから。ああ、君は隣の部屋で着替えなさい。隣の部屋も開いているから。」

宿の主人は、そう言っリラに隣の部屋の鍵と着替え、タオルを渡して、部屋から出した。リラは言われた通りに隣の部屋に入り、タオルで濡れそぼった髪や体を拭き、主人が貸してくれた白いチュニツクに身を包んだ。寸法が、まるであつたかのようにぴったりだった。隣に戻る時に、ジュリアとティアナの二人が戻って来るのが見えた。部屋の戸を、軽くノックする。

「あ、リラさん？入っていいよ。」

エルリックがその声をかけてくれたので、リラはその部屋の戸を押し開いた。着替えさせられたフェリドは、寝台に寝かされていた。その彼の枕元に、腰掛ける。

「フェリドは……？」

「ああ、止血がされていたから、命に別条はないと思うよ。ただ、あまりにもたくさんの血を失い過ぎたんじゃないかな？何か必要なものがあつたら、カウンターにいるから声をかけてくれ。」

宿の主人は、そう言い残して部屋の戸口をくぐり、階段を下りて行った。リラが、ホウ、と安心したかのように息を吐いた。

「心配してたんだね、リラさん……。良かったね。」

エルリックはそう笑うと、下から聞こえずぶぬれじゃないか、と言う声から何かを感じ取り、戸を閉めて出て行ってしまった。額に浮いている脂汗を、そっとタオルで拭ってやる。フェリドのその顔は、血の気を失って青白い色をしていた。彼は、自分を庇ったが故

にそうなってしまったのだ……。その彼の行為の重さに、彼女の心は塞いだ。なぜ、自分を庇うだなんて愚かな真似を、彼はしたのだろうか……？

「……ラ……。リ、ラ……。」

うわ言で名前を呼ばれたことに、彼女はひどく驚いた。温かいはずの彼の手を、握ってやる……。今は自分と同じか、それ以上に冷たい。その事実、彼女は心の底で動揺した。彼はまさか、このまま……？

「やだ、死んじゃダメ！」

その言葉が、自然に口について出た。彼女の心の中にある、確固としたもの……。

「……リ……。」

うわ言に、また彼女の肩がびくりと揺れた。彼の手を握る自分の手の力が自然と強められたことに、彼女は気付いていた。

「大丈夫よ、ずっとついてるから……。」

結ばれた手と手の上に、温かい滴が一粒、こぼれた。

「暗いな……。ここはどこだ？」

フェリドは、辺り一面の闇の中で自分の位置を把握しようと、懸命に目を凝らしていた。ぼんやりと、前方に人影が浮かんた。あれは……。

「リラ！」

彼女が、振り返った。それから、普段彼には絶対に向けないような、柔らかい笑顔を浮かべる。だがそれは、彼にとってはなぜか懐かしいものだった。胸の奥が、切なさで締め付けられる……。そっと伸ばした腕に、彼女は嫌がることなく応じた。これも現実の世界では絶対にあり得ないことなのに、どこかに覚えがある感覚だった。

「リラ……。」

腕の中の彼女が、彼を見上げた。自分に真っ直ぐに向けられたエメルドの瞳に、彼はひどく動揺させられた。彼女の真紅の唇が、言

葉を紡いだ。

「ごめんなさい……私、行かないと……。」

「行くつて、どこへ……？」

彼女の体が、彼の腕から離れた。そして……。

「さようなら……。」

彼女のその言葉が、彼の耳朶を打った。彼女の心地良い声音。それが、耳を疑いたくなる、塞ぎたくなるような言葉を音にしたのだ……。彼女は、彼に背を向けた。そのまま、ゆっくりと前方に向かって歩き出す……。その向こうに、ぼんやりとした影が浮かんた。彼は、それに覚えがあつた。間違いない、あれは……。

「リラ、行くな！そっちに行っちゃいけない！」

彼女は、彼の方を振り向きながらゆっくりと歩いて行く……。そして。

「フハハハハハッ！」

そう気味の悪い笑い声が、彼がいる空間全体に響き渡った。彼女の長い黒髪が、前方の影の手に絡め取られる……。彼女の体は、あつという間にそのマントに包まれ、さらわれた。

「リラ！戻れ！そいつは魔王だぞっ！リラーっ！」

叫んでも叫んでも、彼女は戻つては来ない。だんだんと、彼の意識も遠くなつていつてしまった。

「フッ！ハッ、ハッ、ハッ、ハッ！……つつっ！」

気が付いたフェリドは、汗だくで闇の中の寝台の上にいた。体にきつちりと巻かれた白い包帯には、赤く血がにじんでいた。

パタン……。

ドアが静かに閉まつた。入つて来たのは、包帯と水を持ったリラだった。

「……気が付いたのねっ？」

リラは彼が座っている寝台の枕元の椅子に腰掛けた。

「ここは……？」

そう口から言葉がこぼれるのと同時に、彼は辺りを見回していた。

「宿屋の部屋よ……。あなたはここに着くのと同時に倒れたの。丸一日以上も眠っていたのよ……。包帯、換えましょ。」

リラはそう言うと、器用にその結び目を解き始めた。フェリドの胸の少し下に口を開いた傷は、ほぼ真横に走っていて、生々しく血を湛えていた。

「この薬、きつと染みるわよ……。麗月草から取ったものだから……。」

そう言つてリラは、くすんだ緑色の軟膏を指先にたつぷりと付け、フェリドの傷口にそれを塗った。

「……っつ……！」

彼の表情が、焼けるような痛みに歪んだ。ふと目だけを上げて彼のその様子を確かめてから、リラはまたその傷口に視線を戻した。その表情は、彼以上に痛々しげだ……。

「しみるの？でも、我慢して……。闇の傷には、これが一番良く効くのよ……。」

リラはそう話してやりながら、彼の体を手早く拭き終え、包帯を巻き始めていた。

「……どうして……あんな無茶したのよ……？」

「そりゃ、君が怪我したら痛いだろうなあ、と思ったから……。」

「あなただって怪我したら痛いでしょう？」

「……君が怪我をするよりは、マシかな……？」

「……意味わからない……。」

そんなやり取りを交わしながら、リラは彼の体に包帯を巻き終えた。「……。」

フェリドは、目の前で器用に包帯の結び目を作っているリラが、先程の夢のように自分に背を向けてどこかへ行ってしまうのではないかと思うと、落ち着かなかった。

「よし、できたつと……。きゃっ！」

リラは、そのままフェリドの腕に捕まえられてしまった。傷口の炎

症から、彼は熱を出していた。熱っぽいその腕に包まれた時、彼女の中に何か温かい感情が流れ込んで、リラはそっと目を閉じた。

「まったく……。魔王なんかにはさらわれるなよ……。僕を置いて、どこにも行くな……。ずっと、そばにいるんだ。僕が君を護るから、ずっと……。」

「フェリド……。」

リラの頭の中で、フェリドのその言葉がリフレインし続ける……。

彼女は、ずっと誰かのその言葉を待っていたのかもしれない。彼女の内側にある弱さに気付いて護ってくれる人を、待っていたのかもしれない……。

「ずっと……ずっと一緒にいるわ……。だからあなたもずっと、私を護ってね……。」

リラはこの時、自分の中に新しい気持ちが生まれる予感がしていた。まだまだ気付くことはないが、いつかはその気持ちを素直に見つめられるようになるのかもしれない……。彼女はそう思って、彼の腕の中で真紅の唇をほんの少し、笑みの形に歪めていた。

結び目と誓い（後書き）

異国恋歌〜風空の姫〜第十七話、いかがでしたか？
久しぶりのハイペースでの更新です。もしよろしければ、感想などを聞かせ下さい。
ありがとうございました。

手が、届いた日

カーテンの隙間から差し込む朝日に、彼は目を覚ました。傷口を痛めないように、静かに起き上がる。ふと、自分が横になっていた寝台の枕元の椅子で眠りこんでいる少女に目が行った。看病疲れのせいだろう。彼女の白い手が、彼は何よりも愛おしかった。彼女が責任を感じる必要は何もないのに、彼が朦朧とした意識の中で目を覚ますと、いつも彼をエメラルドの瞳が見つめていたのだ。そして、その瞳には決まって涙がうつすらと浮かんでいた。彼女の見せかけだけの強さは、そういった所でばろが出る……。

『僕が絶対、護つてみせる……』

彼女とそう約束したことによって、彼は決意を新たにした。二カ月前のフェリドには、あり得ない発想である……。

『一人の女性を思い続けるということが、今ならわかる気がする……』

「……」
「うん……」

少女が身じろぎして、目を覚ました。

「私……眠っちゃったのね……」

目を擦りながら呟く少女に、フェリドはそうだね、と声をかけて柔らかい笑顔を向けた。

「フェリド！もう起きていいの？傷はっ……？」

「まだこれが精一杯さ。でも、君のおかげだよ。ありがとう……」

青紫の瞳の柔らかい光に耐えられなくなって、リラは自分の手元に視線を落とした。しばらくの間、沈黙が室内を満たした。

「言葉……」

沈黙に耐え切れなくなったフェリドがふとこぼした言葉に、エメラルドの瞳が上げられた。実を言うと彼も、彼女の瞳の色は苦手だった。心臓が、飛び出しそうな程に狂走する……。何かグッと強く、その心臓を締め付ける……。それは、切なさ、というもののなのかも

しれない。

「君の言葉遣い、柔らかくなつたな、と思つて……。」

「……そ、そう……。」

なんと反応して良いのかわからない。だが、彼が自分を庇ってくれた、その事実で、彼に自分が心を開いたというのも真実なのだ……。彼は、彼女の心の一番深くにまでその存在を示してきた。二度と、他者には踏み入れさせないと誓った領域。なぜなら、その領域に入つた者を失う喪失の痛みは、彼女の小さな体には大き過ぎるから……。それに……。

『コルレッド……。』

彼女が思い出したのは、亡くした恋人のこと……。彼が生きていたら、こうはならなかつたのではないだろうか？その思いが、彼女の感情に歯止めをかけていた。

「どうかした？」

「いいえ……。」

フェリドの問いかけに、リラは曖昧に笑つて答えた。心の奥底にその手が届いても、そこに何があるかは見透かされないように、精一杯表面を取り繕う……。

「ほら、横になつた方がいいわ。あなたの怪我が良くならないと、出発できないもの……。」

リラはそう言つてフェリドに横になるように促し、上掛けの布団を掛け直してやつた。

「すぐ良くなるさ。あ、君の看病次第かな？」

「……死にたいみたいね……？」

「まさか、そんな。」

リラの冷たい視線と言葉を、フェリドは笑つてうまくかわした。こんなやり取りをできることが、嬉しくてたまらなかつたのだ。ほんの少しでも、彼女に近付けた気がする……。

「ね、リラ。」

彼が向けた笑顔に、彼女は思い切り怪訝そうな表情を向けた。それ

になんでもないよ、と答えてからも、一人でニヤニヤしてしまう…。

「……熱で頭おかしくなったのかしら……？一人で笑ってるなんて、絶対に変……。」

「そうそう、頭がおかしくなったんだよ。」

やたらと機嫌良くそう言いきる彼に、彼女は最後にはお手上げといった様子で溜息をこぼした。朝の日差しは、室内に明るく差し込んでいた。

手が、届いた日（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。

お話の流れで、区切れの良い所で切ったとしても短い話になってしまいました。申し訳ありません。

四千年越しの、ただいま

フェリドの傷は、二週間で塞がった。若いということが理由で回復が早かったのも事実だが、それ以上に、リラの付きっ切りの看護の賜物ではないか、とティアナは考えていた。

「……それで、本当に明日から旅を再開できるのね……？」

腕を組んで少々不機嫌そうに、ティアナはフェリドにそう言った。

「ああ、大丈夫だよ。ほら、外を見るよ。真っ白だろ……？ 急がないと、ならないんだ……。」

ここは、彼の故国。その故国を救うために旅に出たのだから、彼は他の旅仲間より余計に焦りを感じていた。

「僕のせいで旅が遅れるのは嫌なんだ。少しでも急ぎたいんだよ。」

「……せいぜい足を引つ張らないようにね。私もジュリアも結局魔法しか使えないし、敵の人数が多かったらどうしようもないんだから……。」

「ああ、わかってるよ。」

フェリドはそう言って笑ってみせたが、反対にリラは不安げな顔をする……。

「アノンワースだって、またいつやって来るかわからないわ……。」

それに、四大忠臣ってことは、まだ後二人はあんなのがいるのよ……。

……。

彼らが知っている四大忠臣は、ヴィシアシーとアノンワース。ヴィシアシーは、トリランタで撃退した。だが、四という数字から考えると、もう二人、あのレベルの魔物がいるということになるのだ……。

「どちらにしろ、十分に気を付けて旅を続けなければなりませんね。ここにおいても危険なことには変わりありませんし……それならいっそ、精霊の領域に早めに隠れてしまった方がいいかもしれませんね。」

……

「そういうこと。」

リラの不安げな表情をよそに、フェリドは笑顔を作ってみせた。

「うーん、体がなまってるなあ……。」

フェリドは翌朝、馬にまたがりながらそう言っで腰を捻った。

「仕方ないでしょ、二週間も寝てたんだから。それでまともに動けたらただの化け物よ。」

「ハーバナント国籍の疑いが生じるって訳か……。それはちょっと嫌だなあ……。」

そう言っで、彼は腰に佩いた剣を抜いて見せた。

「うーん、しつくり来ないなあ……。」

馬上で剣を振ったりしている彼の様子をしばらく皆で眺めていたが、きりがないとティアナが判断したので、一行はフェリドを無理矢理納得させて出発した。

途中ハーバナントからの妨害にも遭うことなく、一行は無事に怒りの火山、炎の領域に足を踏み入れた。暑い、という程ではないが、地熱の影響で暖かい……。エルリックが、ふと火山の方を振り仰いだ。

「誰か呼んだ？」

「いいえ、誰も……。」

エルリックのその問いに、ジュリアはきょとんとしてそう答えた。しかし、彼は納得いかない様子で辺りを見回している。

「馬鹿ね、エルリック。そんなこともわからないの？ 精霊が呼んでるのよ、きっと。まだかー、ボケエルリック。早くしないと聖具をやらないぞー、ってね。」

ティアナが急に声を太くしておかしな真似をしたので、全員でお腹を抱えて笑った。涙をその目に浮かべながら、エルリックが顔を上げた。

「うん、大分違うけど、そうみたいだ……。僕、ちょっと行って来

るよ。」

エルリックはそう言うのと、タタツと駆け出して、行ってしまった。猪突猛進、鉄砲玉……。

「待っているしか、できませんね……。」「

そう言ったジュリアが、一番複雑な表情を浮かべていた。彼は、思いつくのだらうか？自分と過ごした、平和な時代を……。深い青の瞳が不安定に揺れたことに気付いたのは、ティアナのみだった。

「あいたたた……。まったく、精霊って手荒だなあ……。」

そう悪態をついた彼は、自分の過去世を覗き見ていた。いや、詳しくは再体験させられていると言っべきなのだろう。全ての答えがそこにあると言って、出会って早々、炎の精霊は彼に過去見の魔法をかけたのだ。魔法、というのが、彼の頭を思い切り叩いてトリップさせるという少々手荒な物だったために、先程の言葉が口について出たのだ……。

『あつ、ジュリアだ！』

彼の視線の先には、神々の泉に素足を浸してくつろいでいる、少女の頃のジュリアの姿があった。気付けば、彼の両手には色とりどりの花が抱えられている……。彼はそれを持って、ジュリアの元に駆け出した。

「ジュリア、お待ちせ！」

「エルリック……。わざわざごめんなさい。」

「いいんだよ。じゃあ、前を向いて。」

彼はそう言っ、ジュリアの銀青色の長い髪に、色とりどりの花を編み込み始めた。銀青色の地に、赤や桃色、黄色の模様が落とされていく……。

「よし、できたっ！」

彼女は、エルリックが編み終わった三つ編みを確かめて、ニコリと笑った。そして……。

「ありがとう、エルリック……。」

目を細めて品よく笑う、笑顔……。その、あまりの眩しさ……。ピシッ、パライイイイイイーン！

彼の中で、何かが弾けた。同時に、四千年分の記憶がその頭の中を駆け巡る……。彼女のその笑顔で、彼は、全てを取り戻した。平和で穏やかだった時代、光満ちる無垢な世界……。リラとフェリドを擁護し、人界で再びめぐり逢おうと誓って、彼女と別れたこと……。そして、その時交わした約束……。

「そうだ……僕は……。」

約束したのだ。決して彼女のことを忘れないと。生まれ変わったら、最初に探し出すと……。

「思い出したようだな……。」

いつの間に過去から戻って来ていたのか、揺らめく炎だけの空間に、彼は一人の男と立っていた。炎があるのに、それはまったくもって熱くはない。ただ、温かく彼の心をくすぐるだけ……。そして、目の前にいる男。彼こそが。

「炎の、精霊……？……って父さんっ？」

「そうそう、その通り。まったく、我が息子ながら相変わらず鈍いなあー。そんなふうだったら、ジュリアにも愛想を尽かされるぞ。」

その飄々とした物言い……。そうだ、間違いない。彼こそが、エリックが炎の神の一族として生を受けた時代での、父親……。

「放っておいて下さい！父さんにそんな心配して欲しくありませんっ！……でも、当たってるかもな……。」

彼女との約束を、自分は忘れてしまっていた。忘れないと言ったのに、全てを思い出したのはたった今……。

「ど、どうしよう……。そんなことになったら……！」

自殺ものだ、という続きを言う前に、炎の精霊が彼の言葉、暗い思考を遮った。

「いや、大丈夫じゃないか？お前、記憶もないくせに異常なまでに彼女にこだわって、大切にしていたからな。もうそれは、異常なまでに。」

「父さんに異常だなんて言われたくありません！それに、なんでそんなこと知ってるんですかつ？」

じろりと彼を睨んでエルリックがそう言った。普段温和な彼からは想像もつかないような恐ろしい視線を、炎の精霊は軽く受け流した。「ほら、かわいい息子のことだぞ？なんでも知っておきたいだろ？二十四時間三百六十五日、びっちり観察しているぞ。」

「……単に暇なだけなんですね、父さん……。」

彼のその言葉に、父親の表情がふと険しいものになった。

「……そうだな……。最近の人々は、精霊の恩恵という物を忘れ始めている……。あちこちで精霊祭がなくなったり、趣旨を変えられたりしている……。人々の祈りが精霊に届くことが、なくなってきた……。この世界の崩壊の原因は、ハーバナントの闇だけではない。そういった、人々の心も影響しているんだ……。」

「なるほど……。精霊たちの力では、どうしようもなくなってきた……。いるのですね……。」

エルリックが真剣な表情で発した言葉に、炎の精霊は大きく頷いた。「そうだ……。人々の祈りや願いを、精霊は糧としている。それが届かなくなってきたということは、精霊の力、ひいてはこの世界自体の力が弱まって来ているということなんだ……。」

「……。」

人々は、気付いていない。彼らが精霊の手を離れ、自ら世界を造っているなどという驕った考えが、その世界の崩壊を招いているという……。

「まあ、そんなこと言っただって今は仕方ない。とりあえず、お前は人界へ戻れ。」

「えっ、父さん、聖具は？」

慌てるエルリックに空間転移の魔法をかけてから、父親はまた飄々とした態度で笑った。

「そっちに戻ったら持つてるよ。それから、一つ忠告だ。風空^{かせ}の姫を、奴に渡すな……。彼女が奴の手に渡るということは、その時点

での世界の崩壊を意味している。」

その言葉を最後に、エルリックの思考は闇に沈んだ。風空^{かぜ}の姫、リ
ラさんを、奴に渡すな、だって……？ 薄れて行く思考の中で、その
理由が何かを、彼はずっと考えていた。

「……………」

ジュリアは、一人起き上がって空を見上げていた。他の者は、すでに眠りの精に魔法をかけられていた。美しい三日月が空に登って行く様子を、彼女はずっと眺めていた。どれだけ待てばいいのだろう、どれほど気を揉めばいいのだろう。そう、ずっと思いながら……。
フワリ。

ふと、彼女の視界が温かいものに覆われた。柔らかいそれは、間違いない……。

「エルリック……？」

彼女のその言葉で、その視界を覆っていた目隠しが外される……。その目隠しの正体は、エルリックの五本の指だった。彼は、ジュリアの隣に腰掛けた。

「……………怒ってる……………？」

しばらくの沈黙の後のあまりに唐突な問いかけに、ジュリアはきよ
とんとして見せた。

「約束……………忘れてたから……………」

隣で俯いて見せる彼に、彼女は笑いかけた。彼の記憶を取り戻させた、あの、柔らかい笑顔……。

「いいえ、ちつとも……………だって、もう、思い出してくれたから……………」

狂おしいまでの想いに、彼はその身を任せた。彼女の冷たい体が、自分の腕の中で呼吸を続けている……。

「……………ただいま……………」

それは、彼の四千年越しの言葉だった。

「っ……………！ おかえりなさい……………」

細い腕が自分の体に巻かれるのを、彼は感じた。四千年は、長くて、短い……。

四千年越しの、ただいま（後書き）

異国恋歌〜風空の姫〜第十九話をお届けいたしました。

ここまでお読み下さっている皆様、本当にありがとうございます。

どうしても定期的に更新することができませんが、よろしければ今後もお付き合い下さいませ。

森の少女

「へえ、これが炎の聖槍か……。」

次の日皆が起きると、エルリックはまず最初に自分が手に入れた精霊の聖具を見せた。ガツチリとした大きなものだが、肩幅が広くしつかりとした体つきの彼には丁度良い位の大きさだった。

「こんなに大きいのに、重さなんかちつとも感じないんだ。これなら、前よりもつと良く戦えると思う。」

彼はそう言つて、眩しい笑顔をジュリアに向けた。彼女の柔らかい微笑みが、それに返される。

「はいはい、二人の世界に入らないでよー。」

ティアナがそう言つて二人の間に割つて入った。

「ティアナ、弟を盗られたことに対する焼き餅か？」

そんな彼女を、フェリドがからかう。ティアナが真つ赤になって憤慨した。

「そんな訳ないでしょ！私に向かってそんな口をきくなんて、フェリドのくせに百万年早いわよ！」

「うわ、まさか万年単位で来るとは……。」

フェリドはそれで意気消沈した。リラに視線で助けを求める。

「あら、自業自得でしょ。ティアナをからかうなんて、本当に百万年早いわよ。」

バツサリ。いとも簡単に切り捨てられてしまった。

「はいはい、そーですね……。」

晴天の元、また一つ希望の光見えたところで、旅が再開された。

「……この辺りのはずなだけだなあ……。」

一行は、時の子に心当たりがあるというフェリドの案内で、ルクタシアの外れまで来ていた。この先に次の大陸に渡るための港があるので丁度良いと言えば丁度良いのだが、どうやら道に迷つてしまつ

たらしい。無理もない話だった。時の子が暮らしている家というのが、鬱蒼と茂った森の中にあるというのだから……。木々の枝がひどく込んでいて、陽の光は森の中に届いていなかった。ティアナが指先に灯した光と、カンテラの明かりで一行は移動しているのだ。「闇雲に歩き回ったって仕方ないわ。少し休憩して、ゆっくり考えましょう。」

リラがそう言つて腰を下ろしたので、一行はその場で休憩をとることにした。

「お茶でも淹れましょうね。」

ジュリアがそう言つて荷物の中からお茶っ葉を取り出した、その時だった。

「いやーっ！」

女の子の悲鳴が、森中に響いた。一行が、それに身を強張らせる。

「来るなー！こっちに来るなー！」

どうやら、何かに追われているらしい。

「こっちからだよなっ？行こう！」

フェリドがそう言つて駆け出した。そのすぐ後にリラが続き、残りの三人も駆け出した。

「いやーっ！無理無理無理っー！」

「あそこかっ！」

フェリドの視線の先には、妖鳥に追われている女の子の姿があった。妖鳥の体長は、およそ二メートル。こんなのに追いかけられているのだから、先程の尋常ではない叫び声にも納得がいくというものだ。「リラ、届くかっ？」

彼がそう言うが早い、リラはすでに弓を構えていた。

「任せてっ！」

ヒュンッ！

耳元で風を切るような音がしたかと思うと、彼女が放った矢は、見事に妖鳥の左目を射抜いていた。

ビュッ！

続いて二発目。今度は、妖鳥の右目が射抜かれる。世にも恐ろしい叫び声を上げて、妖鳥が怒り狂って暴れた。凄まじい羽音に、女の子が震え上がる……。

「ご近所迷惑だぞっ！」

そう言っつてフェリドが止め^{とど}の剣撃を放ち、妖鳥はけたたましい断末魔の声を上げて、その場に崩れた。

「もう大丈夫だよ。」

フェリドはそう言っつて、いち早く少女に歩み寄った。そして、その肩を抱いてやる。四対の白い目が、彼に注がれていた。彼らが助けた少女は、せいぜい十二、三歳。なるほど、ストライクゾーンの広い奴だ……。そんなことを思っていた四人だったが、少女が衝撃の言葉を放った。

「あーっ！お兄ちゃん？」

「……は？」

ティアナが、耳を疑っつてそう息を漏らした。他の三人も、同じように今聞こえたことが信じられないらしい……。

「ちよっとお兄ちゃん！近くに來ていたなら、どうしてあんな怖い目に遭う前に助けてくれなかったのよっ？妹がかわいくない訳っ？と言っつか、何しに來たのよっ？」

「うーん、誰かと対を張れるわね……。」

「ちよっつと、まさか私っ？失礼ねー、こんなにわがままじゃないわよ！」

リラのその感想に、ティアナがそう反発した。彼女の場合は、わがままの領域を飛び出して女王様の領域なのだから、笑うしかない。

「何？その人たち？お兄ちゃんの取り巻き？」

「生意気なガキね……。こんないい女が、フェリドなんかの取り巻きな訳ないでしょ！」

「子供相手にムキになるなよ……。しかも、何気にひどいことを言われた気がする……。」

フェリドがそう言つて溜息をつく、エルリックも彼に同調して溜息をついた。

「はじめまして。お兄ちゃんの……えっと、お友達？……違つかもとにかく、私の名前はリラ。あなたは？」

「ちよつと待つてくれよ！僕は友達以下の扱いかつ？」

フェリドの抗議の声は無視して、リラは少女に見入った。

「私はエリゼ。フェ、フェリドお兄ちゃんの妹よ。もしかして、お兄ちゃんと一緒に旅をしている人？」

「そうです。私はジュリアです。こちらがエルリックとティアナさんですよ。」

ジュリアが紹介してくれる順番に二人を見たエリゼは、ティアナに視線を向けた時に鼻で笑った。

「なっ……！」

ティアナがそれに続けて怒りの声を上げそうになったが、ギリギリのところでもエルリックが制止した。

「エリゼーっ！」

彼女を探す声が聞こえた。エリゼが、座ったままそれに答える。

「ここよーっ！こっち！」

彼女の声に導かれてやって来たのは、鳶色の髪に青い目の逞しい少年だった。

「ちよつとアラン！アランがすっかりしていないから、こんな大きな鳥に襲われたじゃない！怖かつたんだからね！」

エリゼはそう言つと、フェリドの腕から逃れてアランの腕にぴつたりと纏わりついた。

「お前が勝手にうるちよろしたんだろ。気を付けろよ。……エリゼを助けていただ……。」

アランと呼ばれた少年はそこで言葉を区切つて、じつとフェリドを見つめた。

「……フェルディ、むぐっ！」

何かを言いかけたアランの口を、エリゼが慌てて塞いだ。

「あ、アランも気がついたっ？ そうだよ、フェリドお兄ちゃんだよっ！」

「あ、ああ……。」

なんとなく不自然な様子だが、そんなことに構ってもいられないような事態をリラが思い出した。

「あつ、荷物！」

彼女たちは、エリゼの悲鳴を聞いた時に慌てて飛び出したので、荷物を置き忘れて来てしまったのだ。

「ああーっ！ あれには今後の食料がっ！」

エルリックもそれで思い出して、その声を上げる。

「嘘でしょーっ？ 誰か場所わからないのっ？ 飢え死になんてしたくないーっ！」

ティアナも青い顔でそう言う……。ジュリアが冷静に答えた。

「あの状況で荷物に気が回るような人はいませんわ……。闇雲に走りましたから、場所もわかりませんし……。」

どんよりと暗い空気を醸し出す一行に、アランが遠慮がちに声をかけた。

「……あの、エリゼを助けて下さって、ありがとうございました……。皆さんがそのせいで荷物をなくされたのなら、その……探すのを手伝います。」

「ちよつと、この広い森の中をどうやって探すのよっ？」

今後の食事情が心配になったせい、ティアナが恨みがましい視線をアランに向けた。

「いや、ティアナ。大丈夫だと思うよ。走ってすぐにエリゼを見つけたんだから、そんなに遠くまで来てないはずだ。手分けして探せばすぐに見つかると思うよ。二人一組で探そうか。」

「僕は一人で構いません。森には慣れてますから。」

アランはそう言ってエリゼを腕から引き剥がすと、一人で茂みに分け入って行った。

「じゃあ、僕はジュリアとっ！ 行こう。」

エルリックとジュリアの組も、アランとは反対側の茂みに分け入って行った。

「じゃ、そういうことで！」

フェリドはそう言って近くにいたリラの手をとった。

「ちょ、ちよっと！」

ティアナの制止も虚しく、彼らも別の茂みに姿を消した。

「何よ、皆してっ！私にこの生意気なおチビさんと組めっという訳っ？」

「文句ばかり言っでないでさっさと探してよ、おばさん！」

「何ですってー！」

相性がいいのか悪いのか、仕方なくティアナはエリゼと荷物探しを開始した。二人が荷物を見つけるのは、口論のせいで注意力散漫になり、夕方になったとかならないとか……。

森の少女（後書き）

異国恋歌〜風空の姫〜記念すべき二十話目です。

お読み下さっている皆様、本当にありがとうございます。これから
もできる限り早く更新していけるようにいたしますので、どうぞよ
ろしくお願いいたします。

時の子

「あーあ、疲れた。お兄ちゃんたちが荷物をなくしたせいだからね！」

「何よ、どこかのおチビさんが悲鳴を上げたりしなかったらなくなさなかったわよ！」

「ティアナ、抑えて……。」「

エリゼの言葉にいちいち反応してみせるティアナに、リラがいい加減うんざりしたようにそう言った。アランも、エリゼを^{たしな}窘める。

「エリゼ、いい加減にしろよ。フェリドさんたち、困ってるだろ？」

「だってこのおばさんがー！」

「だから誰がおばさんよーっ？」

果てしのない言い合いに、五人分の溜息が重なった。彼女たちは今、アランに案内されて彼とエリゼの家にお邪魔していた。なんとか荷物を見つけた一行だったが、ティアナとエリゼの様子が相変わらずで、ほとほと困り果てていた。

「そう言えばフェリドさん、時の子の行方に心当たりがあるとかで、ここを訪れたんでしたよね？それで、どうですか？」

話題を変えようと思い立ったジュリアの問いかけに、フェリドではなくエリゼがきょとんとしてそれに答えた。

「何よ、お兄ちゃん。私を探しに来たの？」

「はっ……？」

ティアナが、思わず疑問符つきで息を漏らした。そのままフェリドに視線を当てる。フェリドが、硬直した。

「ちょっと、まさかこの生意気なおチビさんが時の子だなんて、言わないわよね……？」

醸し出している黒い空気に、フェリドがゴクリと唾を飲んだ。その様子で全てを理解したリラが、あまりにも哀れなので彼を庇ってやる。

「そうみたいよ。ほら、妖精の如き時の子、って言ったじゃない。かわいらしいし、イメージぴったりだと思うけど……。」

「確かに、妖精っぽいわね……。」

ティアナが肯定の言葉を漏らしたことに、誰もが驚いた。その瞬間までは……。

「ピクシー妖精っぽいもの！」

ガクン、と六人分の肩が沈む。またしてもエリゼがティアナに突っかった。

「何よー、おばさんにはこんなにかわいい私がピクシー妖精に見えるって言うの？目、ちゃんと見えてる？」

「自称かわいいだなんて、最高に性質悪いわよ！」^{たち}

「姉さん、人のことは言えないでしょ……。姉さんだって自称美人じゃないか……。」

エルリックの呆れ顔でのツツコミに、彼女は憤慨して答えた。

「私の場合は自他ともに認めるってやつなの！」

「……。」

もう構わない方が賢明だと判断したエルリックは、そつとリラとジユリアに目配せして黙り込んだ。エリゼと出会ってからの短い時間で、彼女の闘争心に火がついてしまったようだ……。子供相手に見苦しいな、と思いつつも、皆が皆自分に火の粉が飛んで来るのを恐れて黙っていた。

「僕たちは、エリゼを探しに来たんだよ。エリゼにも、一緒に旅に来て欲しくて……。」

「……どういことですか？」

アランのその言葉で、フェリドは二人にことの概略を聞かせた。さすがのティアナとエリゼも、その間はずっと黙っていた。

「……なるほどね……。」

アランはその話を聞き終えてから、しばらく黙って考え込んでいた。彼は十五歳、エリゼは十一歳ということだったが、二人は一体どういう関係なのだろうか？リラがぼんやりとそんなことを考えていた、

その時だった。

「……わかりました。」

アランがその声を上げたので、はつきり言っただうでもいいことを考えていたリラは、ふと現実の世界に頭を引き戻した。

「エリゼは……旅に同行させます。ただ……心配なので、俺も連れて行ってもらえませんか？もちろん、皆さんの迷惑にならなければ、なんですが……。」

「ちょ、ちよつと待つて、アラン。」

リラが慌てて口を挟んだ。

「すごく危険な旅なのよ？ハーバナントの魔物に何度も襲撃されたし……。」

「わかつてますよ。」

アランは、リラに笑顔を向けながら続けた。

「だから、エリゼを皆さんに預けるだけ預けて待つている、なんてこと、できないんです。彼女を護ることは、僕が父さんから引き継いだ大切な仕事ですから。あ、もちろん皆さんを信用していないとか、そういうことじゃあないんです。ただ、俺の仕事は、自分でしたいんです……。」

フェリドはアランのその言葉と視線を受けて、しばらく悩んでいた。できることならば、自分の弟同然に思っている彼を、こんな危険な旅に参加させたくはない。だが、彼にそう言えば、エリゼも連れて行かせないと言うだろう。彼女の今の保護者は、目の前のこの少年なのだ……。

「……わかった……。君に、この旅への同行をお願いするよ。エリゼの守護者としての、ね。時の聖具がどうしても必要になるから、エリゼにhあどうしても一緒に来てもらわないとならないんだ……。君たち二人をこんな危険な旅に連れ出すのは、本当に申し訳ないと思っっている……。」

「仕方ないじゃない。お兄ちゃんの不始末は、妹の私がどうにかしないと！」

別に不始末じゃないんだけどな、と、フェリドは心の中で苦笑する。どうやらアランにはそれが通じているようで、彼からは軽い目配せが返って来た。

「ようし、じゃあよろしくね！エリゼ、アラン！」

リラの明るい言葉に、二人も笑顔で応じた。

「よろしく願います。」

ジュリアに対する時も、もちろん笑顔……。

「ほら。」

ティアナが、エリゼに向かって手を差し出した。一同が、好奇の視線でその成り行きを見つめる……。

「一緒に旅に行くんだから、仲直り位しておきましょう。」

「あ、姉さんが大人になった！」

エルリックの感動は、一瞬の出来事だった。

「まあ、私が大人になって許してあげるわ。」

「どっちが大人だ、どっちが！」

エリゼの言葉に憤慨する、ティアナ……。エルリックは小さく、前言撤回、と呟いた。

「先が思いやられるな……。」

まだ言い合いを続けている二人に、五対の目が仕方なさそうに細められた。

時の子（後書き）

連載が二十話を越えると同時にお気に入り登録件数も二十件を超えて驚いています。

皆様、本当にどうもありがとうございます。

レポートなどの兼ね合いでどうしても定期的な更新はできませんが、どうぞ今後もお付き合い下さいませ。

精一杯の甘え

「ところで、お兄ちゃんたちはどこに行くつもりなの？」

旅に加わって間もない、どころか、たった今旅に加わったばかりのエリゼの問いかけに、ティアナが鼻で笑った。

「ふん、お子ちゃまは黙ってついて来なさい。」

「こんなおばさんについて行くなんて、とっても不安で……。」

「死んでおしまい！」

二人はきやあきやあと騒ぎ立てる……。いい加減に構うことも面倒になり、他の五人は二人を無視して話始めた。

「この先なんだが、まず、海を渡らなきゃならない。次の精霊の聖具、そして、闇の子を探すために……。」

「はい、そこまではわかりました。それでは、次は？」

フェリドの言葉に、アランは真剣な目をして頷き、問いかけた。どうやら、彼はエリゼとは違って常識人のようだ……。

「次は南の大陸、最初の国はアークだな。そこで問題なんだが……。」

「

フェリドのその言葉に、くだらないケンカをしていたティアナとエリゼも休戦した。全員の注意深い視線が自分に注がれていることを確認してから、フェリドが続きを話した。

「困ったことにこの国は独立独歩の国でね、友好を結んでいる国がないんだよ……。そこへ各国の姫や王子として乗り込むのは色々とまずいと思うんだ。下手に刺激したら、僕たちが連合を組んでアークを攻めるんじゃないか、その下調べに来ているんじゃないか、とか向こうが考えるかもしれないからね。」

全員がその言葉に黙り込んだ。おそらく、彼のその考えは正しい。しかし、アークに闇の子がいるかもしれないのだ。それに、その次の国に行くとなればアークは通らざるを得ない場所にある。

「それに、まずは大地の聖具を探してからにしたいんだ。港からそ

んなに遠くない所に、アーク砂漠があるだろう？ここは、世界で一番大きい砂漠なんだ。だから、きっとこの砂漠のどこかに大地の聖具が眠っていると思うんだ。」

「ちよつと、私は嫌よ！そんな砂漠を、当てもなく彷徨い続けるなんて。埃塗れになるじゃない！それに、もし道に迷ったら七人全員で干物になるのよ？この若さで干物になんてなりたくない！どうかしなさいよ、フェリド！」

「いや、どうにもならないですよ……。」

フェリドにすかさず食ってかかったティアナに、アランが冷静なツッコミを入れた。リラは、その様子を見て密かに喜んだ。今まで、彼女は一人で三人にツッコミを入れていたのだ。ジュリアは決しておかしなことは言わないのだが、彼女の場合はいまいち説得力がなく、ツッコミもツッコミととってももらえなかったのだ。そして、エリゼという要注意人物が増えたことで、彼女は計り知れない不安を感じていたのだった。

「良かったわ、アランがツッコミ役になってくれて……。」

リラがしみじみと言った言葉に反応したのは、名指しされたアランだった。

「どうしてですか？」

「今まで、私一人で色魔と天然さんと女王様にツッコミを入れてたのよ。この上エリゼまで増えたらどうしようかと思っていたけれど、ツッコミも増えたからなんとか頑張れそうだわ……。」

「色魔、天然、女王様……。心中、お察します。」

リラのこれまでの苦労を察したアランは、それしか言えなかった。フェリドが口を開いたので、二人は無駄話を中止して彼の方に注意を向け直した。

「いや、聖具の導きもあるだろうし、大地の精霊の声を聞きながら行けば迷うことはないよ。問題は、どうやってアークの城に潜入するかなんだが……。」

「お兄ちゃん、何かいい考えがあるんでしょう？そうだよ、ない

なんて言わせないもの。」

エリゼのその言葉に苦笑して、彼は続けた。

「あるにはあるんだが……。名案とは言えないかもな。」

「何よ、もったいぶらないでさっさと話さないよ!」

「そうよ、お兄ちゃん。」

話の続きを急かす声が、今までの二倍……。どうやらこの二人、実は気が合うようだ。

「皆何か一つ位楽器はできる?」

それぞれが口々に答える。ジュリアとティアナが横笛、エルリックが太鼓、フェリドがリュート。

「すみません、俺はちよつと……。多分、エリゼも……。」

アランが遠慮がちにそう切り出したのを、フェリドが止めた。

「いや、君たちには荷物の番をしてもらおうと思っていたから、楽器の方はいいよ。そっちの仕事、頼めるかな?」

「わかりました。」

アランは安心したかのようにそう答えた。その横で、リラがこちらも遠慮がちに口を開く。

「フェリド、私は豎琴位しか……。」

「いやいや、君こそ楽器はしなくていいよ、リラ。」

「何が言いたいのだよ!これでも豎琴の方はそれなりに得意なのよ!」赤くなつて憤慨するその様子に、フェリドは危険な物を孕んだ笑みを返した。彼がこんな笑顔を見せるのは、何かろくでもないことを考えている時……。

「ほら、城に流れの民が稼ぎに来ることって、あるだろう?それを装つて城に潜入しようと思うんだ。君まで楽器を扱うことになったら、踊り子が一人もいなくなるだろう?踊り子のいない旅一座なんて、おかしいじゃないか。」

「わ、私に踊り子になれって言うの?」

リラのその言葉に、フェリドは唇を噛み締めて重く頷いた。

「適材適所だよ、リラ。そして、アーク王の目に留まって欲しい。」

王が気に入った踊り子を寝所に招く、というのもよくある話だろう？君はそこで王に催眠術をかけて、闇の子の存在について確認して欲しいんだ……。」

「フェリドさん、あんまりです！お姉様に、そんなっ……！」
あまりにもリラに重い負担を強いる作戦に、珍しくジュリアが強い語調で抗議の声を上げた。

「もちろん、アーク王にはリラに指一本、髪の毛一筋も触らせない。ただ、普通に訊ねたところで真実が返ってくると思えないからな、仕方ないことなんだ……。」

彼は、その言葉を痛む自分の心、その奥深くにも言い聞かせていた。仕方のないことなんだ。そうは思っても、心のどこかで納得できない。

「……いいわ、わかった。」

リラが、フェリドが難しい顔で考え事をしている様子を眺めながらそう言った。その声で顔を上げたフェリドの青紫の瞳が、エメラルドの瞳と結ばれる。彼女は頬を赤く染めながら、続きをこぼした。

「ただし……何があっても、絶対に私を護ってよ。アーク王の愛妾になんて、死んでもなりたくないもの。」

彼女の精一杯の甘えの言葉に、フェリドは柔らかい笑みをこぼした。
「……了解、姫君。」

フェリドのその言葉に、リラは赤い頬をほんの少し膨らませて、そっぽ向いた。

精一杯の甘え（後書き）

異国恋歌〜風空の姫〜第二十二話、いかがでしたか？

レポートの締め切りに追われる毎日を過ごしています。更新が非常に遅くなっていますが、どうぞお許し下さい。

ここまでお読み下さっている皆様、更新をお待ち下さっている皆様、本当にありがとうございます。

オアシス

一行は、ルクタシアの南端の港から乗船してアークに入国した。同盟が結ばれていないとはいっても、正式な手形さえ持っていれば国内に入れてもらうことができる。

「さてと、楽器を揃えなきゃね。それから、できれば王城を目指す旅の一座に混ぜてもらおうか。この人数じゃ怪しまれかねないからね。幸い建国記念の日が近いから、どうにかこうにか見つけられるだろ。」

フェリドはそう言っ、ニヤニヤと笑った。

「そうね、そうすれば私も踊り子の役なんてしなくて済むしね。」
対するリラの機嫌は最悪と言っても良かった。彼女は、潜入のために必要だと言われて渋々踊り子の役を買って出たのだ。それに対してフェリドがニヤニヤ笑いを続けているのだから、機嫌が悪くなくても仕方ない……。

「ほ、ほら。その前に大地の聖具ですよ、リラさん。」

そんな険悪な雰囲気の中、アランは少しでも廻りの空気を和ませようと苦労していた。険悪なのは、エリゼとティアナだけで十分だ。そんなことを思いながら……。

「いや、僕は先に王城潜入でも構わな……ぐっ！」

リラの足が美しい弧を描いてフェリドの腹部に吸い込まれた。あまりの強さに、フェリドは呼吸を詰まらせた。

「いい加減にしてよ！そんなにあんな派手派手でなければいい衣装を着せたい訳っ？」

「い、いいじゃないか。目の保養に……。」

腕組みをしながら思い切り不機嫌そうな顔で、リラは彼に言い渡した。

「自分で着なさい、じ・ぶ・ん・で！」

「男が着たって楽しくないだろ。……いや、僕なら何でも似合うか

もしないな。」

「一回死んだら？ 脳天気なナルシストさん！」

もう構うのも嫌、というようにリラはそっぽ向いて彼から離れた。何というか、最近は妙に疲れる。皆お互いに慣れて来て遠慮がなくなつて来たせいか、個性、というものが発揮され過ぎている気がする……。色魔のナルシストに女王様が二人、天然カップルが一組……。当然彼女が話しかける相手は、唯一まともな神経を持っていると考えられるアランになっていた。

「……ごめんなさい。とりあえず、あんなのには構わないで砂漠を目指しましょうか。」

「いえ、気にしないで下さい。悪いのはフェリドさんなので。それじゃあ、行きましょうか。」

まとも組二人は、他のメンバーに構わず必要物資の調達ができそうな店を探し始めた。

「広いー、暑いー、だるいー。」

「私もー。アラン、お水！」

珍しくティアナとエリゼの意見が合つて、二つの手が同時に、水筒を管理しているアランの方に伸びる。

「ダメですよ、さっき飲んだばかりじゃないじゃないですか。」

「ケチー！」

「何よー。アランのくせに私に逆らうのー？」

まるで酔っ払いがお店のお兄さんに絡んでいるみたいだな、とリラは密かに思っていた。その時、フェリドの体がピクリと跳ね上がった。

「フェリド……？」

精霊の呼び声が聞こえたのだろうかと思つて、彼女はほんの少し不安げに眉を寄せて彼を見つめた。ジュリアとエルリックの天然カップル組も、同じような表情をしている。彼の青紫の瞳は、遙かな彼方に向けられていた。

「今……確かに聞こえたんだ……。僕を呼ぶ、懐かしい声……。」「どちらからですか？」

ジュリアが一応確認をとったが、そんな問いは必要もないほどに、彼は一点を見つめていた。

「あっちだ……。」「

「あつちは……。オアシスがある方向ですね。行ってみましょうか。」地図を広げて確認をしてくれたアランに、残りの六人全員が大きく頷いた。

「近い、どんどん近くなる！」

フェリドの足は、自然と速まっていた。残りの六人が、彼の速度について行くのに一生懸命にならなければいけないほどに。先程から、一行の目にはオアシスの涼しげな緑色が見えていた。

「……どうやら、あのオアシスで間違いないみたいね。」

隣でそう呟くティアナに、リラは黙って頷き返した。

『フェリドも、記憶を取り戻したら……。そうしたら、いくらか謎を解くこともできるのかしら？リラを護れと言われた、理由がわかるのかしら……。』

ティアナの険しい表情に、横のリラが視線だけでその理由を問って来た。

「なんでもないわ。」

彼女がそう返すと、リラは大人しく引き下がった。彼女と彼の今の関係も、変わるのだろうか。彼が、自分にとって彼女がどんなに大切な存在かに気付くことによって……。

「私が心配しても、仕方のないことだし……。」

その小さな呟きは、隣を歩いているリラにも聞こえなかった。いつの間にか、オアシスはもう目前まで迫っていた。フェリドの足が早歩きの手調から、ついには走る調子のものへと変わった。なぜだろうか、妙に気が急く……。聖具と同時に、何か大切な物が自分を待っている気がして……。彼の姿は、オアシスの木々の緑に溶け込んで

でしまった。

「わっ、お兄ちゃんが消えたっ？」

「そんな訳ないでしょ。精霊に導かれてどこか聖具のある所、おそらく異世界に引き込まれたのよ。」

エリゼの素っ頓狂な声に、珍しく余計なひと言をつけずにティアナが答えてやった。エルリックが、荷物を足下に下ろす。

「じゃあ、今日はここでキャンプにしようか。アラン、準備を手伝ってくれる？」

「はい、エルリックさん。」

男性陣はキャンプの準備を始めた。リラが、彼の背中が消えた場所をじっと見つめている……。

「お姉様……？」

ジュリアに声をかけられて、リラは慌てて振り返った。そして、作り笑いを浮かべる。それがジュリアには作り笑いだとわかったのは、姉妹として子供の頃から彼女のそばにいたからなのかもしれない。

「あ、なんでもないの。夕食の準備、手伝っわ。教えて、ジュリア。」

「はい……。」

短くそれだけ返事をして、ジュリアはその後は普段通りに振る舞った。リラの様子に、よくよく気を配りながらも……。

オアシス（後書き）

久々の更新となつてしまいました。申し訳ありません。
のろい更新をお待ち下さっている皆様、本当にありがとうございます。
す。

変わらないもの

「ここは……。」

彼が目覚めたのは、ちらちらと温かい光が降り注ぐ、木陰のことだった。腰には、見たこともない剣を佩いていた。だが、その波動からその剣が何なのかを一瞬で理解する。

「これは……大地の剣？それにしても……。」

胸が詰まるような懐かしい風景に、彼は息を長く吐き出し、吸い込んだ。鼓動が早まる。彼の足は、独りでに動き始める……。

「歌声……？人のものとは思えない……。」

彼の耳が、澄んだ歌声を拾い上げた。脳の真髄までをくすぐるかのような、柔らかくて、切なくて、美しい音色……。狂走した心臓は、もはや自分のものと思うことも難しかった。なぜだろうか、彼が一生懸命に落ちつけようとしているのに、その心臓は早鐘を打つ一方だ……。

ふと目の前が開け、彼の青紫の瞳に、さんさん燦々と降り注ぐ陽光を乱反射する水面が映し出された。そして、その光景のあまりの美しさに、彼は息を飲んだ。その後、呼吸をすることも忘れてしまうほどにその光景に見入る。心臓は、すでに自分の体を離れてしまったように感じられていた。ふわふわと覚束ない感覚だけが、辛うじて手足に残されている。

「っ……。」

正確には、彼が見入ってしまったのは美しい光景ではない。その泉の畔、ほら緑の若草の上に真っ白い足を投げ出しているエメラルドの瞳の少女こそが、彼が真に見入ってしまったものだった。見覚えのある少女だった。だが、こんなにも美しい少女だったとは、気付きもしなかった……。豊かになびく闇の深淵から持ち帰ったかのような漆黒の髪、雪よりも白い細い肢体、ガラスと宝石で作ったオルゴールの音色ではないかと考えられるほど透き通った、繊細な歌声。そ

してそれがこぼれ落ちる、鮮烈な紅い唇……。彼は、見事なまでにその視線を奪われてしまっていた。

「誰っ…………？」

少女の方も他者の存在に気付いて、体を少し強張らせてこちらを向いた。彼女の歌声は、まだ彼の耳の奥で心地良い。彼の脳が、澄んだ声に縛られていることを望んで、いつまでもその声を頭の中で奏で続けているのだ。彼女の警戒心を解こうと、彼は今までいた木陰から歩み出た。

「フェルディナンド……。何の悪戯？驚かせないでよ。」

自分を見上げて来る眩しい瞳に軽い眩暈めまいを感じながら、彼は彼女の隣に腰を下ろした。

「ごめん、驚かせるつもりはなかったんだ……。久しぶりだね。」

「そうね、しばらく人界の方に行っていたんでしょう？どうだった？」

彼女は興味津々といった様子で、彼の方に身を乗り出した。その様子に思わず笑みをこぼしながら、彼女の問いに答えてやる。

「なかなか綺麗な所だったよ。……まあ、ここには及ばないけれど

……。」

彼の答えは、正確には少し違っていた。ここが美しく見えるのは、彼女がいるせいだと彼にはよくわかっていた。

「当たり前じゃない。天界一美しいと言われる神々の泉が人界の景色の負けたら、何だか悲しくなるもの。」

「それはそうだけど……。」

僅かに頬を膨らませた彼女の髪に、深緑の葉がはらりと舞い落ちた。それを払ってやった彼の指に、漆黒の絹糸が触れる……。一瞬抑えがたいし衝動を感じた彼だったが、慌ててその手を引っ込めることで何とかその衝動を抑え込んだ。

相対する一族。彼の種族である大地と、彼女の種族である風とは、決して結ばれることの許されない一族だった。生まれて来る子供の力が、親同士との力の相殺によって消えてしまう可能性があるためだ。

また、その逆もあり得る。相対する力同士の反発で、創造神をも凌駕する力を持つ子供が生まれてしまうことも考えられるのだ。それを恐れた神々の間では、大地と風、炎と水、光と闇の種族間での婚姻を禁忌としていた。

「どうしたの？」

彼の不審な様子に、彼女は訝しげな視線を向けて来た。内心で少々焦りを感じながらも、平静を装って彼女に笑いかける。

「何でもないよ。それよりさっきの歌、とても良かったよ。天界一の歌い手、風空^{かぜ}の姫の歌声をあんなにそばで聴けたなんて、ものすごく得した気分だ。」

白い頬がほんのりと桜色に染め変えられた。そのままふい、と彼から視線を逸らして、彼女は紅い唇をほんの少し突き出した。

「本当にどうしたの？フェルディナンドにそんなに褒められたら、何だか気持ち悪い……。」

「……その呼び方、やめてくれよ……。昔のように、フェリドでいい……。」

六人で遊んでいた彼らだったが、一人、また一人と婚期を迎える度に、だんだんと離れ離れになってしまっていた。そして、それと同時に少しずつ、お互いの心の距離も離れてしまっていた。いや、無理に距離を置こうとしていた、という表現の方が正しかったのだろう。それを望んだ者は、一人としていなかったのだから……。

「……もう、昔とは違うから……。」

そう言って笑った彼女は、どこか諦め顔で、寂しげだった。元々、六人の中で一番寂しがりで、一番弱い彼女のことだ。六人が離れ離れになって一番辛いと感じているのは、おそらく彼女だろう……。

「強がりなのは昔から変わっていないんだな……。」

「なっ、何が言いたいのよっ？強がりでも何でも、フェリドには関係ない！」

憤慨して立ち上がり、そのまま歩き去ろうとした彼女の手を、彼の手が捕らえた。

「放して！放っておいてよ！私の勝手でしょ！」

「僕も、昔からどこも変わっていない。」

「何が言いたいなのよ？何も成長していなくて、悪かったわね！お互い様でしょう？」

なかなか自分を解放してくれない彼に、彼女はいい加減腹が立っていた。それと同時に、少しでも長くともにいるのが辛かった。彼女がいくら望んでも、彼がその言葉を言ってくれる訳もない。彼女が抱いているのは、掟に縛られた、許されざる感情なのだから……。

「放してよ！フェリドと一緒にいたくないの。一緒にいたくない……。」

「嘘つき……。」

「何を根拠にそんなこと！」

振り返った彼女の視線を、真剣な青紫の瞳が絡め取った。その色に、思わず体が硬直してしまう。

「だって君、泣いてるだろう……？」

白い頬を流れる透明な筋の上を、太陽の光が滑り落ちる……。気付かれていたことに気恥ずかしさと苛立ちを感じながら、彼女は慌てて、彼につかまっている手と反対側の手でそれを拭いた。

「どうして泣くんだよ……？」

振り返った彼女の白い顔は、再びあらぬ方へ向けられてしまった。

「あなたと一緒にいるのが、辛いの。どんなに望んだって得られない、そんな言葉が欲しくなってしまっから……。」

彼女の言わんとしていることは、彼にもすぐにわかる。禁忌？そんなもの……。彼の頭の中で、そんな言葉が反響する。そして。

「罪を犯す、勇氣は……？」

もう一つ反響する別の言葉は、彼の口からこぼれて彼女に対する問いかけに変わっていた。彼女の肩が、ビクリと大きく跳ねる。それからゆつくりと呼吸をする様子が、彼の目に映し出されていた。振り返らない彼女がどんな表情をしているかは、その目に映らない……。

「……一人なら、ない……。」

それは、二人なら、という意味……。掴んだままだった腕を引くと、細い体が彼の膝の上に落とされた。

「君の父上や母上と、別れることになるよ……？それどころか、僕らの存在すら抹消されてしまつかもしれない……。創造神は、全てを見ていらつしやる……。」

陽光を瞳に湛えたまま、彼女は静かに頷いた。その決意の固さを確かめてから、彼は彼女の瞳を閉じさせた。紅い唇は、その色に反してあまりにも冷たかった。

「っ……！」

次に彼が目覚めたのは、どこかもわからない草原の真ん中だった。見渡す限りの、緑の大地……。

「辛い記憶だったか？それとも……。」

背後からの声に、彼はゆるりと振り返った。今の彼には、それが誰の声なのかすぐにわかる……。

「父上……。」

青紫の瞳。その先には、彼が思った通りの人物がいた。大地の精霊、いや、大地の神々の長。彼の、神代での父親。

「他の者とお前の違う所は、お前は彼女と出会った時から、少しずつ記憶を取り戻していた、という所だな……。急激な覚醒をさせなくて済んだ分、私も楽だった。」

少しずつ自分の中にこぼれて来ていた言葉の数々が、一つになった。全ては、彼女という存在に繋がる物だったのだ……。

「父上、ありがとうございます。おかげで僕は、大切な記憶を取り戻すことができました。今度こそ、必ず彼女を守り抜いて見せます。あいつからも……。」

彼が同時に思い出したのは、宿敵のことだった。そして、宿敵の現世での正体も同時に知った。過去の九度の転生で、彼と彼女の間を引き裂いた者。魔界の王が、ハーバナント王の正体……。だが……。

「あいつはどうして、あんなにも執拗に彼女を狙うんだ……？」

魔王すらも魅了してしまう程の美貌。それを単純に理由にしまつて、いいのだろうか？彼の本能が、それだけではない、いや、むしろもう少し違つところに彼の思惑がある、ということ告げている。フェリドのその言葉に、大地の精の表情が曇つた。

「私たちの責任だ……。それをお前たちに負わせてしまつたことは、すまないと思つている……。」

「どういふことですか？父上……。」

彼の問いかけも虚しく、その体は強制的に大地の精の領域から人間界へと送り還されてしまつていた。

背後の気配に、彼女の体がピクリと反応した。毛布にくるまつたま星を眺めていたその背から、温かい腕が回される……。

「な、何？」

すでに眠つてゐる皆を起こさないように、小さな声でそう問いかける。月の青白い光の中に紅潮した頬が浮かび上がっていることは、彼女の預かり知らぬことだつた。

「何でもない……。ただ少し、このまま……。」

自分の問いかけに返された大地の声に、彼女は前を向いてから黙つて頷いた。四千年の時間が流れても、彼女は変わっていない。照れると、必ず顔を逸らして目を合わせてくれなくなる……。抱き締めた体の細さまでが、そのままだつた……。

変わらないもの（後書き）

ようやくこの話を書くことができました。自分でも書きたかった場面です。

相変わらずの不定期更新で申し訳ありません。お気に入り小説に登録して下さっている皆様、ここまでお読み下さっている皆様、本当にありがとうございます。

変化

無事大地の剣を手に入れた一行は、この国に入国した際に通った、港町を目指していた。大きな街だったので、必要としている物が見つかるだろうと考えたためだ。ここに来て、フェリドがある変化を見せていた。

「ダメだ、リラ。君に踊り子の役をやらせるなんて、僕はどうかしていたんだ。頼むからやめてくれ。」

「今更何言ってるのよ！フェリドのくせに！」

リラにそう言い続けるフェリドに、女王様その一がついに怒りを爆発させた。

「私も望んだ訳じゃないけれど、それが一番良い方法だっけってずっと言ってたの、フェリドじゃない。急にどうしたのよ？」

ティアナ、ジュリア、エルリックは理由を理解していたが、覚醒前のリラには、わかるはずもない。しかし。

「覚醒前と後で、こうも違うものかねー。」

ティアナが隣にいるジュリアにしか聞こえない声でそう呟いた。それを聞いたジュリアが、仕方なさそうに眉を寄せて笑う。

「本当ですよ。街で女性に声をかけることもやめたようですし、別人のようですね。」

彼女のその一言で、ティアナもはっとした。そう言えば、やけに最近の旅がスムーズになったのは、そのせいか。納得して一人で何度も頷く。フェリドが道行く女性に話しかけていた分のロスタイムが、大幅に減ったのだ。

「今まで、いかにあいつが足を引っ張っていたかが、露見したわね……。」

呆れ顔で二人で頷き合う。それを他所に、フェリドはまだリラを説得しようと試みていた。

「ダメだ、リラ。絶対にダメだ。君のそんな姿を他人の目に曝すな

んて……。」

ズルズル。夏風邪でも引いたのだろうか、鼻水が……。その色は、赤。エメラルドの瞳が、怒りを宿して苛烈に輝いた。バキィ！強烈な蹴りが、フェリドの横っ腹を襲う。

「ティアナ、手伝って！この変態を砂漠に埋めるから！」

「了解！」

「何考えてるのよ、変態！なんだかんだと言いながら、一番いやらしいこと考えてるの、あなたじゃない！」

「誤解だよ、誤解！リラっ！」

こんな調子の二人だったが、その関係にも変化が見え始めた。フェリドの方は言うまでもない。忘れていた感情、想いを取り戻したのだから。いや、正確には忘れていた、とも言えない。過去の記憶を取り戻す前でも、彼は彼女のことを想っていたのだから。四千年分の、彼女への想い。それは、彼の決意にも繋がっていた。何があっても、今度こそ、彼女を守り抜いて見せるという。過去十度の転生で彼らの間を裂き続けた、闇の王から。

リラの方も、自分に対して以前よりも温かい表情を向けて来るフェリドを若干訝しみこそすれ、嫌がっているようには見えなかった。そして、彼に甘えたりもするようになった。そうとはわかりにくいので、気付いているのは周りの人間たちだけだ。例えば。

『ちよつと疲れたな。』

彼女がそんなことを一瞬でも考えれば、彼の手がその荷物を奪う。今までの彼女なら、意地を張ってその荷物を彼の手から取り返していた。しかし。

「僕が持つよ、リラ。」

自分に向けられる柔らかい笑顔に、リラは頬をほんの少し染めてそっぽ向いた。

その後、結局ジプシー作戦を実行することになった（フェリドは最後まで反対し続けたが、ティアナに押し切られた）一行は、荷物を

買い揃えてジプシー団を探していた。大きな港町なので意外と見つかりやすいかとも思ったが、そうはいかないらしい。結局夕方までかかってしまったが、エルリックが有力な情報を得て来た。

「商人のおじさんが、この先の宿屋の街の外れでジプシーを見たらしいよ。まだいるかはわからないらしいけど……。」

「まあ、さすがエルリックですね。これでやっと旅が進められますね。」

「そんな、ジユリア。」

ジユリアに褒められて、エルリックは顔を真っ赤にして照れくさそうに笑った。一行は、バカップルは無視、というルールを打ち立てていたので、二人を会話のメンバーから除外して作戦を練り始めた。「どうしますか、フェリドさん。やっぱり、その一団を探しに行きますよね？」

アランがそう訊ねると、フェリドも強く頷いた。先程まで嫌だ嫌だとながままを言っていた人間だとは思えない程、真面目な顔で。

「ああ。仕方ないから、リラを売りにしよう。いいかい？ 僕たちは前の一座での扱いがあまりにひどかったために七人で抜け出したんだ。そして、新しい雇い主を探している。一座の看板だった踊り子を連れている、と言えば大丈夫だと思うから。」

ティアナがそれに頷いて、別の話を切り出す。

「城に潜入してからはどうするの？ この前言った、踊り子は催眠術師でした作戦を使うにしても、王の居室の場所がわからないとリラを連れて脱走できないわよ？」

相変わらずの微妙なネーミングセンス。リラは、密かにぷつと吹き出してしまった。フェリドの唇も妙な形に歪んでいることから、彼もそこにツツコミを入れたいに違いない。

「王の居室の場所なら、もう調べたよ。ルクタシア本国から見取り図を送ってもらったんだ。」

「え？ どうしてそんな物がルクタシアにあるのよ？」

ティアナの問いに、フェリドの表情が硬くなり、曇った。

「ルクタシアは貧困に喘いでいるからね、いざとなったらアーク相手に戦争を起こすつもりだったんだ……。」

リラの表情も同じように暗くなる。その矛先は、彼女の故国に向けられたのだ。その戦争に負けたことは今でも悔しいが、そのおかげで彼に出会うことができたのだから、悪いことばかりではない。最近の彼女は、そんな考えも持つようになっていた。

「問題は、アーク王がまんまと引っ掛かってくれるかどうかね。」
リラのその言葉に、フェリドはやけに自信満々に答えた。

「大丈夫だよ、リラ。この作戦は抜かりない。アーク王は、絶対に君を召し上げるよ。」

「どうしてアーク王本人でもないのにそんなことわかるのよ？」
彼女のじと目での問いに答えたのは、フェリドではなくティアナだった。

「もう、リラったら鈍いわね。フェリドはリラがこの世で一番きれ…… フガッ？ ムグ、ゴゴゴ！」

「ハハハハハ、とにかく大丈夫だから！」
「あ、そう……。」

慌ててティアナの口をふさぎながら、フェリドはそう笑って誤魔化した。彼女が腑に落ちないながらも引き下がったのを確認してから、ティアナを解放してやる。

「覚えておきなさいよ、フェリド。いつか絶対に今の仕打ちを後悔させてやるんだから！」

恐ろしい形相で彼に呪いの言葉をぶつけて、ティアナも引き下がった。方向性が決まったことで、一行の会議は終了。その頃、ちょうどバカッブル会話も終了していた。軽く会議の概要を説明して、二人に次の目的を伝える。そして一行は、街を出た。

その後フェリドは、ティアナの報復が恐ろしくて、数日間不眠症に陥ったとか陥らなかったとか……。

変化（後書き）

異国恋歌〜風空の姫〜第二十五話でした。

思っていたよりも話数が多くなりそうです。細かく区切り過ぎかも知れません。

ここまでお読み下さっている皆様、ありがとうございます。

旅の一座

「あれ、ですかね。」

アランが前方を指差してそう呟いた。一行の七対の目は、皆同じ方向に向けられている。

「ああ、間違いないようだね。まだいてくれてよかった。」

フェリドが手をかざして、確認を取った。その髪が、風に吹かれる。「いいかい、リラ。くれぐれも無理はしちゃダメだ。あんまり無理なことを言われたら、断わってもいいんだからね。」

「わかってるわよ、フェリド。もう何回も、耳にたこができる位聞かされたわ。」

そう言つてフードを取った彼女の髪は、優美な銀色をしていた。彼らの正体が、露見しないようにという配慮のためである。他にも、ティアナが茶色、エルリックとジュリアが黒（どうせ染めるならジュリアとお揃いがいい、とエルリックがわがままを言った）、エリゼの鮮やか過ぎる赤毛は目立ち過ぎるということで、暗い灰色に染められていた。フェリドとアランは、そのままになっている。アランは元々目立ちにくい茶髪で、一般人であることが理由となっているが、フェリドは髪を染めることをティアナに猛反対されたのだ。「僕もティアナにダメだしされなきゃ、リラと同じ色に染めたのになあ。」

「銀ならまだいいけど、あなた、その色以外はかつこ悪過ぎて話にならないわよ。」

あまりにも直球すぎるその言葉に、フェリドは何も言い返せなかった。

「お兄ちゃんをいじめないでよ、おばさん！」

兄を庇うつもりのけなげな妹は、地雷を踏んでしまった。

「もう一度言ってみなさいよ！どこの優しいお姉さんを捕まえてそんなこと言ってるのよ？」

「優しいお姉さん？リラとジュリアのことかしら？他にそんな人いないわよねー！」

「おのれガキンチョー！」

相変わらずの喧嘩に、五人がそれぞれ溜息をついた。

「すみません。」

フェリドの呼びかけに、中年の男性が気付いた。無精髭を生やした、いかつい感じの男だ。

「何か用か？明日の出発の準備で忙しいんだ。祭りに来てくれっていうなら、その後になるぜ。」

「いえ、違うんです。僕たちと一緒に連れて行ってくれませんか？」「は？」

あまりにも直球過ぎる言葉に、男性の方も言葉を失う。それを確認したフェリドが畳みかける。

「実は僕たち別の一座に加わっていたんですが、食事も休息もともに与えてもらえない、おまけに雑用ばかりというひどい扱いを受けていまして、先日、我慢しきれなくなった者たちで抜け出したんです。」

そこで言葉を区切つてやると、男は一同を見渡した。エリゼが絶妙のタイミングで目を潤ませる。実際の年齢よりも幼く見える彼女のその表情は、相当な説得力を持っているように思えた。

「僕たちだけでも何とかしようと思っていたのですが、この人数じやあ仕事も来ませんでした。このままでは路頭に迷うことになる、そう思っていた矢先にこちらに度の一座がいらつしやると聞いて、あわよくば、と思って駆けつけたのです。それに。」

フェリドが、深く被ったフードを脱ぐようにリラに合図をした。白い手がフードにかかり、必要以上に時間をかけて滑り落ちて行く。銀の髪とともに現われたのは、透き通ったエメラルドの瞳と、紅の唇……。今まで黙って話を聞いていた男が、ハッと息を飲んだ。

「彼女を埋もれさせるのは、実に惜しい……。」

フェリドの押しの一言。しばらく二人を交互に眺めていた男は、やがて何事かフェリドに呟いて行ってしまった。

「今、なんて言ったの？」

リラが、男の後ろ姿を見送っているフェリドに問いかけた。

「座長に話をつけて来るから待っている、だってさ。ほら、あれがそうじゃないかな？」

フェリドの指差す先に、先程の男と、初老の老人の姿があった。彼らは真っ直ぐにこちらに向かつて歩いて来て、老人はリラを品定めするかのように、不躰に眺めた。

「ほほう、こいつはなかなか……一国の王の寵愛を受けていてもおかしくないな……。」

それから一つ咳払いをして、フェリドの方に向き直った。

「この中での責任者はお前か？」

「はい、僕です。」

言葉の端にどことなくとげとげしいものが感じられるのは、先程のリラを見つめる視線のせいだろう。しかし男二人はそんなことには全く気付かず、二人で何やら話しこんでいた。そして。

「よろしい、君たちをうちの一座に入れてあげよう。食事や休憩のことは保証するが、多少の雑用はこなしてもらうこととなる。何しろ新入りだからな、そうでないと皆が納得しないだろうからね。いいな？」

「はい、ありがとうございます。」

フェリドの感謝の意が全く籠っていないお礼の言葉に満足したようで、老人の方はいなくなってしまった。無精髭の男の方が、一応これからの方針を聞かせてくれる。

「俺たちはこれから、この国の城で開かれる式典に行くことになっている。わかったな。とりあえずあたりを見て回って、適当に皆に挨拶をしておけ。」

「はい。」

男の後ろ姿を見送ってから、フェリドが六人を振り返った。

「次はアークの城だそうだ。願ってもないな……。」「
順々に皆が頷くのを眺めてから、彼も皆に頷き返した。真夏の風が、
七人の頭上を吹き抜ける。」

旅の一座（後書き）

久々の更新になってしまいました。申し訳ありません。

そろそろ謎解きの方に入って行きたいのに、書きたい場面が多くてもう少し後になってしまいそうです。

気長にお付き合いいただければ幸いです。

どうもありがとうございます。

舞姫の逃走

「とりあえず、何とか引つかかってくれそうね……。」

リラはそんなことを考えながら、音楽に合わせて軽快なステップを踏んでいた。踊り子として旅芸人一座に加わることに成功した彼女は、今、輪舞の輪から召し上げられて、王宮の広間で舞っていた。その様子は、染めた髪の色で銀色の蝶のようだ。彼女の舞う様に合わせて揺れる銀の髪は、蝶の翅と鱗粉、その二つを同時に表現していた。そしてアーク王は、まんまと彼女と言う花に魅了されている。計画が思い通りに運んでいるのに、少しも面白くないのはなぜだろう。フェリドは、広間の中央を舞う銀の蝶を眺めながらふとそう思った。

「あら？その顔は……。目の保養になると思っ派手な衣装を着せただけ、他の男の視線が気になるなー、銀髪が光を受けてキラキラと綺麗だけど、やっぱり僕は黒髪の方がかわいらしくて好みだなー、って顔ね！」

一体どんな顔だよ、と思いながらも、自分の考えていたことが全て当てられてしまったことに動揺して、フェリドは青くなった。

「誰かと思えば、君か……。」

「ホホホ、文句でも言いたげな顔ね。でも、私に逆らおうなんて百万年早いわよ！」

「……いえ、そんなつもりは……。」

フェリドが呆れてたじたじになっているにも関わらず、ティアナは急に真面目な顔になった。

「あの子だって、本当はこんなことしたくなかったのよ。だけど、あなたが最善の策だって言っただし、一番危険が少ないなら、ってこの方法を選んだの。つまり、あなたが言いだしたことだからこの作戦も引き受けたって訳。……どういう意味かわかるでしょ？」

「……。」

その言葉には答えず、フェリドは黙って舞姫を見つめた。

「大事にしてあげなさいよ。人一倍優しくって、傷つきやすい子なんだから。まあ、私よりもあなたの方がよく知ってるでしょうけど。」

ティアナはそれだけ言って離れて行ってしまった。緑の瞳の乙女を見つめる、青紫の瞳。そこに宿る光の色が微妙に変化したことには、おそらく誰も気付いていない。

リラは今、王の寝室に向かって女官の一人に連れられて歩いていた。王の寝室は、西側の二階。フェリドたちとの打ち合わせで行くと、彼女はそこから飛び降りて脱出することになっていた。

『ここまでは作戦通り、順調だわ。問題は、この先……。』

彼女の任務は、アーク王に催眠術をかけ、真実を問うこと。

『ちゃんとできるかしら……。うつん、やらないと！』

リラは恐れと不安を掻き消すように頭を小さく、何度も振った。

「こちらが国王陛下の寝室です。くれぐれも、粗相のないように。」

そう言って女官は暗い廊下を戻って行った。その足音が遠ざかるのを確認してから、王の寝室、その豪華な扉に手をかける。

カチャリ。リラは、必要以上に静かに戸を開けた。

「来たか、銀の蝶。さあ、こちらへ。」

そう言って王は寝台に腰掛けると、彼女を誘うように両腕を広げた。

リラは、その腕の中に静かに身を寄せた。緊張が、彼女の全身を駆ける。それは震えとなって、アーク王にも悟られてしまった。

「どうした？震えているのか？さて、まずは先程の舞の褒美を与えなければならぬ……。さあ、何が望みだ？明日の朝までに用意させよう。」

リラはそこでアーク王を見上げた。震えるエメラルドの瞳は、覗きこむ者に快美な戦慄を与える。

「では陛下、一つ質問をさせて下さいませ。」

「何なりと。」

王がリラの鈴を鳴らすような甘く柔らかい声に聞き惚れたその瞬間、催眠術をかける隙が生まれた。もちろん、リラはそれを見逃さなかった。陽炎のように揺らめいていた影は身を顰め、エメラルドの瞳が鮮烈な光を放つ。その瞬間、アーク王の瞳から光が消え去り、彼は完全に無防備な状態となった。

「この国に、精霊の子はいませんか？隠さずにお教え下さい。」

「い、いない……。精霊の子は、一人も……。」

中年の王は、操られるままにそう答えた。完全にリラの催眠術に精神を絡め取られているのだから、嘘をつけるはずもない。どうやら本当にこの国に精霊の子はいないらしい。その事実に落胆して深く溜息をついてから、リラは気を取り直した。そうとわかれば長居は無用、一刻も早くここから脱出しなければ。

「そうですか、ありがとうございます。朝までぐっすりお眠り下さい。朝には、私のことなどさっぱり忘れていらっしますからお休みなさいませ。」

彼女のその言葉を合図に、王は寝台に転がり、寝息を立て始めた。

リラはその様子を確認してから立ち上がり、静かに窓を開け放つて下を確認した。

「お姉様、こちらですわ。」

ジュリアの声がした方を向くと、ちょうど皆が駆けつけて来たところだった。

「リラ、飛び降りろ！受け止めるから！」

彼がそう言うのなら、リラが迷うはずもない。彼女は力強く頷いて見せると、石の窓枠に足をかけてひらりと飛び降りた。銀色の蝶が、夜も更けた砂漠の空を舞う。フワリ、と優しく力強い腕が彼女を抱きとめた。そのまま地面に下ろされるだろうと考えていた彼女の体が、ふと強く拘束される。

「ちょ、ちよつとフェリドっ？」

「後にしなさい、フェリド！逃げるのが先よ！」

皆で走りだしたのだが、リラはそれに出遅れてしまった。

「ま、待つて！裾が、絡まってっ！」

「ちよつと、何よそのずるずるのくせにいやらしい服ー！でも、さすがはリラね。ちゃんと着こなせてるわ。」

「そういう問題じゃない！」

ティアナの言葉通り、女官に着替えようだと言われて渡された衣装は、裾の方はやたらと長くてひらひらとしているドレスでありながら、肩はむき出しになると言うデザインのものだった。当然、全速力で走れるような代物ではない。ティアナの他人事としか思えないような言葉に、リラは情けない声を上げた。そんな彼女の体が、ふわりと浮きあがる。

「仕方ないな、じっとしてろよ！」

フェリドはリラを軽々と抱き上げ、先程と同じ速度で走る。

「ちよ、ちよつとフェリド？」

彼のその行動に、リラの心臓の鼓動が、不自然に高鳴る。耳元でうるさいそれが彼に気付かれないことを、リラはずっと祈っていた。

舞姫の逃走（後書き）

長らくお待ちいたしました。第二十七話、いかがでしたか？
思い通りに執筆活動が続けられていないのですが、少しでも楽しんでいただけるように頑張りたいと思います。
ここまでありがとうございました。

聞けない続き

「こつちだよ、皆！」

エルリックと、留守番組だったアラン、エリゼが一行の荷物と馬を密かに旅の一座から持ちだしてくれていたようで、走って来た四人は馬に飛び乗った。

「ちょっと、リラ！その格好のままで平気なの？」

「何とかなるわ！心配しないで！」

ティアナの声にしつかりと答えてから、リラは手綱を強く握りしめて馬の横っ腹を蹴った。

「うわー、さすがね。」

その見事な騎乗ぶりに感心しながらも、ティアナも同じように馬を走らせた。

「少し走ったら休憩にするから、とりあえずその格好で我慢してくれ！」

フェリドはそう言って先頭を走った。闇の中を、七つの影が疾走する……。

一時間ほど馬を疾駆させた一行は、身を隠すのによさそうな林を見つけて、その中に入った。リラ、ティアナ、ジュリアの三人が離れた木陰まで歩き、リラの着替えをする。

「ああ、もう！旅服に慣れちゃったら、ドレスって面倒ね！」

文句タラタラで戻って来たリラに、全員が笑って見せる。とりあえず、そこで仮眠をとることとなった。夜の空気の冷たさが、身にしみる。リラは、ずっと寝つけずにいた。一人静かに、夜の闇の中に身を起こす。

『あれ、フェリド、起きてる……。』

闇に慣れた彼女の目に、ふと彼が本を読んでいる姿が映った。本を月の光に透かしてページを捲る長い指、それを見て高鳴る自分の鼓

動に、リラは理不尽さを感じた。こつそりと立ちあがって、少しずつ彼との距離を詰める。木陰に隠れて、彼女の足が止まった。

『うつ、どうしよう……。抱えて逃げてくれたんだし、お礼位言わなきゃ……。で、でも、どうしよう？何て話しかければいいの？』足音を殺して歩いたので、彼の方から自分に気付いてくれることもないだろう。そんなことを悶々と考えながら、彼女はしばらくその場に立ち尽くしていた。彼女が困り果てて、歩くに歩けず、戻るに戻れなくなったその時。

「で？リラ？君はいつまでそんなところに隠れている気？」

「きやあつ！」

突然彼に話しかけられた彼女は、その場に本当に飛びあがって驚いた。本から目を上げてその様子をみたフェリドが、柔らかく目を細める。

「そんなに驚くことないだろ。ほら。」

そう言つて、自分の隣をトントン、と手で叩く。リラはあまりにもひどい反応のし方をしてしまったな、と少々気恥ずかしさを感じてほんのりと頬を染めて彼が指定した場所に座った。

「ど、どうしてわかったのよ？足音だつてしなかったでしょう？」

俯いて口を尖らせ、いかにも気に入らないというように彼に問う。

彼女がそんなかわいらしい態度を取るのは珍しいな、と思い、フェリドはまた笑みをこぼした。

「足音はしてないけど、ほら、君がいたのは風上だろう？百合の匂いがしたからね、すぐにわかったよ。」

リラの髪、体から香る、僅かな百合の香り。フェリドは、そんなもので背後に彼女が立ったことを判断していたのだ。

「それで？何か用ですか、姫君？」

「あ、あの、えつと……。」

いざ言おうと思うと、口がうまく動いてくれない。上唇と下唇がくっついてしまったような気がする。リラがそんな風にまごつく様子に、フェリドは何かを察して微笑んだ。

「君を抱えて逃げたことは、気にしないでいいよ。考えてみれば、あれは僕の作戦が悪かったんだ。当然ああいう服に着替えさせられることを想定しなきゃならなかっただろうし、リラは普段ベタベタさせてくれないから、ああいう時でもない、ね。」

バキッ！フェリドの顔面に、リラの拳が深く埋没した。数瞬後に、彼の方からパツと離れる。

「いたたっ！な、何も殴ることないだろー？」

「顔がいやらしいのよ、顔が！」

「そ、そこまで言うことないだろ？大体、この顔で今まで多くの女性を虜に……。」

「へえー、その変態です、って書いてあるような顔だね。」

リラにそこまで言われては、フェリドはぐうの音も出ない。一人どことなく落ち込んだそぶりを見せる彼に、リラは少々申し訳ない気がしていた。

「あ、でも、まあ……。ありが、とう……。」

真っ赤な顔で、彼とは決して視線を合わせないように横を向きながら。それでも彼女が口にした、心からの感謝の言葉。フェリドはそれに優しげに微笑んで、彼女の髪に手を伸ばした。いつもなら変態の一言でパツと身を翻されてしまうが、今夜の彼女は大人しく彼にその髪を撫でさせた。

「っ……！」

ふとフェリドと視線が合って気恥ずかしさを感じたリラは、慌てて話題を探した。

「あ、さっ、さっき、何の本読んでたの？」

頬が真っ赤なのは自分でも気付いていたが、それ以上に、彼に引き込まれそうになる自分をどうにかしたいと思って、彼女は足元に落ちていた本を手にとった。

「あ、これ……。」

「トリランタ出身の君なら知ってるよね？君の祖国に伝わる、風の巫女の伝説だよ。何か旅のヒントになることはないかと思って読ん

でたけど、全然ダメ。ほら、考えてみたら、この通りに復活の儀式をやっても、まだどこかの国が雪に閉ざされるだけなんだ。そんなこと、もう終わりにしたいからな。」

「そうね……。」

そう肯定の返事をしてから、ふと彼と目線が合ってしまった。青紫の瞳は、堪え難い何かを持っている。

「リラ、この旅が終わったら……。」

「も、もう寝るわ。おやすみなさい。」

フェリドの言葉を途中で遮って、リラはさっさと自分の寢床に戻ってしまった。彼が何を言おうとしてくれたのかは、わかる。だからこそ、続きを聞きたくないと、聞いてはいけなと思うってしまった。聞けば、必ず応えてしまう。それは、自分を護って亡くなった人に対する、裏切りになってしまうのだ。

『苦しい……。』

ギョツと眉根を寄せたまま、彼女は眠りについた。

聞けない続き（後書き）

お久しぶりです、霜月璃音です。

更新が遅れてしまって申し訳ありません。もっともっと頑張ろうと思いますので、どうか今後もお付き合い下さいませ。
ありがとうございました。

光の魔力

一行は、一路北を目指していた。今いる大陸の北側にある国、クラータに入国しようと考えているのだ。そしてそこから南下してこの大陸最後の国を目指し、そこから船に乗って最後の大陸を目指そうという考えだった。そしてその最後の大陸には、彼らの最大の敵、ハーバナントの国がある。

「何としても、ハーバナント行きだけは避けたいよね……。」

エルリックが苦笑いをしながらそう言う。彼らは今馬を疾駆させているのだが、強風のせいで思う通りに前に進めてはいなかった。

「確かにそうね……。文字通り敵地に取り込む、ってことでしょう？ 必要なら仕方ないけれど、できれば遠慮したいわね……。」

リラが彼の言葉に同意してホウ、と嘆息した、その時。

ゴゴゴゴゴゴゴッ……！

「きゃあっ！」

突如地鳴りがしたかと思うと、地面がぐらりと大きく身震いした。

その地震の異常を察知したフェリドがいち早く馬を飛び降りて、地面に大地の剣を突き立てる。すると大地の剣が淡い燐光を発して、やがて清らかな音色を辺りに響かせたかと思うと、不気味な地震が嘘のように治まった。

「ほう、大地の子が聖具を手に入れたという情報は、本当だったらいいな……。」

どことも知れぬ闇の中から聞こえて来る、底冷えしてしまうほどの不気味な声。

「ちょ、ちよつと、どこにいるのよっ？ 姿も見せないなんて、ずるいんじゃないのっ？ それとも、見せられない程哀れな姿をしてるとかつ？」

「ちょ、ちよつとティアナさん！ 何も敵を挑発しなくても……。」「アランがそうティアナを諷めた、その時。ゆらり、と一行の前方に

長身の影が出現した。いや、もはや長身と言う表現だけでは済ませられない。彼のその背丈は、ゆうに二メートルを超えていた。黒光りする鋼鉄の鎧をその身に纏い、波打つ白銀の髪を腰の辺りまで伸ばしている。そして何よりも目を引くのは、彼の額から真っ直ぐに伸びた、二本の太い角だった。

「な、何よ！美形なんじゃない！」

「だからティアナさん……。」

ティアナの言葉を聞いて、アランが再び溜息をつく。そんな滑稽なやりとりをしながらも一行は、眼前に現れた敵としか思えない程の殺気を纏った相手を、油断なく見据えた。

「な、何の用ですか？」

エルリックのその質問にいささか眩暈を覚えながらも、フェリドは何とか踏ん張り、苦笑を浮かべた。

「聞くまでもないだろ、エルリック……。目的はおそらくアノンワースと一緒だ。」

「じゃ、じゃあ、敵さんの狙いはお姉様なんですか？」

ジュリアのその言葉に一同の視界がクラアツと揺れた。

「その言い方はどうかしらね？ジュリア……。」

「す、すみません。まだお名前を伺っていなかったものですから……。」

自分の身が狙われているというのに、いまいちその危機感を身近に感じられないというのが、今のリラの率直な意見だった。それはありがたいことなのだが、今は目の前の敵に集中しなければ。

「我は闇の国ハーバナントの四大忠臣、デスナイト。そこな風の乙女をもらいうけに来た。」

そこでふと長身の影が姿を消す。いち早く彼の意図に気付いたのは、フェリドだった。

「リラ！……くっ！」

「っ……！」

リラの目の前に、先程まで離れていたはずの長身の影が立つ。あま

りの速さに、彼女は言葉を失った。アノンワースの動きも早く、強かった。だが目の前の彼は、おそらく彼女の比ではないほどの力を秘めている。その存在全体から、桁違いの魔力が滲み出ているのだ。「くそっ！」

いくら力を込めても、足が動かない。リラを助けに動きたいのだが、彼らの足は彼から滲み出る桁違いの魔力、そのほんの一部の力によって地面に縫い止められてしまっていた。フェリドの口の中で、奥歯がギリリと噛み締められる。

「ほう、あの方の所望される女と聞いてどれほど美しい女かと思えば……。隣に首を飾れば、さっぞ見栄えがするだろうな。」

「残念ね、この首は胴体と一つなの。バラバラにされてやる程お人好しじゃないわ。」

リラの精一杯の強がりを受けて、彼はクツクツと喉の奥で不気味に笑った。

「見え透いた強がりだな。だがそれもまた一興。悪くはない。」

背筋を冷たいものがつたうのは、嫌でもわかっていた。それでもリラは、必死に相手の隙を探す。おそらく、チャンスは一度きり。それを逃せば、勝算はゼロになってしまう。

「まあいい。今回はお前を連れに來ただけだ。お前の処遇は、あの方が決めて下さるだろう。」

「私に触れるな！」

リラがそう強く叫んだ、瞬間。彼女の瞳が夜空の星のような冴えた冷たい光を放ち、無遠慮に伸びて來た手が光の結界によって弾かれた。ジュウツ、と肉の焦げる音がする。その後には、鼻をつく嫌な臭い。

「リラ！」

金縛りが解けたフェリドが駆け寄って來て、強烈な斬撃をデスナイトに向かって放つ。

「ちいっ！」

間一髪のところでした。それをかわして、デスナイトはフェリドとの間合

いを離した。切り落とされた銀髪が一房、光の残滓に煌めく。

「おのれっ！なぜお前が、光の力を使うっ？」

怒りに瞳をぎらつかせているデスナイトの咆哮とも思いき問いかけに、リラが身をすくめる。それを背に庇うように立って、フェリドは白刃のような鋭い瞳で彼を見据えた。だがやがてデスナイトは、その激しい怒りを微塵も感じさせない程冷たい瞳をして、口角を笑みの形に吊り上げた。

「……まあいい。今日のところはこれで仕舞いだ。興がそがれた。次に会う時を楽しみにしている。」

ぶわ、と突風が吹き荒れて、皆が思わず目をつぶる。その瞬間に、デスナイトの姿は闇の中に消えていた。おそらく彼が逃走したのは、傷を負った手で七人の相手をするのは骨が折れると判断したためであろう。

「リラ、怪我はないの？」

いち早く冷静さを取り戻したティアナが駆け寄って来て、彼女様子を眺める。

「うん、大丈夫よ。それより今の、ティアナがしてくれたの？」

彼女が言いたいのは、先程の光の結界のことだ。しかしティアナは、ひどく緩慢な動作で首を横に振った。

「いいえ、リラ。私じゃない。……あれは間違いなく、あなたが發動させた魔法よ……。」

「で、でも私、風の力を使えても、光の力なんて使えないはず！だって、光の子じゃないわ！」

困惑してに皆を順に見つめるが、誰もが首を横に振るだけ。そんな中、今までずっと黙っていたエリゼが口を開いた。

「何にしろ、良かったじゃない。敵はいなくなっただんし。雨が降り出す前に、先に進もうよ！」

「そうだな、とりあえず今はそうしようか。宿に入ればまた話す時間もあるだろうし……。」

フェリドの言葉に、全員が納得して馬に乗る。だが、皆が一様に腑

に落ちない、という顔をしているというのも真実だった。

光の魔力（後書き）

お久しぶりです、霜月璃音です。

更新が大幅に遅れてしまつて申し訳ありませんでした。

この物語の終盤に矛盾を発見してしまい、修正するのに時間がかかつてしまいました。修正が完了いたしましたので、おそらく今後は大丈夫だと思います。

まだお気に入り登録して下さいの皆様、本当に、本当にありがとうございます。

決して投げ出した訳ではありませんので、ぜひ今後もお付き合い下さいませ。

魂の記憶

「光の、力……」

リラは、口の中で何度もその言葉を繰り返していた。

デスナイトを退けたあの光の障壁は、確かに彼女が作り出したものだという。確かにあの瞬間、あの男が無遠慮に伸ばして来た手を振り払いたと思った。しかし、光の魔力を使おうとは一欠片も考えなかったのだ。ましてや、自分にその力が使えるとも思っていなかった。光の力は、魔族が最も忌み嫌うもの。それを意図せずに風の子である彼女が使いこなせたというのは、一体どういうことなのだろうか……？

「やっと宿が見えて来た。あそこに泊めてもらおうか」

エルリックの提案に反対する者は、誰一人としていなかった。皆、デスナイトに出会った後からは走り通しで、疲れ切っていたのだ。馬を厩舎につないで、入口をくぐる。中年の男が、一行を値踏みするように眺めて来た。

「二部屋お願いします」

フェリドの言葉に、宿の主人である中年の男は、黙って鍵を差し出した。番号札から見ると、隣同士の部屋らしい。

「部屋は階段を上がってすぐの二部屋だ。夕食は六時から九時まで。朝食はつかないが、いいか？」

「構いません、どうも」

フェリドは軽く会釈をして、彼を待っている一行の元へ戻って来た。それから、各々自分の荷物を持って部屋に向かう。男性陣の部屋が階段側、女性陣の部屋がその奥、ということで別れた。

「……疲れた」

リラはそう言うと、ぱたりとベッドに倒れ伏した。ティアナが苦笑しながら、口を開く。

「そりゃ疲れるわよ。慣れない力を使った後に、ここまで走り通し

で来たんだもの。夕食の時間には起こしてあげるから、少し休んだら？」

「……うん、ありがとう……」

そう彼女が返事をしてから、数瞬後。すやすやと安らかな寝息が、ティアナ、ジュリア、エリゼの耳に届く。

「……リラ、寝ちゃったね。すっごく疲れてるんだろ？……」

「それを言うなら、あなたもね。リラと一緒に起こしてあげるから、少し寝たら？」

珍しくティアナが自分に対して掛けた優しい言葉にしばらく瞠目してから、やがてエリゼは素直に頷いた。

「任せたわよ、おばさん」

「誰がおばさんじゃあ！」

「ティアナさん、しーっ！」

エリゼの言葉にいちいち過剰反応して見せるティアナを、ジュリアが宥める。そのまま部屋にいたら、うるさくしてリラも起こしてしまうだろうと言うことで、ジュリアとティアナの二人は部屋を出て、談話室に向かう。どうやら他の宿泊客たちは部屋にいるらしく、誰もいない談話室で二人がくつろいでいると、フェリドとエルリックが現われた。

「アランは？」

「食料の確認を頼んだよ。……僕たちの話に、巻き込む訳にはいかない」

ティアナの言葉にフェリドが答えた後で、四人の顔が暗くなる。彼らの議題は言うまでもなく、なぜリラに光の力が使えたか、だ。

「リラ、かなり消耗してるわ。光の力を使った反動だと思うけど……」

「ああ。そうだろうな……。でもあの力は、間違いなく彼女の中から発せられたものだ。光の波動に、僅かに風の波動が混ざっていた……」

眉を寄せて真剣な表情で考え込む二人に、ジュリアが声をかける。

「……あの、本当にあり得ないことなんでしょうか。私たちが、本来自分が持ちえないはずの、別の魔力を使うということは……」

エルリックが、溜息混じりに口を開く。

「少なくとも、相対する魔力を使うのは無理なんじゃないかな。自分が本来持つている魔力と、使おうとする魔力がお互いに共鳴して、莫大な力を生み出すだろうからね。人間の体じゃあ、とても耐えきれないと思うよ」

「確かに、エルリックの言う通りだな……」

そこでフェリドは一度、溜息をついた。しばらく沈黙が流れてから、また彼が口を開く。

「……とりあえず、今回リラが使ったのは大地の力ではなく光の力だった。だが、たとえ理論的には別の魔力を使うことが可能だったとしても、何の修練もなしにその力を使うことなんてできないんじゃないか？ 元々僕たちの魔力は、光の神族だった時に持っていた力が魂に記憶されていて、そこから力を引き出しているはずだ。……力を使った時の感覚で僕はそう思ったんだけど、皆は？」

黙ったまま三者が三様頷いて見せる様子を眺めてから、フェリドがさらに口を開く。

「だから僕たちは、自分が属していた部族の精霊の子として転生している。だがリラはまだ、覚醒もしていない。記憶の戻っていない状態で力を使っているから、あまり莫大な力は使えないはずだ。それなのに別の魔力まで使ったんだから、消耗するのは当然だと思うだけど……」

「どうしてそんな状態で、修練してもいない光の力を引き出せたのか。結局、議論はそこに戻るんでしょ？」

ティアナが溜息混じりに吐き出した言葉に、フェリドが強く頷いて見せる。ジュリアが細い息とともに、ポツリと言葉を口の端から漏らした。

「……これも、魂の記憶、でしょうか……」

他の三人の視線が、一斉に彼女に向けられる。黙ってその視線を

受けてから、彼女は再び口を開いた。

「……お姉様の、風空の姫としての魂のどこかに植えつけられた、力の記憶……。それが、あの窮地に現われたのではないでしようか……？ 確証はありません。ただ、お姉様が風空の姫として生きた時代になんらかの形で光の力を得ていれば、それも可能はずです。ましてや、記憶がないからこそ引き出せた力なのかもしれません。風空の姫としても記憶がない程、昔に植えつけられた力なのかもしれません……」

「本当に、生まれる前、ってことだね……」

ジュリアの言葉を引き取って、エルリックが結論部分だけを言う。ジュリアがコクリと頷いてからしばらく、四人は何の反応も見せず、に固まっていた。

「全ては、僕らの生まれる前にあるということか……」

グツと、拳を握る。原因も解明できないまま彼女の状態を放置しておいていいものなのか、彼はとても不安だった。そして、これ以上の結論を出せない自分が、齒痒い……。

「くそっ……！」

どうしようもない苛立ちをフェリドに感じさせながら、時はゆっくりと流れて行った。

魂の記憶（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。

またまた久々の更新となつてしまい、申し訳ありません。

早くも三十話目で、少々動揺しております。

本編はまだまだ、やっと謎が見えて来たところです。これからもうぞお付き合います。

ここまでお読み下さった皆様、ありがとうございました。

外伝 何でもない日常……

「ちょっとおばさん、邪魔しないでよー！」

「だーれーがおばさんですってえー？　こんなぴちぴちの美人捕まえて何を言ってるのよ、このガキンチョはっ！」

「……自分でぴちぴちの美人だなんて言うかしら、普通……」

ある日の夕食の準備中、食器を運ぶエリゼと盛り付けにかかるうとしたティアナが鍋の前でかち合い、先程の会話が発生した。そして、ジュリアの隣で彼女の料理を見よう見まねで学んでいるリラが、呆れ半分で最後の台詞を口にしたのだ……。

そんなリラの様子は華麗に無視して、ティアナは再び矛先をエリゼに向けた。

「大体ねー、あんたにおばさんなんて呼ばれる筋合いはないわよ！　この先も、ね！　あんたと血がつながることなんてないんだから！」

そう言う意味の「おばさん」じゃないような、と思いつつ、リラは自分に矛先が向けられることを恐れて、仕方なくエリゼを犠牲にした。いや、彼女ならきつと、この女王様と対等に渡り合うだろう……。そんなことを一人で考えながら。

「そんなことわからないわよ！　ほら、ジュリアとエルリックが結婚するんじゃない？」

エリゼはそんな爆弾発言をしながら、拾った木の枝で地面に何かを書き始めた。それをティアナが、隣にしゃがみ込んで覗き込む。

「そうしたら、ジュリアはおばさんの弟のお嫁さんでしょ？」

「そうよ、それがどうかしたの？」

自分が話題に上っていることなど露知らず、とうのジュリア本人はシチューの仕上げに取り掛かっていた。

「そして、そのお姉ちゃんのリラが、お兄ちゃんと結婚する……」

この子密かにそういう色恋沙汰には敏感なのね、などと、ティア

ナは内心舌を巻いていた。そんなことで感動しなくても良いはずなのだが……。

「ほら、そしたらおばさんは、私のお兄ちゃんのお嫁さんの妹の旦那さんのお姉さんってことになるでしょ？」

「うん、多分そうね……。なんか複雑すぎて嫌になって来ちゃったわ。さりげなく二回もおばさんって言われてるのも腹立つし」

聞いていなかったふりをしながら、しっかり数は数えていたようだ……。エリゼは、その部分については笑って誤魔化した。

「ほら、よくわからないことになるし、面倒くさいからおばさんってことでいいじゃない。ね？」

「いい訳ないでしょー！ それに複雑な言い方をして誤魔化したみたいだけど、それって結局、あんたは私の義妹の姉の義妹ってことじゃない！ つまり私の妹ってことよ！ 多分！」

多分、所までしつかりと力を込めて言い、ティアナはそう開き直った。どうやら、おばさんにだけは絶対になりたくないらしい……。
「もう、わかったわよー！ そんなにむきにならなくてもいいじゃない、おばさん！」

「また言ったわねー！」

先に譲歩する態度を見せた分、もしかするとエリゼの方が大人かもしれないな、などとまたもや一人で考え、リラはシチューを盛り付けるのであった……。

旅の間の何でもない日常は、いつかは大切な思い出に……。

外伝 何でもない日常……（後書き）

お久しぶりです、霜月璃音です。

二カ月も更新ができませんでした……。

どうかお許し下さい。

今回は短い外伝を投稿させていただきました。

そしてまったくの私用で申し訳ないのですが、学期末のレポートが溜まっていて、今月中の更新は難しいです……。

本当に申し訳ありません。どうか見捨てずお付き合い下さい……。

それでは、ここまでお読み下さった皆様、本当に、本当にありがとうございました。

織物

「ダメ、か……」

フェリドがホウと溜息をついて、馬の背に跨った。他の皆も、一様に落ち込んだように馬に乗る。

彼らはたった今、クラータの王城から出て来たところだった。これから街の宿屋にアラン、エリゼの二人を迎えに行つて、この国を後にするのだ。

一行の顔色が優れないのは他でもない、闇の子がこの国でも見つからなかった、ということが原因だった。ハーバナント行きがますます濃厚になって来たので、自然と彼らの足取りも重いものになってしまっていた。

「ほら、いつまでも暗い顔してたつて仕方ないですよ！ 時の聖具、でしたっけ？ この国にある時の神殿への立ち入りの許可はもらえたんですよ？」

宿屋に戻つて来たリラ、ジュリア、フェリド、ティアナ、エルリックの話聞いたアランは、彼らを精一杯元氣付けようとしてそう言つた。いくらか顔を明るいものにもどしながら、ジュリアが笑う。

「ええ、もちろんです。……そうですね。まだシンナンとホーゼリアが残っていますから、暗くなるのはちょっと早いですよね！」

「……そうだね、ジュリア。ジュリアの言う通りだ！」

「余所でやりなさい、バカップル！」

エルリックの言葉に嬉しそうに笑つて見せるジュリア、そしてその二人にティアナが呆れたようにそう言つと、その場に笑いが溢れた。

その後、一行は宿屋を出て街道沿いに南下することにした。次に目指すのは、この大陸最後の国、シンナンだ。

「シンナンって、確か……」

リラが記憶の紐を解くように紡いだその言葉に、フェリドが続けた。

「ああ、僕らの国とは少々違う発展の仕方をした、面白い文化の国だね。言葉も違うし、精霊に対する信仰もない。彼らの場合は、この世の根源を作り上げているものは四神と呼んでいるらしいね」

彼のその言葉に頷いてから、リラももう一言、付け足す。

「私、あの国の織物が大好きなの。ほら、色もとても鮮やかだし、どれをとっても華やかでしょう？ トリランタではあまり好まれなものであったけれど……」

質素なものが良いとされ、見た目の華やかさよりも質の良さが重視されるトリランタでは、シンナンの織物はあまり好まれていなかった。しかしリラはその華やかさ、煌びやかさ、そしてその中に表現されている自然への畏敬の念をいうものを感じ取るのが好きで、友好の証として毎年贈られてくる織物を毎年楽しみにしていた。

「ルクタシアではかなり重宝されていたよ。ラツツイは？」

ティアナとエルリックの姉弟が顔を見合わせてから、ティアナが口を開く。

「そう言えば、毎年どこにやってるのかしらね……？」

エルリックが呆れたように溜息をついてから答えた。

「……姉さん、知らないの？ 毎年姉さんの服になってるじゃないか。後は、母上の」

「ふーん、実はシンナンの織物がどんなのだったか知らなかった、とか？」

フェリドの得意気な顔に、ティアナが思い切り反発した。

「な、何よ？ しつ、知らない訳ないじゃない！ 失礼しちゃうわね！ そそそ、そうね。そう言えば、毎年ドレスなんかに使ってもらった気がするわ」

「その年でもの忘れかー、大変だな、ティアナ！」

「あーっ、あんなところに空飛ぶ織物っ！」

「へっ？ どこどこっ？」

ティアナの古典的な罠にはめられたフェリドの鳩尾に、強烈な突きが見舞われた。あまりにも突然なことだったために、フェリドは馬上で大きくバランスを崩し、何とか落馬の危機だけは回避したものの、そのままむせ込んでしまった。

「い、今のは……ゴホツゴホツ、ひどく……ない？ ゴホツ！」

「何よ？ 騙される方が悪いのよ。わかった？」

そう開き直って見せるティアナに、フェリドはまだ恨みがましい目を向けている。その横で、リラがポツリと呟いた。

「確かに……。今のなんて、普通は騙されないもの。騙された方が悪いのかも……」

「うつつっ……」

彼の行動を一刀両断するその言葉に、フェリドはただ落ち込むしかできなかった。

織物（後書き）

お久しぶりです、霜月璃音です。

やっと春休みが始まりました……。それまでのレポート地獄が長かったです。

今回は、何となく聞き覚えのある地名が出て来ていたり（初めて聞いた方、ごめんなさい！）しています。

またまた短いお話となってしまうましたが、ここまでお読み下さっている皆様、どうもありがとうございます。

実は悪女？

「ここが……時の神殿？」

「……何か、ちよつと気持ち悪いね……」

「馬鹿ね、エルリックー！ こう言うのは、神秘的、って言い方を
するのよ！」

感じ方は人それぞれでいいんじゃないかな、と心の中でティアナの言葉に反抗しながら、フェリドも他の皆と同じように神殿を見上げた。白い石造りの神殿には蔦が何重にも絡み付き、さらに神殿自体が、深い霧に包まれている。どこからか水のせせらぎが聞こえて来る。おそらくは、神殿の裏手に小川でもあるのだろう。しかし、普段なら心穏やかになるその水音も、今は神殿そのものの不気味さを醸し出す道具の一つとなっていた。

「これ……どこかから中に入れるんでしょうか？」

「どうでしょうね？ この蔦を突破するのは、かなり骨が折れると思いますよ……」

ジュリアの問いかけにアランが答えている陰で、フェリドとティアナが目配せだけの作戦会議を終了させ、ティアナがふと神殿の周りを探索する足を止めた。

「そう言えば、お腹空いたわねー」

「そうだね、そろそろ昼食にしても良いかもしれない。アラン、食事当番を頼めるかな？」

「お安い御用ですよ」

アランは昼食作りを快く承諾して、背中から荷物を下ろした。他の皆も、自分が持っている物の中から昼食作りに必要であろう物を取り出す。

「うーん……エリゼとリラは、アランの手伝いをしてくれるかな？
僕らはもう少しこの辺りを見て来るよ。ここに間違いないんだろ
う？ エリゼ？」

「うん、まだ遠くからだけど、何かに引つ張られてる感じはする。でも、もつと奥に行かなきゃダメみたい……」

「あーら、ガキンチョが珍しく大人しいわね」

ティアナの嫌味に食いつくこともなく、エリゼはふいと顔を背けてしまった。

「ちよつとー、あんたがここで何も言わなかったら、私が弱い者いじめをしてるみたいじゃないのー！」

「ティアナ、皆いつもそうだと思うてるから、今更氣にすることないと思うわ」

リラが爽やかな笑顔を向けて言ったその言葉に、ティアナはたじたじになってしまう……。

「リラ、最近どんな性格が歪んで来てるわよ……」

「あら、誰かに似たのかしら？」

「リラー！ 君は本来そんな子じゃないはずだ！ もつと可憐で、清楚で、優しくて……」

「さようなら」

フェリドの必死の懇願からもひらりと身をかわしてしまう。どうやらこの旅で、新しい何かをつかみ始めた者もいるようだ……。

「ねえ、ところで、誰かこの神殿の入り口知らないの？」

三人に危険な昼食作りを任せたフェリド、ティアナ、ジュリア、エルリックの四人は、それぞれの前世の記憶というものを照らし合わせれば入口を思い出せるのではないかと思つて、ひそひそと四人で作戦会議を行っていた。

「私は……残念ながら地上に降りた時もここには来ていませんので、何も知りません。ここに来たのは、初めてなんです……」

「僕もだよ。だってここつて……創造神の神殿、だよね……？」

「そうよ、それが問題なのよ！ そんな恐ろしい所、普通に考えたら誰も近寄らないわよー！」

「ティアナ、しーっ！」

フェリドは唇に人差し指を当てて、エリゼたちの様子を柱の陰から窺い、それからまた話に戻った。

「ここは確か、人間との対戦の時に、地上に創造神の威光を示すために立てた神殿だろ？」

「そうよ！ あんた軍神とか呼ばれてなかった？　なんでそのあんたが神殿の入り口も知らないのよ？」

ティアナの言葉を受けて、フェリドはこめかみに指を当てて唸った。

「それが……入口の所、一番蔭が茂って、とてもじゃないけど突破できそうにないんだよね……。それでついでに別の入り口を探してたし、思い出そうともしてただけど、全然ダメで……。そこでだよ、エルリック」

「……嫌だよ……。そんなことしたら、僕は今日の内にきつと雷に打たれて死ぬことになるからね」

「でも、それが一番手っ取り早いわよ」

「やりませんよ、姉さん……」

彼らが揉めているのは、エルリックが炎で蔭を焼き払ってはどうか、という突破法についてだった。フェリド、ティアナとしてはそれが一番早くかつ正確な方法なのでぜひ実行に移したいのだが、とうのエルリックが、創造神の怒りを恐れて断固拒否している、といった状態なのだ。

「そうですか……」

「……だがここに、エルリックの意思を曲げられる者が、一人。」

「残念ですね……。困りましたが、他の方法を探しましょうか？」

何かいい方法があるといいのですが……」

その事実にいち早く気付いたのは、ティアナだった。

「そうよね、ジュリア。ごめんなさい。エルリックが情けないからこんなことに……。困ったわねー。ジュリアがこんなに困ってるのに、エルリックは助けてもくれないのねー……」

「い、いや、そういう訳じゃ……」

そこでフェリドも、ティアナに悪乗りした。普段自分が虐げられているせいか、非常に楽しそうだ……。

「そうだよなー。僕だったらリラが困ってるなら、創造神の神殿でも、地震で崩す位するかもなあ……。それなのにエルリックは、入口の蔦も焼いてくれないのか……」

そしてこれは意地悪な二人には計算外だったのだが、ジュリアの押しの一言。

「ダメですか、エルリック……？」

困ったようにほんの少し首を傾げて見せる様子が、またすごい。ティアナもフェリドも、ジュリアが計算してやっているのではないかと一瞬疑ってしまったほどだ。

「うつ……。わ、わかった、やるよ！ そうだよな、ちょーっと入口の雑草を焼いて、ちょーっと御邪魔するだけだもんね！」

「そう、そうですよ、エルリック！」

二人で盛り上がるバカカップルをしり目に、ティアナとフェリドの二人は溜息をついた。

「……ジュリアって、意外と悪女なのかもね……」

「……あり得るわね……」

とりあえず次の見通しが立ったので、二人はバカカップルを置いて先に食事当番たちの元に戻って行った。その背中がやけに疲労感に満ちているのは、きっと気のせいだろう……。

実は悪女？（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。

やっ和一話書きあがりました……。

メンバーの意外な一面（？）と言うものが出せたお話かな？ と個人的に考えています。

遅くなってしまっ大変申し訳ありません。

相変わらずの遅筆ですが、見捨てずお付き合いいただければ幸いです。

どうぞよろしくお願いいたします。

不毛な戦い

「よし、じゃあ、やるよ……」

次の日、悪女ジュリアに寄せられたエルリックは、創造神の神殿に火を放った。……がしかし、あまりに遠慮がちに放たれたそれは、入口の蔦を少々焦がしただけで、すぐに消えてしまった。

「あのさー、エルリック。やるならもう少し盛大に……」

さすがのフェリドも、呆れ顔で笑って見せる。その様子を見て、リラがホウ、と溜息をついた。

「そうよ、エルリック。こんなの過去の遺物に過ぎないもの。昔は神様が祀られていたのでしょうけど、今はただの廃墟になってるじゃない。恐れることはないわ」

「……」

知らないということは恐ろしいな、と思ったのは、前世の記憶を取り戻している四人。もしリラも記憶を取り戻していたのなら、仮にも元創造神の神殿に火を放つなど、恐ろしくて考えられない言うに違いない。

「ま、まあ、エルリック。ほら、今回の場合は事情が事情だし、きっと神様も許して下さるわよ……」

ティアナはそう言いながらも顔面蒼白で苦笑いをしている。せめて顔と台詞を合わせる努力をしてくれよ、姉さん。エルリックはそう心の中で呟いて、今度こそ入口の蔦のカーテンを焼き切るだけの火力で火を放った。若干、指先が震えているが……。

ゴオゴオと燃え盛る炎……。その間に、一行の頭上に雷が落ちて来る……。などということはなかった。炎の熱気の間から現われたのは、闇に満ちた、シンと静まりかえった荘厳な空間……。それは、この神殿が経験した悠久の時の流れというものを語りかけて来るかのようでもあった。

「あー!」

エリゼは短くそう声をあげると、一人先に中へと駆けて行つてしまった。

「待てよ、エリゼ。一人じゃ危ないだろ！」

そう言つてアランも彼女を追いかけて行き、続いてリラも神殿の中へと駆け込む。四人組は……神殿の前で道の譲り合いをしていた。御先にどうぞ、レディー」

「あら、どんな危険があるかわからないもの。こういう時は紳士が先に入るべきではなくて？」

「ほ、ほらジュリア、後ろは危険だから、僕が……」

「あらエルリック。私、前の方が危険だと思いますけれど……？」

四人とも、一番最初に入ろうとはしない。一瞬全員で顔を合わせながら、コクリと頷き合う。

「行くわよ、せーの！ じゃんけんぼん！」

それぞれが思い思いのものを出したまま、一瞬固まる……。

「ちよつとフェリド、どうしてグーじゃないのよ？」

「いや、こういう時はいつもと違うものを出した方がいいでしょ……」

……

「あいこ、だね……」

「ですね……」

その後全員、ゴクリと唾を飲む。そして。

「あーいこーでしょっ！」

「またかよ……」

そうして四人は、先に神殿に入ってしまった三人の後ろ姿が見えなくなっていることにも気付かず、神殿の入り口でいつまでも不毛で地味な戦いを続けていた……。

不毛な戦い（後書き）

おひさしぶりです。

長い間お待たせしてしまつて、本当に申し訳ありません。そしてまだお氣に入り登録をして下さっている皆様、今回このお話までお読み下さった皆様、本当にありがとうございます。風空の姫、三十四話をお届けいたします。

最近が多忙で、一日が三十時間になればいいと思う今日この頃です……。

これからも更新が遅くなってしまうことがあるとは思いますが、決して未完のまま投げ出すということはありませんので、もしよろしければ最後までお付き合い下さい。どうぞよろしくお願いいたします。

創造神

「外観に比べて、随分広いわね……」

外では不毛で地味、かつくだらない戦いが繰り広げられている時、先に神殿に入った三人は、すでに神殿内の探索を真面目に開始していた。

「あ！」

エリゼは何かを引き寄せられるかのように駆けて行き、閉ざされた古い木の扉に手を伸ばした。その瞬間、リラは何かを察知した。
「エリゼ、ちょっと待って！　そこはダメ！」

リラの制止を聞かず、エリゼは思い切りその扉を開いた。ギィ、と軋んだ音が侵入者を拒む静寂の中に響き渡る。

「伏せる！」

アランがそう言つて、エリゼを床に押し倒した。

ヒュンツ！　一瞬遅れて、鋭い呼気が彼女の耳元を通過する。一瞬前まで彼女が立っていたその場所に、銀の矢がピンと突き刺さっている……。石造りの床の小さな破片が、辺りに飛散した。

「アラン、さすがね。よく気が付いたわ。エリゼ、大丈夫？」

「リラさんのおかげですよ。エリゼに先に注意してくれたでしょう？　あれがなかったら、俺も気付きませんでしたよ……」

リラの言葉に答えながら、アランは自分が床に押し倒したエリゼも引き起こした。エリゼは、半分放心状態になっている。

「ちよつとアラン！　怪我してるじゃない！」

リラのその声でハッとエリゼも我に返り、自分を助けてくれた彼の腕を見下ろした。

「アラン、血！」

「大丈夫だ、かすり傷だよ。ちよつとよけ損ねただけだ。それより、もう一人で突つ走るなよ。危ないっていうのがよくわかっただろ？」

「……ごめんなさい……」

素直に謝る彼女の頭をポンポンと撫でてから、アランはニコリと笑って見せた。その腕に、リラが簡単な止血を施してやる。

「でもエリゼ、そこが目的地なんじゃないかしら？　祭壇、みたいな物があるけれど……」

キュツと結び目をきつく締めて、リラはエリゼにそう言ってから先程の部屋の中を見た。

そこだけピタリと時の流れが止まっているかのような、静寂……。しかしそれは決して不気味さを感じさせるようなものではなく、むしろ時の雄大さというものを感じさせた。

「っ！　そうみたい！　私、行かなくちゃ！」

エリゼはそれだけ言い残すと、ふらりと先程の祭壇がある部屋の中へと姿を消した。彼女が部屋に入ったその瞬間に、独りでに扉が閉ざされる……。その荘厳な音は、今まで見て来たすべてを残された二人に語りかけるかのようにもあつた。

「腕、大丈夫？」

リラの問いかけに、アランは気持ちのいい笑顔で答えた。

「大丈夫ですよ、エリゼにも言いましたけど、かすり傷です。それより、エリゼは……？」

「……わからないけれど、精霊の御導き、といったところじゃないかしら……」

彼女が消えた扉の向こうを、二人は並んで心配そうに見つめた。

「うん……」

「目覚めたか」

その頃、二人が自分の身を案じていることを知らないエリゼは、まばゆい光の中で目を覚ましていた。どこかに聞き覚えのある、懐かしい声……。

「ここは……」

「生きる者と死せる者の世界の狭間だ。お前は、なぜ自分が生きる者の世界に産み落とされたか、覚えているか？」

まばゆい光につつまれた、真っ白な世界。そう、自分が本当にいるべき場所は、ここ……。それなのに、生の世界に自分が生まれた、理由は……。

「……はい」

エリゼはそう答えてから、声の主の姿を探した。いるはずだ、まばゆい光の向こう側、神の玉座に腰掛ける、神々しくも恐ろしいその姿……。

「創造神様……」

彼女のその呼びかけに答えて、創造神は唇を笑みの形に、ゆつたりと持ち上げた。

「本来天使としてこの世界をゆつたりと漂うはずだったお前を、蝕まれゆく世界を救うために生きる者の世界へと送ったのだ。お前は私のよりしろとなるべき者……。……覚悟はよいな？」

「はい、創造神様。私の体を、生の世界への足がかりになさるおつもりでしょう？ 創造神様は、ここから離れることができないから……」

彼女のその言葉に、創造神は人の世界で言う自嘲気味な笑みを浮かべた。

「悔しいことに、その通りだ……。彼の者が私をここに封じて久しい。だが、その間に私も打つべき手は打った」

それから創造神は、どこか遠くに目を向けた。おそらくその視線の先にあるのは、未来……。

「……お前を含めた全ての精霊の子たちが揃って生まれた。世界は変革の時を迎えている。私も、いつまでもここに縛り付けられている訳にはいかないから……」

エリゼがその言葉に強く頷く。それを見た創造神は、ひどく緩慢な優しい動作で笑みを浮かべた。その顔は、その外観や纏っている神気とは似ても似つかない、穏やかなものだった。

「……覚悟は、できているようだな……」

玉座から立ち上がった創造神は、ゆつくりとエリゼに歩み寄った。

足音も衣擦れの音も一切させず、ただ、ゆったりとした歩調で……。それからゆつくりと、彼女の頬に手を伸ばす。

「これよりお前は、生きる者の世界での私のよりしろ。変革の時を迎える世界とともに見つめようではないか……。……」

最後の言葉は、エリゼには聞きとることはできなかった。すうと、意識が暗闇の中へと引きずりこまれていく……。最後に残った記憶は、彼女を見つめる、慈愛に満ちた眼差しだった。

キィ……。

今度は、先程軋んだ荘厳な音を立てた扉は、控えめな音をさせて開いた。

「エリゼ！ 大丈夫か？」

心配そうなアランの声に、彼女はいつもよりも少し、弱々しい印象を受ける笑みで答えた。

「うん。ちょっと頭ぶつけちゃったみたいだけど、平気……」

そこに、外にいた「チーム役立たず」がようやく追いついてきた。フェリド、ジュリア、エルリック、ティアナの順に並んでいる……。

「どう？ 何かわかった？」

フェリドは、リラの迫力ある怒りの眼差しに恐る恐るそう訊ねた。直後にリラは、怒気を纏っているにも関わらず、この世の花では到底及ばない程の美しい笑みを浮かべる。

「どう、ですって？ 今更何しに来たの？ もうエリゼは試練を受けて、とつくに戻って来てるわよ？ ああ、知らないわよね。入口でじゃんけんに夢中になっていたみたいだし」

「ご、ごめん、リラ。ただ、これにはふかい事情が……」

青い顔で必死に言い訳の言葉を探すフェリドだったが、弁解の余地はないらしい。リラは、ふいつと彼から顔をそむけてしまった。

「テ、ティアナ、何とか言ってくれよ……」

「無理よ。だってあなたが真剣にじゃんけんをしてたのは真実じゃない」

ついには一緒にじゃんけんに熱中していた他の面々からも見捨てられる始末。誰にも救いの手を差し伸べてもらえないということがわかったフェリドは、そこで大きく溜息をついて肩を落とした。

「わかったよ、全部僕が悪かったんだ……」

真実落ち込んで見せる彼の様子を見て、一同は静寂に満ちていた神殿中に響き渡るような声で笑った。

一際明るい笑い声を立てるエリゼの指では、精霊の聖具である、時の指輪がキラリと輝いた。

創造神（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。

普段より早いペースで次話をお届けすることができました。とても嬉しいです。

エリゼにどういう変化がでるのは、次の戦闘シーンであきらかになるかと思っています。ぜひ注目してあげて下さい。

本来の姿

「ところで……」

ティアナが隣で馬を走らせていたフェリドに、彼にしか聞こえないように声量を加減して話しかけた。

「結局、エリゼって誰の転生だったのかしら……？」

彼女のその問いかけに、フェリドも思案顔になってしまう。しばらく前を見つめたまま、彼は眉根を寄せていた。

「……僕にもわからないんだ……。まあ、僕らだって全ての神々の名前と顔を知っている訳じゃない。僕たちが知らない神^{ひと}だったんじゃないかな？ ……ただ一つ、気になることがあるんだ」

彼がまた険しい顔で眉根を寄せたので、ティアナはその横顔に軽く首を傾げただけで答えた。すると、フェリドの言葉が続く。

「彼女には、まるで覚醒した様子が見られないんだ。魔力の増加も見られないし、ましてや前世の記憶の片鱗も覗かせない。僕たちは皆そうだったんだ、彼女だけが違うと言うことは考えにくい……」

「……確かに。前世の記憶を取り戻してからは、魔法の強さは桁違いよね……。記憶を取り戻すのと同時に、魔力の引き出し方なんかも少しずつ思い出しているから……」

だが、フェリドの言う通り、エリゼはその欠片も見せないのだ。試練を受ける前と何の変わりもない、いつも通り過ぎる彼女……。

「まあ、こんな平和な生活だけじゃ、せいぜい普段から滲み出ている魔力の強さだけで判断するしかないから、正確な判断とは言えないけどな……。戦闘になつてみないとわからない、か……」

「やめてよ、あんたがそんなこと言ったら喜んで出て来るわよ、あの山羊角の無駄に色気があるサド女が！」

ティアナはそんなことを一気にまくしたてて思い切り苦い顔をして見せた。

一行は現在、この大陸での最終目的地であるシンナンに向かって

馬を走らせていた。いつもと変わらない平和な時間の中で、誰もが神経を尖らせている……。そろそろ、闇の勢力からの攻撃があつてもおかしくない頃合いだ。アノンワースが来るか、デスナイトが来るか、はたまたまた別の敵がやつて来るかはわからないが……。

「ティアナ、そろそろ名前を覚えても良い頃なんじゃ……」

フェリドが彼女の剣幕にたじたりながらも、そう答える。

しかし彼女は、断固拒否、というように首を横に振った。

「嫌！ あんなの、山羊角の無駄に色気があるサド女で十分よ！」

「余計に長い気がするよ、それ……」

フェリドの呆れ顔に、ティアナはそれでも首を振り続けた。

それから幾日か後、彼らは、シンナンの国境まで後一日という場所まで馬を走らせて、睡眠をとるために野宿をしていた。近くに川が流れているので、水の確保に困ることもなく、絶好のポイントということができた。辺りはすでに闇が立ち込め、薄い月が辛うじて世界に光をもたらしている状態だ……。

「何だか、不気味な位に静かな夜ですね……」

ふと、リラの隣で明かりを確保するための焚火にあたっていたジュリアがそう漏らした。二人は今、見張りの役をしている。もう少し、あの薄い月が沈む頃に、ティアナとアランに交代してもらって睡眠をとる予定だった。辺りから聞こえて来るのは、仲間たちの安息の音……。

「本当ね、怖い位静か……。……！」

そこでリラが、何かに弾かれたように勢い良く立ち上がった。その様子を見て、ジュリアが首を傾げる。

「……ジュリア、皆を起こして。おかしいわ。近くに川があるはずなのに、水のせせらぎが聞こえない……。風の音もしくなつたわ……」

そこでジュリアもハツとして、眠りにについている皆を起こしに行った。リラは体を緊張させながらも、四方を警戒する……。視界に

ばかり意識を取られていて、外界からの他のサインが寸断されていたことに気付かなかった……。完全に、彼女たちの落ち度だ。

「あら、意外と鈍いのね。結界を張り終わるまで気付かないなんて……」

ブウォン、と空間が歪む音。その一瞬後に、彼女の視線の先にはアノンワースが立っていた。彼女を油断なく見据えたまま、ゆつくりと腰に佩いた剣の柄に手を伸ばす。

「フェリドのストーリーカーばかりしているお前と違って、忙しいからな。疲れているんだろう……」

そう答えながら、ゆつくりと剣を引き抜く。銀色の刀身が、細い月の弱い明かりに照らされて、儚げに煌めいた。彼女のその体は、敵に一人で相対しているという恐れから、僅かに震えている……。それを見てとったのか、アノンワースは不敵に笑った。

「あら、私だっていつも坊やを追いかけてなきやいけない程不自由している訳じゃないわ。用があるのはあなたの方よ」

リラの細い剣の隣に、闇の中にあってもなお、その温かい光で世界を照らす剣が並んだ。フェリドの、大地の剣だ。

「へえ、僕ってお払い箱？ まあ僕としても、その方がありがたいけどね。年上の女王様より、年下のお姫様の方がかわいいだろ？」

彼はそう冗談めかして言って、リラにウィンクして見せた。この非常事態に何をふざけたことを、などとも思ったが、彼のお陰で、震えが治まったことも事実なのだ……。

「ホホホ、相変わらずの減らず口ね。面白いわ」

「あんたも相変わらず悪趣味みたいね」

アノンワースの後に、ティアナがそう続けながらフェリドとは反対側のリラの隣に並んだ。ティアナの隣には、エリゼと彼女を庇うように立つアランの姿……。

「おばさんと同じこと考えてたなんて癪だけど、おばさんは本当に悪趣味そう！」

「……後で覚えていらっしやい、ガキンチョ……」

アノンワースとの戦闘の後、もうひと勝負あることをにおわせる
ティアナの発言に、一同は溜息をつきたくなってしまったが、そんな
余裕はなくじつと眼前の敵を見つめていた。

「結界まで張って本気みたいだけど……リラさんは渡さないよ！」

そう言って炎のやりを攻撃的に構えるエルリックの横で、ジユリアも彼に頷いて見せた。

「ホホホホ……。あなたたち、本当に面白いわね。でも……」

アノンワースの瞳が、ギロリと不穏に煌めく。彼女の肘から下が見る間に鞭のような形態に変化した。そして、彼女の体が少しずつ膨張していく……。角が伸びてその大きさを増し、彼女の全身は猫のような毛に覆われて行く……。それは、人としての形をかなぐり捨てた、アノンワースの本来の姿だった。

「そろそろ、終わりにしましょう……。行くわよ！」

アノンワースとの決戦の火蓋が、切って落とされた。

本来の姿（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。

相変わらず亀以下の速度での更新となってます。申し訳ありません……。

しかも、乞うご期待！ というようなお話の終わり方……。

できるだけ早く続きを投稿できるように、精一杯頑張ります！
ここまでお読み下さった皆様、どうもありがとうございました。

守る者、守られる者

「ちいっ！」

足元へと放たれた鋭い攻撃を、フェリドは後方に飛び退ってかわした。彼が先程までいた位置は、一瞬にして焦土と化した。そしてその後、着地と同時に地面を蹴って前方に飛び出す。

「甘いわ！」

アノンワースの右手から放たれた球形をした闇のエネルギーが、フェリドの体に吸い込まれる。

「ぐわっ！」

そのままの勢いで彼は後方に弾き飛ばされ、そのまま結界の壁に叩きつけられた。

「ぐっ、ぐぐっ……、ゲホオ！」

押さえていた口元から、大量の血液が溢れだす。

「フェリドっ！」

リラの叫びが結界の中に響き渡ったが、彼女の呼び声にも答えず、彼はその場に崩れた。

「よくもっ！」

ちょうど呪文の詠唱を終えたティアナが自分の目の前に複雑な紋様を描き、そこから荒れ狂う光の波がアノンワースに向かって直進した。

「小賢しい！」

光の奔流が彼女に到達する目前で、彼女を包む守護の壁が現われた。そして一瞬、その壁がまばゆい光を放ったかと思うと、ティアナの攻撃がその魔力を増して跳ね返って来た。

「なっ？ きゃああーっ！」

「ああーっ！」

咄嗟のことだったので十分な守護壁^{シールド}が張れず、攻撃を倍以上の威力で返されたティアナと、彼女のそばにいたジュリアが巻き添えを

食う形で光の爆発に飲み込まれ、フェリドと同じように結界の壁に激突し、動かなくなった。

その間にアノンワースに音もなく近寄っていたエルリックの槍の穂先が、鋭い呼吸とともに振り下ろされた。……絶妙の間合いだ！
ガンッ！ ブウンッ！ ドゴオッ！

「く、うつ……。かつ……。！」

勢い良く振り下ろされた槍の穂先を彼女は素手で受け止め、そのままエルリックを槍ごと振りまわして先の三人と同じように結界の壁に彼の体を打ちつけたのだ。

「馬鹿ね……。気付かれていないとでも思ったのかしら？」

今までにない程の闘気を漲らせて眼前に立つ強敵に、リラは足が竦んでいた。その彼女の元へ、ゆっくりとアノンワースが歩み寄って来る。

「クククッ……。精霊の子とは言え、所詮は脆弱な人の子。でも前は特別ね、風の子。何しろ、あのお方が所望する人の子なのだから……」

「よっ、寄るな！」

彼女が放った矢は、アノンワースが軽く前に突き出すようにして上げた右手の前でピタリと止まり、その足元に音もなく落下した。背筋に、冷たい物が走る。全身が栗立つ。彼女を守ろうと、味方は一人、また一人と倒れて行った。決して、彼らが弱かった訳ではない。人外の力を用いることができる、選ばれた者たちなのだから。しかし、眼前の敵はそれ以上の力を有しているのだ。それは、彼女が人外の者だということに他ならない……。

「リラさん！」

「失せろっ！」

彼女を助けるために駆け寄ろうとしたアランは、アノンワースが発した衝撃波に吞まれ、派手に後方に飛ばされて地面に投げ出された。そしてそのまま、動かなくなる……。

「愚かね……。叶うはずもないとわかっていて、何故私に挑むの？

……ねえ、取引をしない？ 風の子」

「な、ん……だと？」

アノンワースと正面から対峙して、油断なく弓を構えながらも、彼女は震えている。そんな彼女の様子を嘲笑うかのように、アノンワースは唇の端を吊り上げた。

「だから、取引よ、取引。お前が大人しく私について来るっていうなら、ここの全員、助けてあげてもいいわ。どう？ 悪くないでしょ？」

確かに、彼女の言う通りだ。自分が大人しく彼女に連れられて「あのお方」とやらの所へ行けば、残りの全員は無事でいられるのだ。何しろ、今までの闇の勢力の攻撃は、全て自分を狙ったことだったのだから……。だが。

「……保証は？」

「闇の深淵より人の世に降り立った、我が麗しき主の名にかけて」
「……。……その条件、飲もう」

闇の一族にとって主従関係というもののがどれほど重要なのかということはわからないから、彼女の約束は信用しない方がいいだろう。しかし、どちらにしてもこのままでは彼らはアノンワースによって罠に殺しにされてしまうだろう。それならば、自分が彼女に連れられるという形であっても、彼女をこの場から遠ざけた方がいい。

「そう、いい子ね」

そう言ったアノンワースの腕が彼女に伸びて来た、その時だった。
ザンツ！

「ちっ！」

鋭い閃光が空を裂き、アノンワースは後方へと飛び退った。

「だ……めだ、リラっ……！」

「フェリドっ？ そんな傷で動いたらっ……！」

彼女とアノンワースの間に、フェリドが割って入った。普通なら動けないような傷を負っている彼なのに、それでも彼女を守ろうと懸命にアノンワースの前に立ちはだかる……。何とか大地の剣を構

えてはいるが、肩が大きく上下に動き、呼吸が荒い。汗でぬれた前髪が額に張り付き、前方に目を凝らしてはいるが、苦悶の表情を浮かべている……。

「その傷で私と戦うつもり？ 命は惜しいでしょう、大地の子？」
アノンワースのその問いかけに、フェリドは無言で答えた。今にも崩れてしまいそうなのに、眼光だけは極めて鋭い。

「フェリド、ダメっ！ 怪我、してるのに……」

彼女の制止も振り切って、彼は眼前の敵を見据えた。アノンワースの口角が持ち上がる。

「そう、いい覚悟ね。楽には死なせてあげないわよっ！」

アノンワースの手に、音もなく暗黒の剣が握られていた。月明かりを受けてもまったく光を返さない、漆黒の刃……。それがフェリドの体に迫る。ねっとりとりらの感覚を絡め取るように、ゆっくりと時間が流れた。

チカツと一瞬、閃光が走ったような気がした。

ドゴオオオオオオオオッ！

突然の轟音と、眩しい閃光。リラは咄嗟にフェリドの体を引き倒した。そのまま守護壁^{シールド}を張ろうとするが、それよりも光の爆発の方が早い。

「リ、ラっ……！」

そう彼女の名を呼んで、光の爆発から彼女の体を守るように、フェリドは彼女の体を覆った。自分が守ろうとしていた彼に、今は自分が守られている……。

「フェリド、無茶をつ……！」

しないで、という続きは、光に飲み込まれてしまった。真っ白な光が、世界を焼く。真夜中の空が一瞬、真昼の輝きを取り戻す……。その後の静寂は、信じられない程のものだった。ほんの一瞬だったのか、気が狂うほどに長い時間だったのか……。世界の全てが、呼吸を止めているかのようにだった。しばし呆然としていた彼女の耳に、アノンワースの驚嘆こ声が飛び込んでくる。

「おっ、お前はっ？」

何が起こっているのか確かめるために、重い頭を振って体を起す。フェリドのお陰で光の余波をともに喰らうことはなかったのだ、どうにか起き上がることができた。

「……フェリドっ？」

外傷は増えていないが、あの光の爆発を至近距離で喰らったために、彼は気絶していた。息があることを確かめてから、自分を守ってくれた彼の体をきゅっと抱き締め、安堵する。他の面々も、それぞれ元の位置で起き上がり、一点を見つめていた。彼女も、彼らの視線の先に目を向ける。

「っ……っ？」

その先にあっただのは、アノンワースに対峙するエリゼの姿だった。

守る者、守られる者（後書き）

お久しぶりです、霜月璃音です。

早く更新しなくては、と言いつつもこんなに遅くなってしまいました。申し訳ありません……。

まさか車の免許を取るのがこんなに大変だったとは……！ と驚いています……。

毎度毎度のろまな更新ですが、今後もお付き合い下さるととても嬉しいです。

そしてここまでお読み下さっている皆様、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5488k/>

異国恋歌～風空の姫～

2011年10月9日16時43分発行